造營料所御寄進候、然者任去文明十二十三御寄附狀幷御奉書旨、可被打渡彼地於當山御代官狀如件、

文明十年二月十九日　彈正忠(花押)

永富因幡守(同人)殿

永富嗣久

氷上山領長門國厚東郡有保別府内參拾石地朽網彌次郎弘豐跡、事、段錢已下諸課役悉被免除畢、此旨可被存知之由、所被仰出也、仍執達如件、

文明十年三月十三日　散位(花押)

備中守(花押)

内藤彈正忠殿

十五日、戊申、義政、義尙ノ第ニ臨ミテ、遺教經ヲ聽ク、

〔蜷川親元日記〕六　二月八日、辛丑、曇晴、

一來十五日遺教經御奉物御扇廿本代六百疋事、如例可有下行之由、布施野(粟田口隱岐方ヘ、)州へ仰之旨申遣、使勝藏、

十五日、戊申、天晴、

一御成於御方御所、遺教經御聽聞、七郎殿御成御供、貴殿ハ此御所ニ御祇候、

御門外ニ被待申也、

先上樣、後御所樣、

御一獻、小林調進御門役自貴殿御勤仕、

十六日、己酉、天晴、夜雨、雷發聲如曆、

一朝より御一獻あり、觀世大夫被召て祇候、終日○以下闕カ、

十七日、庚戌、曇雨、

一御一獻、能あり、二番めより雨降、御廣椽よてあり、

還御、夜四時、七郎殿御供ニ御參、

〔實隆公記〕五　二月十七日、庚戌、雨猶未休、餘寒過法者也、○中略抑□□大樹有猿樂、准后自一昨夜遺教經御聽聞、御座云々、

三條西實隆ヲシテ、舍利講式ヲ讀マシム、

〔實隆公記〕五　二月十五日、戊申、晴、今日猶候番、佛涅槃日之□捧物各獻上之、於御前舍利講式讀申之、

安禪寺宮觀心尼ニ御捧物ヲ賜フ、

庭田雅行
白川忠富
尊敦親王
邦高親王

〔京都御所東山御文庫記録〕甲二十山城　御湯殿上日記　二月十四日、〇中略御

やうもつ女ゑうさうち、ない〳〵のむしゆ(ん脱カ)、このやうゐん源大(庭田雅行)納言、みん部卿(白川忠富)

万いらるゝ、御ふさ宮の御うさ、ふしゑ(邦高親王)ことのよりも万いる、佛の御まへゑや

帶三筋ヲ賜フ

あれ波さてられて、色々つけらるゝ、

十五日、あんをん寺とのへ、昨日御とく日ゑて、けさいつものとく御をひ三

ゑ(ん脱カ)たよし御事申さるゝ、つゐてに御さうし

もち御やうもつゑ万いる、めてさたゑ(ん脱カ)

うらせられく万いらをらるゝ、〇中略御うんきんゑてゝ、やうもつとも万い

られさるうさ〳〵、御くしゑて御くゐりあり、

佛ヲ打ツ

十六日、己酉御持佛堂ニテ、淨土雙六ノ御遊アリ、

〔京都御所東山御文庫記録〕甲二十山城　御湯殿上日記　二月十六日、御ちふ

つさうゑて、ゑやうとをく六あそゐす、佛うちたらん人を、ゑやうくをんあ

天將ヲ打ツ
地獄ヲ打ツ

るへしとささめら波ゝ、をけ殿、二てう殿、左少辨佛、御所さゐ佛のうゑうさ

せをゐします、こんをけ殿□□さうやさつ、宮の御うさ、上らぬ(花山院家子)、ひんうし(四辻季經ヘい脱カ)の

御うさ、てんしやう、ゐしゑとの、御あちや〳〵、やふさし(ん脱カ)やう中將ちこく、

十七日、よへの御をうふ、御ちやのこ五いろ御てしん御すゝりのふさゑ入、

邦高親王参加

御ちふつさうゑて御しやうくをんあり、

十九日、ふしをとのくをんきよなる、

○コノ後、雙六御遊ノコト、便宜左ニ合敍ス、

〔京都御所東山御文庫記録〕甲二十山城　御湯殿上日記　五月廿日、御さゆあ

そゐす、ゐしを殿も、おの御所れ御事ゑてあそゐす、おとこさちゑもうさせ

らるゝ、おもひ〳〵ゑ御てうしなとをもち宮、御まへゑての□□□くひおと

をる、

和歌題ヲ賜フ

十八日、辛亥皇子(勝仁)御所、月次御和歌會、

〔實隆公記〕五　二月四日、丁酉、晴、終日無殊事、自若宮御方月次御題被下之、

十八日、辛亥、晴、〇中略今朝若宮御方月次御短冊詠進之、

十九日、壬子、勸修寺政顯ヲシテ、鴨社造營ノ資ヲ、同社務祐躬ニ督促セシム、

〔親長卿記〕三十二

鴨社造營用脚可進上之由、祐躬縣主乍進請文、于今無音條、太以不可然、所詮

指日限可申、若有無沙汰者、可有御罪科之由、被仰下候也、謹言、

二月十九日

藏人（政國）辨殿

○祐躬造營要脚ヲ獻ズルヲ約シ、社務ニ補セラル、コト、九年九月七日ノ條ニ、祐躬ヲ改替スルコト、十年九月三日ノ條ニ見ユ、

義政、義尚、金光寺ニ於テ十念ヲ受ク、

〔蜷川親元日記〕六　二月十九日、壬子、曇、

義政等躍念佛聽聞

一七條道場御成、今日彼岸結願、お（躍）とり御聽聞之、先御方御所樣御成、御馬、其後御所樣、上樣御同車にて御成、貴殿（伊勢貞宗、貞親）七郎殿御供、

義政夫人ト同車

義尚棧敷義政立車

御方御所樣ゝ御棧敷ニ御座、御所樣ゝ御立車にて御聽聞、直ニ三十三間御堂へ御成、爲御方御所樣御頭風御祈禱、卅三人御參詣之儀也云々、御一獻あり、觀世太夫まいる、還御入夜、所司代（浦上近江守）爲御警固祇候、

義尚頭風祈禱

三十三人參詣ノ儀

〔晴富宿禰記〕二月十九日、壬子、晴、〇（略）中室町殿今日時正滿散、七條道場躍御聽聞、准后（義政公）、將軍御方（義尚卿）、御馬也、上樣（室町殿）、御同車、其外出車一兩（以上二兩）、車輿數丁、御比丘尼達御輿同舁連也、自七條直御參詣卅三間堂、於禮堂官（管）領（畠山左衛門督）申沙汰一獻云々、及昏黑還御、女中御同車、御方御所御馬也、公方被召具觀世、還御路次於御車邊音曲云々、今日落馬輩細河典厩（政國）并研（埒）和等云々、

三十三間堂ニ於テ酒宴　義政歸途觀世太夫ヲ車ニ召シテ邊ニ謠ハシム

細川政國等落馬

〔大乘院日記目錄〕三　二月十九日、室町殿父子、於七條道場被受十念、其次於三十三間及御酒、

彼岸結願

〔尋尊大僧正記〕九　二月廿二日、

一室町殿、先日於卅三間御堂ニテ、大御酒在之、悉以御同車云々、

三十三禮觀音經ヲ讀ム

廿六日、夜雷雨下、

一〇（中略）、春日祭ノコトニカ、二月三日ノ條ニ收ム、去十九日、彼岸、終日爲十念、七條道場ニ室町殿入御、先將軍御乘馬、次准后御車、次女中車、武家若輩共御供、於公家輩者兩人、藤宰相、橋宰相、廣於道場一獻在之、次三十三間御堂ニ御參詣、御共衆悉以三十三禮成之、觀音經讀之、一獻赤松、畠山官（管）領也、申沙汰云々、大御酒以外、還御ニ落馬衆濟々有之、無殊事、

〔雍州府志〕四　愛宕郡寺院門上　金光寺　在東洞院七條南、元空也上人之開基也、爾後一遍上人寓居以來爲時衆、號一夜道場、又稱七條道場、〇（略）中

〔薩藩舊記〕（前集二十八正文在之）　二十二日、乙卯、義政、書ヲ島津忠昌ニ下シ、遣明使船ヲ扶持セシム、

文明十年二月二十二日

（朱書）「文明十年六月廿三日到來」

就渡唐船之儀、度々被仰畢、仍正使副使以下在國中至歸朝、諸事無等閑可加扶持候也、

二月廿二日　（義政）（花押）

嶋津又（忠昌）三郎殿へ

○明主朱見深、幕府ニ復書シ、且銅錢等ヲ贈ルコト、本月九日ノ條ニ見ユ、

二十三日、丙辰、武田國信、犬追物ヲ行フ、

〔蜷川親元日記〕六　二月廿三日、丙辰、天晴、夜雨、

一武田殿馬場、當年犬追物始、貴殿、七郎殿御樽色々被持云々、二百疋、初檢見小笠原殿、後貴殿、

○コノ後、國信、犬追物ヲ行フコト、便宜左ニ合敍ス、

〔蜷川親元日記〕六　四月四日、丙申、天晴、

一武田殿馬場犬追物、同管領御張行、御折御樽被持、內外檢見、內小笠原殿、外貴殿、

十九日、辛亥、天晴、

一武田殿、犬追物、朝、

一武田殿又犬追物、晩、一獻あり、

五月九日、庚午、天晴、夕雨雷、

一於武田殿馬場朝犬あり、朝飯又二百疋あり、

十六日、丁丑、雨、午時より晴、

一武田殿犬追物、後百疋貴殿、七郎殿あそばす、

十七日、戊寅、曇、

一武田殿犬追物、

六月六日、丙申、天晴、夕立、

一於武田殿馬場、犬追物手ゐけあり、七郎殿あそばす、

廿八日、戊午、天晴、夕立、

一於武田殿朝犬あり、貴殿、七郎殿御出、

廿九日、己未、天晴、夕より夜雨、

一武田殿朝犬あり、貴殿、七郎殿御出、

七月五日、乙丑、天晴、夕立、

一武田殿朝犬、

八月十六日、乙巳、天晴、

一於武田殿犬追物、貴殿、七郎殿御出、

九月十六日、甲戌、天晴、

一於武田殿犬追物、二百疋貴殿、七郎殿御出、

十一月十一日、己巳、天晴、

一武田殿朝飯犬追物あり、御酒あり、

一色義直犬追物ヲ行フ

○一色義直及ビ山名政豐等、各犬追物ヲ行フコト、便宜左ニ合敍ス、

〔蜷川親元日記〕六　三月廿九日、辛卯、天晴、

一於一色(義直)殿犬追物、貴殿、御屋ゟさより御射手具足まて御出あり、蜷式同彦右、松平、

六月廿七日、丁巳、天晴、夕立、

一一色殿犬追物、貴殿御出、

八月十四日、癸卯、天晴、

一於一色殿犬追物あり、貴殿、七郎殿御出、

十月廿六日、甲寅、雨、

一貴殿、一色殿へ御出、朝犬あり、

廿九日、丁巳、天晴、

一一色殿ニ犬追物あり、貴殿御出、

〔蜷川親元日記〕六　六月十六日、丙午、天晴、

一貴殿、山名(政豐)殿へ御出、御太刀持、御馬青黑、翌日被引進之、

御同道御衆、

左京亮(貞敏)殿、次郎(貞親)殿、上野介殿、各太刀持、被進之、安藝刑部少輔殿、親元自彼方仰□□仍太刀持、奉獻之、

御湯つけ万いる、小笠原(政清)殿、武田中務大輔入道殿、併和筑前守殿、

御中酒一兩篇返万いる、吉阿、調阿、

犬追物百疋、あり、檢見小笠原殿、

犬後一獻、德房若子御出、自貴殿御太刀持、御馬黑被下之、翌日被引進、

管領畠山左衛門督殿、犬半より御出、蜷式部御犬〳〵御犬已後御座敷へ參、

畠山政長モ出座ス

山名政豐犬追物ヲ行フ

十七日、丁未、天晴、

一山名殿より御太刀、持御馬、河原毛、徳房殿より太刀、持、馬、蘆毛、昨日御禮、御使垣屋平右衛門尉、

二十四日、丁巳、義尚、二階堂氏行ニ命ジテ、源氏系圖ヲ書寫セシム、

〔兼顯卿記〕〇岩崎文庫所藏　二月廿四日、丁巳、陰、山城判官藤原政行二階堂來、自宰相中將殿、源氏系圖可書寫進上之由被仰間、條々可談合有子細云々、則對面、御當家清和源氏系圖之内、條々相談旨有之、以次頃之雜談、

二十五日、戊午、聖廟法樂和漢聯句御會、

〔親長卿記〕九　二月廿五日、晴、依召參内、有和漢聯句、參仕之輩、伏見殿、勸修寺大納言、新大納言、源大納言、予、勸解由小路前中納言（高清）、新宰相中將（實隆）、朝臣、俊量朝臣、元修藏主等也、新宰相中將執筆也、

〔實隆公記〕五　二月廿五日、戊子、晴、和暖也、早朝行水、自昨日有召之間、午下剋著衣冠參内、爲聖廟御法樂、有御和漢、予執□（筆）、御人數、若宮御方、伏見殿、勸修寺□□□、新大納言、源大納言、按察、勸解由小路□、下官、俊量朝臣、源富仲、元修藏主等也、今夜候宮御方、

參仕ノ人々

執筆三條西實隆

皇子

一條兼良、廣橋兼顯ノ和歌ヲ賞讃ス

披講ナシ

杉原賢盛、同長恒和歌會ノ人數ニ加ヘラル

歌題

幕府和歌會始、

〔兼顯卿記〕〇岩崎文庫所藏　二月廿三日、丙辰、晴、未明自禁省歸家、明後日宰相中將殿和歌御會、詠吟之外無他、入夜雨降、

廿五日、戊午、晴、未明町（廣光）黄門來臨、今日宰相中將殿和歌御會、愚詠草、密々可入禪閤之見參、可持參之由約束之故也、則被付翰墨返給、條々芳言之旨有之、午半剋著直垂、參宰相中將殿、懐帋隨身所也、懐帋被取重後、御人數各進上御太刀、無披講、不及讀上、懐帋二卷也、及晩歸宅、次向飛鳥宅（井殿カ）參賀今日之儀、入夜歸、

〔蜷川親元日記〕六　二月十日、癸卯、天晴、

杉原伊賀守賢盛、同安藝守長恒、御方御所御歌御會御人數ニ被召加、爲御禮貴殿へ被參申候、

廿五日、戊午、天晴、

一御方御所御會始、御題山霞、待花、祝言、

〔實隆公記〕五　二月廿五日、戊子（午）、晴、和暖也、〇中略抑今日大樹密々御會始也云々、

〇幕府月次和歌會ノコト、便宜左ニ合敍ス、

兼顯ノ和歌義政ノ舊詠ヲ以テ改メシムキ

〔兼顯卿記〕〇岩崎文庫所藏　四月廿五日、丁巳、晴、宰相中將殿御月次也、御座小河殿之間、各不及持參懷紙、令淸書遣飛鳥亭(井殿カ)、於私宅取重、持參小河殿云々、

廿七日、己未、晴、自宰相中將殿有御使、松阿、去廿五日御月次旅愚詠、先年室町殿御詠ニ被遊間、可詠直由被仰下、畏奉由申入、則餘分歌書改持參、申出元懷紙、終日祇候、小河殿御座也、

〔兼顯卿記別記〕〇岩崎文庫所藏　四月廿五日、晴、聖廟緣日也、祈念之外無他、宰相中將殿月次御會也、但御座小河殿之間、各懷帋遣右兵衞督許者也、

廿七日、晴、舊院聖忌也、自宰相中將殿有御使、松阿、廿五日御會予旅歌、室町殿舊御詠同類也、可改進之由被仰下、畏奉之由申入、頃之書改懷帋、持參小河殿、終日祇候、

〔續本朝通鑑〕百七十三後土御門天皇四　戊戌十年(文明)夏四月癸巳朔辛酉(二十九日)、義尙催倭歌遊、

〔兼顯卿記〕〇岩崎文庫所藏　五月廿五日、丙戌、晴、午初參宰相中將殿、月次御會日也、仍參候者也、懷紙書樣如恒、頃之前藤宰相右兵衞督、藤侍從、伊勢守以下參集、小時御出座、於御前讀上之、椙原安藝守讀進之、雅康卿懷紙披之、置文臺之上、讀終入御、各退出如每月、予終日祇候、入夜歸家、

歌題

貞宗樽ヲ獻ズ

歌題

義政ノ和歌

〔蜷川親元日記〕六　五月廿五日、丙戌、天晴、

一御方御所御會、御題夏雲、夏河、夏夜、

六月廿五日、乙卯、天晴、

一御方御所御月次御會、貴殿より御樽万いる、

御題野夕立、六月祓、山家燈、

〔兼顯卿記〕〇岩崎文庫所藏　七月廿五日、乙酉、晴、先午天參內、條々奏事、小時直參宰相中將殿、月次和歌御會也、先之人々參集、於御前讀進之儀如每月、御會後有犬追物、仍見物、入夜歸家、〇犬追物ノコト、正月二十五日ノ條ニ見ユ、

〔兼顯卿記別記〕〇岩崎文庫所藏　七月廿五日、乙酉、晴、午天參內、條々奏事、直參宰相中將殿、月次和歌御會日也、仍懷紙調之持參者也、愚詠注詠草、先之右武衞以下參集、小時於御前讀進之儀如先々、右兵衞督開懷紙、置文臺之上、凡如披講之時、平長恒杉原藝守、安讀進之、讀終入御、其後來月題各廻覽、秋夕、原月、眺望等也、〇中略、犬追物ノコトニカヽル、正月二十五日ノ條ニ收ム、今日室町殿御詠織女契久、

七夕のめくりあふ日は七車としをつむとも侘きしとそおもふ

此御詠近比重寶透逸之由、人々感勢無極、同愚詠、

兼顯ノ和歌

天あゝ地久しくやちきりゝん二の星の一おゝ弦ゐ

右武衛被褒美之、

二十七日、庚申、連歌御會、

〔京都御所東山御文庫記錄〕甲二十○山城　御湯殿上日記　二月廿七日、こよひ

うしんまて、御ゑん歌あり、

〔實隆公記〕五　二月廿七日、庚申、東風吹霽、餘寒又相侵、○中略自今朝有召之

間、晩□著衣冠參內、四辻宰相中將、內藏頭等令同道、可令守庚□□、仍御連歌

一折可有之云々、若宮御方、伏見殿、季□□□下官、言國、俊量等朝臣、元長、源富

仲祗候、御連歌□韵、及天明事終、

三河騷亂一色義直之ヲ省ミズ

義政夫人日野氏、細川成之ノ第ニ臨ム、

〔兼顯卿記〕○岩崎文庫所藏　二月廿七日、庚申、晴、○中略御臺渡御細河讃岐守宿所

云々、

〔蜷川親元日記〕六　二月廿七日、庚申、天晴、

一讃岐守へ上樣御成、貴殿御供あり、聰明殿も御出、子細者、就三河國時宜、自

去年無御出頭、仍明日も御成不有御參云々、不可然、彼國之儀、一色殿一向

參仕ノ人々

無存知候由、既以罰文言上之上者、可有出仕之由、一段上意之旨、以上樣被

仰出事也、○三河ノ亂ノコト、八年九月十二日、九年九月二十四日ノ條ニ見ユ、

廿八日、辛酉、曇、

一讃岐殿御出仕、當年ヒ出仕事也、貴殿御出、御太刀、糸、御馬、河原毛、御留主

三月二日、甲子、天晴、

一一色左京大夫殿御禮御申、就讃岐殿出仕事也、

まて、

一讃岐殿より御使、飯尾左衛門次郎、彌九郎殿明日御出仕次第事也、

近江守護六角高賴、使ヲ幕府ニ遣シテ、赦免セラルヽヲ謝ス、

〔晴富宿禰記〕二月廿七日、庚申、晴、六角江州守護代舍弟弓場ヽ、上洛守護御

免之御祝云々、巨細未分明、

〔尋尊大僧正記〕九　三月八日、

一自宗祗方書狀到來、伊庭之弟八郎上洛、六角進退事申入歟、○下略

十三日、

一自三乃書狀到來、西室僧正上洛之次歟、自慈門院送給、十五六日ノ間ニ土

伊庭八郎上洛

義視近江ニ兵ヲ出サントス

岐屋形ニ今(義視)出川殿可有御成云々、大儀共云々、御成以後江州エ可有發向支度云々、其故ハ伊庭八郎上洛ハ何事哉、六角ニ及問答云々、此子細彼使說也、書狀ニハ不見、〇下略

二十八日、辛酉、義政夫妻竝ニ義尚、始メテ細川聰明丸ノ第ニ臨ム、

〔兼顯卿記〕〇岩崎文庫所藏　二月廿七日、庚申、晴、明日細川聰明丸、室町殿渡御ヲ申入間、折十合遣之、

廿八日、辛酉、雨降、細川聰明丸宿所ヘ、室町殿渡御、

三月三日、乙丑、晴、〇中略次向聰明丸宿所、今度御成始無爲之儀賀之、則對面、降下庭上謝之、

〔蜷川親元日記〕六　二月廿八日、辛酉、曇、

一御成細川殿聰明殿御代はじめて御申、能あり、

〔實隆公記〕五　三月三日、乙丑、晴陰、桃花節、珍重々々、〇中略今夕遣使於細川、去一日、武家始而渡御、珍重之由、申送者也、

〔晴富宿禰記〕二月廿八日、辛酉、晴、入夜雨、〇中略室町殿渡御細河聰明丸第、讃州以下參會、上樣、御方御所同渡御、

義尚ノ供

〔伊勢家書〕〇後鑑二百二十五所載　文明十年二月廿八日、天晴、入夜、終夜雨、

一三御所御成、聰明殿代始、

一刻限未刻、還御後朝辰刻也、終夜大酒也、御快然、

一御方御所樣一番ニ御成、御乘馬鴇毛、立ものれ邊まて御下馬也、

御供

御劍役大館治部少輔尙氏　一色式部少輔政熙　大和兵部少輔政郡

伊勢右(左)京亮貞誠　長井太郎元清　武田彦五郎尙信

伊勢肥前守盛種　田村治部少輔親俊　伊勢次郎貞賴

星野宮內少輔政茂　小串次郎貞秀　伊勢七郎次郎貞豐

堺和與次郎政爲(堺下同ジ)　安東平五郎宗康　伊勢彈正忠貞固

伊勢八郎盛時

松阿　仙阿

一大御所樣御成、御輿也、

御供衆

細川淡路守成春　畠山又次郎　細川兵部大輔勝久

武田彦太郎信親　赤松孫次郎元祐　赤松刑部大輔則秀
伊勢守貞宗　同七郎貞綱　吉阿
走衆
竹藤右京進　後藤左京亮　廣戸刑部丞
能勢彌太郎　三上彌三郎　波々伯部彦四郎
一御臺様御成（御そり輿）
御供
千秋刑部少輔政範　松田六郎左衞門尉　大和彦三郎
（義政夫人ノ供）
塀和筑後守元爲　安樂左馬助政藤
一御供の女中御人數ゟ事
（供ノ女中）
德大寺殿御局　大館殿御局　春日殿
新兵衞督殿（御臺様祗候）
日野町殿御局　善法寺御局　民部卿殿
賀茂北向局（御方御所様祗候）
日野武者小路殿御局　岩松殿御局　小督殿

大御乳人
已上御車ゟて御參也、
一日野殿政資、讃岐守殿（成之）、同彌九郎殿（政之）、祗候也、
一右馬頭政國者、御供とゝ不被參、聰明殿御幼少間、每事典廐成敗云々、民部少輔政春も、御供ゟ不及被參勤、殊役者也、
一於寢殿、式三獻、兩御所様（大御所、御方御所）ゟいる、御配膳御供衆、
一進物如例、式三獻已後、於中門（公卿座）進上御馬、兩御所様被御覽、民部少輔殿被懸御目之、大御所様へゝ（河原毛）、御方御所様へゝ鴇毛也、各鞍置之、戸部うらうちを被著也、
御劒役御ゑんゟゑこう、聰明殿同祗候、典廐、伊勢守ゟと庭上ゝ祗候也、
如此御馬被御覽て以後、則會所へ入御、則三獻幷供御まいりて後、少御逗留ありて、觀世猿樂和泉殿ゟて在之、去文明二年十月、龍安寺小川亭へ御成御申時者、細川上野三郎御馬被懸御目之、應永卅一年二月、岩栖院御成御申時ゝ、故典廐道賢（其時彌九郎殿）被役之云々、
一御供之方々へ引出物事、民部少輔殿、各へ被申之、後日聰明殿以使者返給

（聰明丸幼少ニ依リ細川政國成敗ス）
（義政義尚ヘ馬ヲ獻ズ）
（式三獻）
（觀世太夫猿樂）
（供衆ヘ引出物）

之也、太刀又ハ金也、同朋衆ヘハ各別々々、女中衆又各別々々、
一御供衆、御方衆、走衆、座敷各別也、御臺御供衆者、奥ニ祗候ありて、手水被懸
申之、女中樣渡御候之時者、いたも如此候也、
一細川殿ヘ御成よかきり、還御よ御亭御こしに御跡よすおハち被參て、御
禮申也、

將軍細川第ニ臨ム時ノ禮

〔諸大名衆御成被申入記〕

一同名中（細川）にも、今の家々により、亭主如同門外に伺候を可有之、先年文明十
年二月廿八日、細川聰明殿代始の御成被申し時、細川讃州（成之、同息彌九郎政之、雖
伺候候、門外ヘハ不及被參、讃州ハ御一名、因爲御相伴衆の家如此歟、其比
ハ政之ハいまさ御相伴にも不被召加、御供衆よを不被參勤也、○略中
一聰明殿代始の御成候時、御馬被御覽候時、聰明殿御緣の上右の方ニ伺候
也、是童形の故云々、但三職の外ハ、雖爲童形、如此ハ不可有之歟、○略下

寶蓮華寺雜掌、寺領山城角神田名主職證狀ヲ幕府ニ請フ、

〔親元日記別錄〕中

一寶蓮華寺雜掌（清泉州）文明十二廿八、

寺領城州紀伊郡內右馬寮（本所三條殿）角神田里十六坪貳段名主職事、明德
已來買得相傳當知行也、然證文等、去年九月、濫妨奪取畢、可預紛失御下
知云々、

本所三條家相傳ノ證文ヲ奪ハルル

是月、太田道灌、禁制ヲ武藏平子鄕石川講所義ニ揭グ、

〔寶生寺文書〕○武藏

禁制

武州久良木郡平子鄕於石川談義所、當手軍勢濫妨狼藉事
右有違犯之輩者、可被處罪科之狀如件、
文明十年二月日　沙彌（太田道灌）（花押）

三月　大癸亥朔盡

一日、癸亥、御祝、當座和歌會ヲ行ハセラル、

〔京都御所東山御文庫記錄〕甲二十山城　御湯殿上日記　三月一日、御さゝ月いつものことし、ふしゝ殿御いゐ井むてゝくゐん御なる、御庭の花おもしろくをゆしめし、御ゑうさ、女ゆうさちをう〳〵、おとこさちまもよませらるゝ、

近臣官女和歌詠進觀櫻

義政對面義尚ニ參賀

廷臣諸將、義政ノ小河第ニ參賀ス、

〔兼顯卿記〕○岩崎文庫所藏　三月一日、癸亥、天晴、季春告朔、每事中心多樂也、幸甚々々、早旦先參賀小河殿、則准后御出座、武家悉構見參後、公家構見參儀如每朔、次參御臺御方、有御盃、直參賀宰相中將殿、御對面同前、拾遺、予兩人、於心中（御ヽ本カ）拜領御盃、予頃之祗候之後歸家、於東向御方祝儀如每朔、公武多賀來、於宰相中將殿、有御銚子事云々、予依沈醉不參、

幕臣等義尚ニ酒饌ヲ進ム

女中義尚ニ酒饌ヲ進ム

廣橋兼顯義尚ニ酒饌ヲ進ム

五日、丁卯、晴、午半刻許參宰相中將殿、御庭櫻盛之間、女房衆御銚子事申沙汰也、予去一日男衆□沙汰之時、依沈醉不參之間、今日進御銚子、土器物三、奈良酒一桶進上之、猿樂等祗候、及深更歸家、沈醉之外無他、

猿樂等祗候

三月二日、甲子、晴、及晚自春日局飛鴈札被示云、今日於御臺御方、女房衆御銚子事申沙汰也、持參者可然由也、可參候返答、仍急歸宅之處、事外沈醉之間、難參間俄不參、平臥之外無他、

三日、乙丑、節供御祝、

女中義政夫人日野氏ニ酒饌ヲ進ム

〔京都御所東山御文庫記錄〕○甲二十山城　御湯殿上日記　三月三日、御さゝ月いつものことし、

御祝祗候ノ人々

〔親長卿記〕九　三月三日、晴、入夜參內、依御節供也、

〔實隆公記〕五　三月三日、乙丑、晴陰、桃花節珍重々々、參伏見殿□□眞乘寺殿、內府亭、舊院上藺局等、秉燭時分參內、御□（脫カ）祗候人々、新大納言源大納言、按察、兵部卿、滋野井前宰相中將、民部卿（正親町公兼）右相公羽林、四辻宰相中將、下官（高倉小路實陰）、阿古々（衍カ）丸、言國朝臣、元長、源富仲、菅長胤等也、

〔兼顯卿記〕○岩崎文庫所藏　三月三日、乙丑、晴、桃花節尤珍重々々、早旦參賀小河殿、頃之准后御出座、公武構見參儀如朔日、於御臺御方御末有御盃、其後直參賀宰相中將殿、御對面之儀同前、政資、予兩人拜領御盃如每度、次參內、於典侍殿局有賀酒、○中略　次賀侍從亭、於東向御方祝等如先々、人々賀來如每朔、

廷臣諸將義政ニ參賀ス

義政對面義尚ニ參賀ス

御琴ノ飾

廣橋兼顯ニ命ジテ沙汰セラル

參列ノ人々

六日、戊辰、細川政國徵ニ依リテ、玳瑁ヲ獻ズ、

〔京都御所東山御文庫記錄〕甲二十山城　御湯殿上日記　三月六日、御ことのゐさりよりきて、さいま弁御ようゐうよりて、もう〳〵さつねさせらるれともゐきよより、右大辨よりおほせられく、むかの（細川政國）督よりさつねさせらるゝ、ゐりて去んしやうもる、右大辨所へ御ふミつかはされく、よろこひをはしめすよしをはをらるゝ、

義政夫人日野氏、十度飲ヲ興行ス、

〔兼顯卿記〕○岩崎文庫所藏　三月六日、戊辰、晴、八時有召、參御臺御方、十度飲御酒爲御人數也、准后、報慈院、惠聖院、權大納言局、御左古局、大慈院殿、予、民部卿局、小宰相局、小侍從局、以上十人也、御臺御方依御血道氣不聞食、御座此席、秉燭程十度飲事終、沈醉之外無他、

薩摩守護島津忠昌、同國荻原ノ地ヲ新田宮ニ寄進ス、

〔新田八幡宮文書〕三

新田宮

薩摩郡于畑名之水田荻原之內五反、爲御神事領、奉寄進之狀如件、

村田肥前守經安（花押）
平田右馬助兼宗（花押）

新田神社

執印殿

〔參考〕

〔地理纂考〕十薩摩國高城郡水引郷宮內村　新田神社（新田ハ、和名鈔ニ高城郡新多ヒトあり、今水引郷ニ隷リ、）

奉祀正殿瓊々杵尊、東殿天照大御神、西殿栲幡千々姫、（中略）○中隨神社、（中略）一の鳥居より三の鳥居まで、四尺許一段高くして芝生あり、是を蘭桂（ランカツラ）といふ、牛馬の往來を禁す、兩邊皆櫻なり、坂の下より忍穗井川あり、石橋を架せり、是を降來橋といふ、又左右より石橋を架して、諸人の通路とす、さて彼の蘭桂の左右に、神人等の宅あり、棟梁四家なり、第一を執印と號す、其次を權執印、又其次々を大撿校千儀と云へり、堀川（源）天皇の頃より神人の長よして、執印氏當社の印を司る、因て氏とせ、

七日、己巳、御祓、御撫物ヲ陰陽頭土御門有宗ニ下賜ス、

〔京都御所東山御文庫記錄〕甲二十山城　御湯殿上日記　三月六日、みの日れ御とらへ万いる、

文明十年三月七日

七日、御人きやういささるゝよ、内侍殿さしあひよて御ねとのゝうへよう
ちおりるゝ、のちよとみ(五辻富神)中ゑこうしていさす、御やう(上御門有宗)のうをよまと、いつもの
ことく御あてものりひていつる、やうて返万いる、これも御ゆとのゝうへ
よをく、

八日、庚午、興福寺、氷室社ヲ修造セントシ、棟別及ビ人別錢ヲ奈良町民ニ課ス、

〈大乘院日記目錄〉三　三月八日、氷室社造營料、奈良中棟別人別錢切之、龍花院方丈爲方光院修理自方棟別切之畢、

○氷室社遷宮ノコト、十一年八月八日ノ條ニ見ユ、

〈參考〉

〈大和志〉二神廟　添上郡　氷室神祠在南都登大路、都下四十四町共祭祀、毎歲九月伶人奏舞樂於靈時、祠後有氷室址、

畠山政長、其陣地室町第ノ東ヲ一條兼良ニ寄ス、兼良、居ヲ此處ニ移ス、

〈尋尊大僧正記〉九　三月八日、

一自宗祇方書狀到來、○中略禪閤御在所畠山方より廿五坪可進上云々、

十日、雨下、夕ヨリ

一禪閤御在所ハ、室町殿燒跡之東ニ畠山陣屋在之、面七間奥ヱ三間半在之、表七間奥行三間半

既以御移住云々、今法師之說也、

十五日、雨下、

一宗祇方より書狀到來、禪閤御在所定候條珍重也、但御在京今分ハ不可得也、又可有御下向も、外聞實儀不可然事也、珍事旨申給之、自予方可調法由申給之、宗祇之心を一分おり共、公方ニ持申度由申給之、近日風と越後國へ宗祇可下向云々、宗祇尋尊ニ兼良ノ庇護ヲ求ム

○兼良、細川政元ノ部下茨木某ノ宿所ニ遷ルコト、正月十八日ノ條ニ見ユ、

十日、壬申、一色義直、酒饌ヲ幕府ニ進ム、

〈伊勢貞助記〉○後鑑二百二十五所載

進上　文明十三十、於殿中一獻申沙汰アリ、

初獻　御太刀　一腰　安綱、

御馬　一匹　栗毛印目結、

三獻　御太刀　一腰　盛國、

初獻

三獻

五獻　　壓者飛鳥井雅康　　義政續歌會合ノ人數等ヲ聞ク

御腰物　一腰　行平、
五獻御太刀　一腰　家光、
御腹卷　一領　淺黄、
以上　一色左京大夫義直

廣橋兼顯、續歌ヲ行フ、尋デ、義政、之ヲ閲覽ス、

〔兼顯卿記〕○岩崎文庫所藏　三月十日、壬申、雨降、勸修寺、庭田、飛鳥井以下十餘人招請勸朝飯、仍有續歌、雅康卿出題、朝飯以後披講、飯以後、奉行布施下野守英基、清和泉守貞秀、飯尾加賀守爲信、同名大和守貞連等、各隨身一種一荷入來、仍各一首詠之、終日亂舞頗大飲酒也、及半更各歸、

十一日、癸酉晴、八時分參小河殿、○中略於御前昨日會合人數等有御尋、

十二日、甲戌、晴、○中略、義政宴ナスコトニカ、ル、三月十一日ノ條ニ收ム、一昨日當座一座被御覽度由、依仰召寄進上、

十一日、癸酉日野政資、義政ヲ小河第ニ饗ス、

〔兼顯卿記〕○岩崎文庫所藏　三月十一日、癸酉、晴、八時分參小河殿、今日侍從政資(日野)一獻申沙汰故也、自一昨日可祗候由仰之旨有音信、聊依餘醉遲參處、急可參由有召參候、及深更歸家、沈醉之外無他、烏丸儀(資任)同入道、同賀茂丸、武者小路大納言等祗候、

○僧尼等、義政ニ酒饌ヲ進ズルコト、便宜左ニ合敍ス、

〔兼顯卿記〕○岩崎文庫所藏　三月十二日、甲戌、晴、○中略今日於准后御方、男女比丘尼館、同比丘尼御所々々以下、銚子事申沙汰也、仍土器物二種一荷奈良酒也等進上之、仍自午半刻祗候、及曉天歸家、沈醉之外無他、

十二日、甲戌、下野專修寺ヲ祈願所ト爲ス、

〔專修寺文書〕○一伊勢

當寺事、爲御祈願所、可奉祈天下安全國家泰平之由、天氣所候也、悉之以狀、

文明十年三月十二日　左少辨(花押)

專修寺眞慧上人御房○歷代殘闕日記、常盤井家譜異事ナシ、

〔親長卿記〕九　三月十二日、晴、下野國專修寺申、御祈願所幷上人號事奏聞、眞慧去年被下住持勅裁、不被載某上人之由、仍重申請云々、

勅許、○本書、九年六月九日ノ條ニモ收ム、

○眞慧ニ專修寺門流ヲ安堵セシメ、幕府、之ヲ住持職ト爲スコト、九年六月九日ノ條ニ見ユ、

參會ノ人々　　綸旨

〔參考〕

〔下野國誌〕七閣僧房　専修寺（芳賀郡高田村にあり、則高田山と號す、當山ハ親鸞聖人大法成就の正覺山たるに依て、淨土眞宗の總本基なり、○略）

五派法系

第十世眞惠（慧）上人の時、寛正六年、伊勢國庵藝郡一身田に移し、文明十年、再び後土御門天皇より勅宣ありて住職すと云、○下略

専修寺伊勢一身田ニ移ル

十四日、丙子、正三位藤波秀忠ヲ從二位ニ敍ス、

〔内宮引付〕

一文明十年三月十四日　宣旨

正三位大中臣朝臣秀

宣令敍從二位、

藏人頭左近衛權中將藤原宣親奉

所被宣下從二位也、仍口宣案獻之、且存知、且可被告知神宮之狀如件、

四月二日　神祇大副判

宣旨

祭主下知狀

大司御館

從二位事、口宣並祭主御下知如此、仍獻覽之、可令存知給候、恐々謹言、

四月八日　大宮司判

謹上　内一三位殿　大宮司則長

〔公卿補任〕四十三　文明十八年　非參議正三位大秀忠　神祇大副祭主、

〔公卿補任〕四十三　文明十九年　非參議從二位大秀忠　神祇大副祭主、○本書及藤波家譜、秀忠ノ陞敍ナラン、誤ト爲ス、

〔藤波家譜〕號岩出祭主、從二位、神祇大副清忠卿男、母、秀忠元清定

敍從二位、

○日野政資等敍位ノコト、便宜左ニ合敍ス、

〔歷名土代〕

正五位下藤（日野）政資　文明十正廿八、

狛則行　同十正廿八、

山科諸大夫中務少輔階賴久（高階）　同十正廿八、

日野政資

狛則行

高階賴久

文明十年三月十四日

豐原直秋　同十正廿八、
園基富　同十正廿八、
北畠政宗　同十二、同四月廿九侍從、

〈實隆公記〉五　三月廿八日、庚寅、朝間雨猶不休、自午時晴、〇中略抑今日北畠加首服云々、敍爵事申之、則勅許、名字政宗也、

元服敍爵

〈兼顯卿記〉〇岩崎文庫所藏　三月廿八日、庚寅、晴、〇中略入夜著狩衣、向前藤宰相永繼卿亭、今夜北畠首服之間、加冠事、再三懇望之間、罷向者也、名字政宗、今日敍爵、

廣橋兼顯加冠ス

〈歷代殘闕日記〉八十七言國卿記　四月十九日、去月廿八日、北畠元服云々、予暮程ニ禮ニ行也、

豐原枝秋
同統秋

〈歷名土代〉（豐原）從五位下豐枝秋　文明十二十五、

同統秋、廿才、九　同十二十五、同十二三廿九筑後守、

〈地下家傳〉十樂人京都方　豐原統秋、治男、秋　文明□（十年二月十五日）□□□□□敍從五位下、三十一歳、同年三月廿九日任筑後守、

山科定言
敍爵
口宣案

〈歷名土代〉從五位下（山科）藤定言　文明十三一、

〈歷代殘闕日記〉八十七言國卿記　三月一日、當家ニハ、三歳ニテ爵ヲ申間、定名字、以甘露寺爵之事申入、則左少辨元長奏聞、天許、名字敎康、四月十四日、京都ヨリ人下、自甘露寺、此便宜ニ猿菊丸爵之口宣案下也、上卿日野中納言

甘露寺親長敎ノ字ヲ付スルヲ難ズ

文明十年三月一日　宣旨

藤原定言

宜敍從五位下

藏人左少辨藤原元長奉

〈親長卿記〉九　三月一日、晴、言國朝臣息敍爵事申之、名字敎康云々、予申云、敎字普廣院殿御字也、將軍御字不可付名字之由、有申置之人、不審、返答云、尋或仁之處不可苦云々、此上者不及是非、奏聞、勅許、其後猶予重申云、古來將軍御名被下之外無名乘之人、自然自武家有御不審者、無先例之分可被申歟如何、仍重談合之處、伺武命云々、不可然之由有仰云々、四月廿一日、言國朝臣息改名事、予可注給之由、自先日比申之、無沙汰催促之

鴨祐宣
同祐長
同信祐

間、今日注付之、實言、定言也、實言通大臣之名字、定言可然之由仰了、其分治定云々、

〔歷名土代〕

從四位上鴨祐宣　文明十三十三、
從五位上鴨祐長　同十三十三、
從四位下鴨信祐　同十三十五、

〔親長卿記〕九　三月十三日、晴、鴨社禰宜祐宣（從上四位）、河合禰宜信祐（從下五位）等一級事、先日奏聞之處、去年一級等御沙汰之間、不可叶云々、連年加級例注進、重今日奏聞勅許、

〔親長卿記〕三十二

從四位下鴨祐宣縣主宜敍從四位上、正五位下鴨信祐宜敍從四位下、從五位下鴨祐長宜敍從五位上、已上可被宣下給之由、被仰下候也、謹言、

四月四日　藏人辨殿（去月十三日勅許候、可爲件日付也、）

〔歷名土代〕

藤波清秀
同敏忠
藤波清光
同輔忠
安倍有忠
正親町三條實興
中山宣親
藤堂景安
勸修寺經熙
北畠政鄕

從四位下大清秀（藤波）　文明十三十四、
大敏忠（藤波）　同十三十四、
從五位上大中臣清光（藤波）　同十三十四、
大中臣輔忠（藤波）　同十三十四、
從四位下安有忠（安倍）　同十三十八、
從五位下藤敦直（花山院諸大夫）　同十三廿八、
正四位下藤實興（正親町三條）　同十四廿八、
從四位上藤宣親（中山）廿才、　同十五廿三、
藤堂右京亮景勝朝臣二男
從五位下中景安　同十六十二、
正四位下藤經熙（勸修寺）　同十八四、
從四位上源政鄕（北畠）　同十八十七、

〔兼顯卿記別記〕○岩崎文庫所藏　八月十六日、乙巳、晴、略、○中午半剋許先參內、以勾當祇候之由申入之處、條々被仰下旨有之、將又北畠中將政鄕（伊勢國師也、）朝臣從上之四位事申入處、不可有子細之由勅許也、去比八座事可申沙汰由令申間、予返答云、四位參議事勿論也、但自從下四位昇進之事、不打任間、先一級之事可申沙汰

由、令入魂間、昨日垂海入來、任入魂之旨、先一級事、可申沙汰之由令申之間、執奏者也、〇中略國司北畠中將一級事、則以奉書可被宣下由、下知頭中將許者也、

從四位下源政鄕朝臣宜敍從四位上、可被宣下給由、被仰下候也、恐々謹言、

八月十六日　兼顯

頭中將殿三條也、

紀位下知狀

〔歷名土代〕

丹波親康紀延說

從五位上丹（丹波）親康　文明十九、同十一九廿八、宮內權大輔、

從五位下紀延說　同十十二十、

從五位上藤家季　同十十二十七、

藤親賢　同十十二十九、

源爲經　同十十二廿九、

〔親長卿記〕九　二月廿九日、雨下、及晚晴、源爲、源仲賢等敍爵事奏聞、勅許、十五日、丁丑、義政、東福寺、普門寺、南禪寺等二、各寺領ヲ安堵セシム、

〔東福寺文書〕三〇山城

東福寺領諸國所々目錄在別紙事、所令還補也、早如元可被全領知之狀如件、

文明十年三月十五日　長老　准三宮（花押）

普門寺

〔東福紀念錄〕文明十年三月十五日、

准三宮賜東福寺領、可全領知之狀、御判物、

〔前田家所藏文書〕事林明證一

普門寺領阿波國大野本庄、近江國大原庄內大寶園名田畠、山城國散在田畠

幷屋地等目錄在別紙事、所返付寺家也、早如元可全領知之狀如件、

文明十年三月十五日

准三宮（花押）

南禪寺

〔南禪寺文書〕三〇山城

南禪寺領諸國所々目錄在別紙事、所令還補也、早如元全領知、可被專寺家再興之狀如件、

文明十年三月廿一日　長老　准三宮（花押）

〔青蓮院文書〕或賣卜者文書一三一號

同德隣庵

南禪寺德隣庵領所々目錄在事、所返付寺家也、早如元可全領知之狀如件、

文明十年三月十七日

准三宮（花押）

〔蜷川親元日記〕六　四月廿九日、辛酉、雨、晴陰、

同慈聖院

一就南禪寺慈聖院領事御狀

當院領攝州有馬郡內福嶋村事、如元令還附上者、被全寺家知行、彌被專

現當祈願候者、所仰候、恐惶敬白、

三月廿九日

慈聖院

此一通以三上奉之、則調進之、

○幕府、西軍退散ニ由リ、東寺等ニ所領ヲ還付スルコト、九年九月二十六日ノ條ニ、勸修寺竝ニ實相院ニ寺領ヲ安堵セシムルコト、同年十月十六日ノ條ニ見ユ、

邦高親王竝ニ近臣宮女酒饌ヲ獻ズ

二十日、壬午、花ノ宴、當座和歌御會、

〔京都御所東山御文庫記錄〕甲二十　御湯殿上日記　三月十九日、御庭の

○山城

花ゑふしを（邦高親王）殿、女をうゑち、をんしゆゑ源大納言（庭田雅行）、ゐゝきまちの宰相中將（公兼）、を

謠曲

（白川忠富）ん部卿なと御てうし申さゝ、内ふ殿（三條公敦）万いらをられく、御さる万いらをらるゝ、大ゝゐの御ゐと（信量）ゐとめす、御むろをもいれ（仁和寺宮道永法親王）万いらをらるゝ、もりなとめしてうゑ寺おとあり、

十度飲

廿日、昨日の御ゐん（カ）をん寺御さゝあり、大ゝゐの御ゐと御さる万いらをらるゝ、ひろいしをもめす、二色一ゐ万いらをらるゝ、このゐゐ玄け野井新（敬國）宰相なとも、御てうし万いらをらるゝ、兵衞督（飛鳥井雅康）もめす、御むろ昨日のまゝ、庭田□□□□□□御さありて、御さるもさせらをく御万いり、つうをん寺殿も御万いり、これも御てうし万いる、さうさあり、十と万いりをあり、くらの督玄うとゐなくて、ふもし、御さる、いゐなしなと万いらをらるゝ、

道永法親王等歸院

廿一日、御むろ、つうをん寺殿、めうゐう院の宮け御方御返あり、御さゐ月万いる、

祇候ノ人々

〔親長卿記〕九　三月廿日、晴、一兩日就花御賞翫有一獻等、及大飲、仍彼一ケ條聊無沙汰云々、

〔實隆公記〕五　三月廿日、壬午、晴、自禁裏有召之間祇候、進上御銚子、今日祇候人々、內府（太炊御門信量）、右大將源大納言、花山院大納言、滋野井ゝゝ、民部卿、右兵衞督、右

當座和歌
題　讀師三條公敦
講師甘露寺元長
題者飛鳥井雅康

宰相中將、四辻宰相中將、右大辨宰□、下官、元長、以量等也、（宋雅業脱）

御當座一首通題、禁中花芳、各書短冊、有披講、讀師內大臣、講師元長、發□右兵衛督（聲）題者也、及曉天大飲、各醉倒了、

〔兼顯卿記〕○岩崎文庫所藏　三月廿日、壬午、晴、自典侍殿局有文、爲奉書、今日砌下花可有叡覽、必可祇候由仰也、祝著畏存旨言上、仍八時分□□□□□土器物兩種、

奈良酒

奈良酒令隨身者也、內大臣、右大將以下數輩祇候、有御當座、題者右兵衛督、雅康卿禁中花芳、各廻覽之後、於御前悉詠進、淸書短尺、有披講、讀師內大臣、講師藏人左少辨元長、及曉天歸家、沈醉之外無他、愚詠如此、題注右、

兼顯詠歌

〔雪玉集〕春　禁中花芳

咲まさる香ぞうくはしみ九重乃花乃雲井ゐ今日もくらしつ

實隆ノ詠歌

山名元之、伯耆定光寺竝ニ曹源寺ニ寺領ヲ安堵セシム、

〔定光寺文書〕○伯耆

伯耆國定光寺幷曹源寺領所々當知行等之事、任代々寄附旨、領掌不可有相違之狀如件、

文明十年三月廿日　源元之（山名）（花押）

住持

○山名敎之、定光寺竝ニ曹源寺ニ寺領ヲ安堵セシムルコト、永享十年八月三日ノ條ニ、同政之、又寺領ヲ安堵セシムルコト、文明十五年正月二十八日ノ條ニ見ユ、

大內政弘、內藤弘矩ニ命ジテ、田原親盛ノ兵粮料所長門赤間關阿彌陀寺領半濟分ヲ同寺ニ還付セシム、

〔伊藤文書〕

豐後國田原治部少輔親盛令參候、仰御扶持之由申之間、長門國赤間關阿彌陀寺領半濟分事、文明三年四月十七日以來一旦被借召、爲親盛兵粮料所內被預置畢、然處親盛事令歸國、去十日捧上表狀之間、可被還補于當寺之由被仰出畢、早可被打渡彼地於寺家之由、依仰執達如件、

文明十年三月廿日　遠江守（相良政任）（花押）

散位（花押）

三河守（杉重隆）（花押）

内藤彈正忠（弘矩）殿

上杉定正、長尾景春、大石顯重ヲ武藏二宮城ニ攻メテ之ヲ陷レ、是日、定正、太田資忠ト兵ヲ合セテ、景春及ビ千葉孝胤ヲ羽生ニ攻ム、景春戰ハズシテ走ル、尋デ、資忠、伯父道灌ト共ニ、景春ノ殘黨本間近江守等ト、相模奥三保ニ戰ヒ、之ヲ破リテ甲斐ニ入ル、

景春二宮城ニ入リ小机城ニ後援スル景紘孝胤敗走ス

〔太田道灌狀〕（朱書「定政」）○前肥

一修理大夫こゝ、親候入道相添、河越こ候之處、景春令蜂起、淺羽へ打出、吉里こ一勢相加、大石駿河守在城地二宮へ著陣、小机陣へ致後詰、廻謀略候之處、（朱書「文明十」）三月十日、自河越淺羽陣へ差懸追散候之間、景春者成田御陣參、千葉介相談、小机返馬、羽生峯取陣候、同十九日、自小机陣、同名圖書助（資忠）一勢相添、河越へ越、翌日廿日、向羽生陣、修理大夫寄馬間、千葉介、景春不及一戰令退散、成田御陣逃參候、方々儀共如此候之間、小机城四月十日（一イ）令沒落候、相州こも御敵城共五六ヶ所候、專金子掃部助小澤城令再興相拘候、當方分國候間、急彼等可有追放旨雖申仁候、先當國令靜謐、速御迎以參度分大石駿河楯籠候二宮寄陣、申宥候之間、服先忠候、二宮事如此之間、相州磯部（邊）之城者

磯邊小澤等ノ城陷落

小机城沒落

令降參、小澤城者致自落候（ヘ、）、雖殘黨等奥三保楯籠候之間、道灌者當國村山ら申所へ寄陣、同名圖書助、同六郎、自兩口奥三保へ差寄候處、（朱書「相州住人」）本間近江守、（朱書「同」）海老名左衞門尉、甲州住人加藤、其外彼國境者共相語、去月十四日、御方陣わ寄來候處、於搦手、圖書助摧手得勝利候、海老名左衞門尉討取候由、夜中村山陣へ告來候間、未明罷立、同十六日、甲州境越、加藤要害へ差寄打散、爲始鶴河、所々令放火之間、其儘相州東西靜謐仕候、（朱書「文明十一（十イ）」）○中略

十一月廿八日　道灌判

謹上　高瀨民部少輔殿（朱書「山内家人」）（式部丞イ）

〔鎌倉大草子〕○上略、太田道灌上野荒巻ニ陣シ、長尾景春來リ攻ムルコトニカヽル九年十月二日ノ條ニ收ム、上杉定政ハ河越ヨ籠り、長尾景春ヲ吉里宮内左衞門以下相伴ひ、大石駿河守ゐ二宮の城へ著陣して、小机の城の後詰せんとも、同三月十日、河越乃城よりヲ二宮へ押寄々ゆゝ、終こ打負て、景春は成氏ゝ御陣成田へ參りく、千葉新介孝胤相催し、羽生の峯に陣を取、同十九日、小机乃陣より、太田圖書助資忠引かへし、同廿日、羽生に向て、定政も出勢也、孝胤、景春一戰ゐも及ゝに引退、大石駿河守楯籠二宮乃城も降參す、相州磯邊の城も、小澤乃城も自落も、敵乃殘黨奥

其殘黨奥三保ニ據ル

道灌等奥三保ヲ攻ム

加藤某ヲ甲斐ニ攻ム

二宮城降參

道灌村山ニ陣ス

三保と云所ゑ楯籠る、太田道灌村山ゟ陣を取、舍弟圖書助、同六郎、大將として奥三保へ馳向、敵本間近江守、海老名左衞門、甲斐國鶴瀨乃住人加藤、其外彼國境乃兵とを相催し、同十四日、逆寄に責來、太田圖書助資忠眞先に進ミ防き戰ふ、海老名左衞門を初として、敵數多討取々ゟ、道灌も村山の陣より押寄る處ゟ、敵は敗軍す、追懸て甲州乃境を越へ、加藤ゟ要害へ押寄、鶴河所（行ヵ）と云所を放火して歸陣ゟ、同十七日、荒川を越、鉢形と成田の間ゟ陣を取、

鶴河放火

〈鎌倉大日記〉四月十日、武州小机城沒落、

〈太田家記〉道灌公若年より城を攻、邑を圍而、自進ミ戰給ふ所許多也、小作江城を攻々る時、敵ハ多勢、味方ハ小勢なり々る、家臣申候ハ、小勢ハ大敵ゟ勝難しと也、道灌公士卒ゟ語て曰、能兵を用る者ハ、兵の多少ゟよらす、威ゟ乘ルゟは不如、吾今俳諧の歌をよみて士卒を勵まゝへし、聲ゟ應して進戰へとて、

道灌ノ俳諧歌

小机ハ先手習の始ゟていろはにほへとちり〳〵ゟ成る

則士卒進戰て、大ゟ勝て、終ゟ其城を拔と云々、

○定正、道灌ト共ニ、豐嶋泰經ヲ武藏平塚城ニ攻メテ之ヲ陷レ、其殘黨小机城ニ據ルコト、正月二十四日ノ條ニ見ユ、

羽生

〈參考〉

〈千葉大系圖〉三　孝胤　千葉介、文明十一年正月、太田道灌、二階堂某攻臼井城、依父之命、孝胤率多兵救城、道灌於國府臺數月挑戰、遂敗退去、

〈新編武藏風土記稿〉二百十三郡十五羽生領　町場村　町場村ハ、〇中略江戸ヨリノ行程十六里、太田庄ニ屬ス、當村ハ羽生領ノ本鄕ニシテ、昔城下ニ屬セシ町ノ蹟ナレハ名トナレリ、〇中略又羽生ノ唱ノ起ル所ハ、古キ書ニハイマタ見サレト、上羽生村正覺院ニ藏スル永祿九年ノ文書ニ、武州太田庄羽生云々トアリ、コノ餘成田分限帳ニ、永樂百五十貫文埴生大膳亮長員、同六十貫文埴生出雲守、同三十貫文埴生助六郎トノス、コレモ在名ヲモテ呼ヘル者ナルヘク、既ニ村君村鷲大明神天正十八年ノ神鏡ニ、太田埴生庄ト載タレハ、羽生ノ唱ハ、コレヨリ前起リシコトニテ、羽生埴生トモ書シコトシラル、

磯部城

〈新編相模國風土記稿〉六十六高座郡八村里部磯部村　磯部城蹟　今其地ヲ詳ニセス、村ノ西南ノ方ニ堀之内二重堀アリ、コレ城跡ノ遺名ナルヘシト云リ、重堀等ノ小名文明中、山内上杉氏ノ老臣長尾四郎左衞門景春謀叛ヲ起シ、上杉氏ト矛盾ニ及シ時、當城ニ軍勢ヲ籠置、武

奥三保

相ノ所々ニテ合戰ニ及ヒ、文明十年三月、景春打負テ、當城遂ニ落去ニ及ヒシナリ、〇下略

〔新編相模國風土記稿〕百十六村里部　津久井縣一

奥三保ノ唱名アルモノ十三村、或説ニ、總テ其國ノ山家ヲサシテ、奥三保ト云ヘリト聞ク、サレハ本縣西北ノ方、多クハ林巒山嶽ニ接屬セシ村居ナレハ斯ク唱ヘシ事ニヤ、鎌倉大草紙ニ、文明中、相州奥三保ト見ヘタルハ、卽本縣ノ事ナルヘシ、小田原役帳ニ、津久井衆知行役ヲ記セシ末ニ、奥三保、已上十七村、土貢、此十七ケ村ノ内田一向無之、何茂山畠迄也云々ナト記ス、然レハ奥三保ハ、津久井縣ノ一名ナルニ似タリ、又曰、内藤左近將監所領中縣内川尻、中澤、三井ノ三村等ハ中郡ト記シ、其餘十七村ハ保内トノミ載ス、今現ニ奥三保ノ唱名アル村ハ、千木良、若柳、寸澤嵐、奥瀬吉野、澤井、佐野川、小淵、名倉、根小屋、日連、牧野、青根、凡十三村、其他四村ハ舊名ヲ失ヒシモノニヤ、

二十三日、乙酉、亂碁アリ、

〔京都御所東山御文庫記録〕甲二十〇山城　御湯殿上日記　三月廿三日、〇中略ふしをとの、をけ殿、（山科言國）くらの頭、こうさうひきあいくしまて、御まへまてらんこ御ひろいあり、ふしをとの、山しな御まけ、

廿四日、よへのらんこの御をうふあり、

〇コノ後、亂碁ノコト、便宜左ニ合敍ス、

邦親王
高山科言國
貢ク

宴ヲ賜フ

〔京都御所東山御文庫記録〕甲二十〇山城　御湯殿上日記　四月十日、らんこ御ひろいあり、御をうふあり、

六月廿三日、ふしをとのゝさたにさちてのらんこの御をうふくいうをさくしことさら御さゝ月を万いらをる、

二十六日、戊子、山城安樂壽院ニ院領ヲ安堵セシム、

〔安樂壽院文書〕〇山城

鳥羽安樂壽院領山城國眞幡木、芹河、上三栖庄三ヶ庄内所々散在田畠、播磨國石造庄本所分等事、任武家下知之旨、爲當知行可令全領掌者、天氣如此、悉之以狀、

文明十年三月廿六日　左中辨（勘解由長政朝臣）（花押）

當院衆徒中

〔參考〕

〔山城志〕六佛刹紀伊郡　安樂壽院在竹田村、一名城南寺、天仁元年八月、上皇建鳥羽御塔、見中右記、〇中略續文粹曰、九重之城南萬年縣、裏築山以擬姑射、貯水以摸昆明、蓋是往日經始之離宮、今時延覽之勝境也、東方十洲之深洞縮風流於其中、西佰百里之芳園積道德於其處、蓋築山乃秋山也、昆明今之赤池、十洲今曰中島、芳園之名在眞幡遠北、

〔山城志〕六神廟紀伊郡　眞幡寸神社二座、在中島村、城南神社々東北有地名眞幡寸辻、屬竹田村、

〔山城志〕六村里紀伊郡　芹川　上三栖

〔雍州府志〕五紀伊郡寺院門　安樂壽院　在竹田、東西二門共以丹塗之、故土人不謂寺名、直稱朱門、本御塔向東、本尊彌陀者傳言春日之神作也、鳥羽法皇於此處崩、則奉葬本尊臺座之下、〇略下

義政、山城智光院ニ院領ヲ安堵セシム、

〔大聖寺文書〕〇山城（義政）〔花押〕

智光院領所々目錄在別紙、事、所返付也、早如元寺家可全領知狀如件、

文明十年三月廿六日

眞如堂住持長諄、同本尊ヲ、近江坂本ヨリ京都一條町ニ遷ス、

〔蜷川親元日記〕六　三月廿六日、戊子、天晴、

一眞如堂本尊坂本穴太より、洛中一條町へ遷座、先以かりの御堂也、遷座供養元應寺惠忍上人、

一同御堂鑄鐘、

鐘ヲ鑄ル

〔京都御所東山御文庫記錄〕甲二十山城　御湯殿上日記　四月一日、〇中略新女さうの御やうゑ、御ゐうゑこ十帖いささるゝ、右大辨とり申、

〔兼顯卿記別記〕〇岩崎文庫所藏　八月廿六日、丙戌、晴、晚頭參御臺御方、條々披露目六、〇中略又眞如堂勸進御臺御方御奉加事、以權大納言局申入者也、

〔大乘院寺社雜事記〕六十五　四月十三日、

一昨日四郎正元來、〇中略先度眞如堂鐘鑄之、以其餘錢御堂等成建立了、

〔華頂要略〕七十九鈴聲山眞如堂今爲改號上蓮光院、御寺務所蓮光院、號蓮光院第廿　長諄大僧都忠諄弟子、

同（文明十）九年三月廿六日、自江州穴太、奉遷本尊於洛陽一條町、

〔眞如堂緣起〕〇上略去應仁乃大亂ゑより、同二年戊子八月三日、如來を黑谷青龍寺へ奉移之、〇中略文明二庚寅年三月十五日ゑ穴太眞如堂號寶光寺へ奉移之、〇中略其後天下屬靜謐之間、文明九年（十）三月廿六日、洛陽一條町へ奉遷之、寶光寺ゑハ御代尊安置之、惠心御作、

〇本尊ヲ東山ニ遷スコト、十六年六月一日ノ條ニ見ユ、

二十七日、己丑賀茂社々務彌久ヲ罷メ、權禰宜繼平ヲ禰宜ニ轉ジ、社務ニ補

堂宇建立

一社談合ヲ加ヘテ無爲ノ沙汰致シスベシ

ス、

〔親長卿記〕三十二

賀茂神主彌久縣主辭退申、貞久縣主可存知之由、堅可被仰付之由、被仰下候也、謹言、

三月廿七日　藏人辨殿

賀茂社務職事、貞久縣主可存知之由、雖及再往之御問答、諸神領等就違亂、堅歎申之間未定候、然者今日氏神祭神事、先爲一社加談合、諸司氏人等可致無爲沙汰之由、可被下知之由被仰下候也、謹言、

四月四日　藏人辨殿　親長

賀茂別雷社權禰宜賀茂繼平縣主宜轉任禰宜、祠官等次第轉任事、任例可存知之由、可被下知給之由被仰下候也、謹言、

四月七日　藏人辨殿　貞久縣主辭退替也、

當社々務職事、可被存知之由、被仰出之旨可申下候、恐々謹言、

四月十日　賀茂禰宜殿　奉行職事　政顯　觸穢之間申遣了、

當社々官次第轉任事、任例可被存知之由、可申旨候、恐々謹言、

四月十二日　賀茂神主殿　親繼判

當社祠官事、一人可被召進之由候也、恐々謹言、

四月十四日　賀茂馬場殿　賀茂奉行政顯　觸穢之間、元長書之也、親繼判

〔親長卿記〕九　三月廿六日、晴、賀茂社務辭退事奏聞、可仰次座云々、次貞久

故障、重可載狀之由仰了、

四月三日、晴、彌久、棟久、諸平等來、社務未定、明日神事難治云々、貞久故障事仰聞、所詮明日氏神祭神事、先爲一社無爲之儀可加談合之由、可被成奉書云々、奏聞勅許、

二十八日、庚寅、皇妹眞乘寺宮ノ景愛寺御入院ノ資用闕乏シ、且禁裏御料所ヲ武士ノ押領スルニ依リ、御讓位ノ叡慮ヲ甘露寺親長等ニ告ゲ給フ、是日、親長等、之ヲ諫止シ、尋デ、義政モ亦、奏スル所アリ、

甘露寺親長等ニ讓位ノ叡慮ヲ傳ヘラルル

眞乘寺宮御入院ニ就キ義政夫人日野氏ヲ御助成ヲ乞フ

義政ト夫人トノ不和

〔親長卿記〕九　三月十六日、晴、及晩參內、依召也、源大納言、雅行、民部卿、忠富、

先招予申云、一昨日仰御隱居事、年來御所望之處、彼是雖不事行、爲武家被申留之間、于今御堪忍無盡期、已內裏又相殘神妙之間、宮御方事、可然之樣可有申御沙汰之由、可被申武家、可爲如何哉之由有御尋、先此事今度眞乘寺殿就御入院、○眞乘寺宮、景愛寺御入院ノコト、四月十九日ノ條ニ見ユ、可被申御合力之由、自御臺被執申、御料所近日一向無沙汰、未進等有催促、被遣者可有御助成之由勅答之處於御料所近日殊人々不從所動之間、難被仰付之由被申御返事、然者御助成事以何用脚可有御沙汰哉、御難治云々、仍與武家女中聊御不快起、自此事及此重事之間、兩人不申御返事、可被尋仰予之由有仰被召之、可存知云々、此外條々有巨細、迷惑由返答、卽源大納言、民部卿等令同導、可參御前云々、有仰旨、大略如注右、猶有巨細之仰、予申云、仰之趣尤以不能左右、其故者、此事年來爲叡慮、雖然國家之大儀天下之重事之間、于今延引、宮御方又御成人不能左右事也、雖然今度就御入院用脚被申合之時節、被申此事、定而就逆鱗有此仰歟之由、武家可有存知、然者事外不成就、不可被達御本望之間、暫有御待、可被申武家歟、又仰云、武家返答有御覺悟、雖然只可被申云々、又予申云、與武家有不快御事者、大儀不可成就、可爲天下嘲笑、就是非只今御事不可然、ちと去つめられと可然、但此重事當座申勅答事難儀、退廻思案、去るとと可申入、今申入分凡事也、此外二時許再往有仰、又申愚存、何樣退廻思案、忝可申御返事、其間可有御待云々、仍退出、於傍兩卿申云、予申樣尤神妙、相構雖爲何ケ度、此外可然云々、

廿八日、雨下、參內、彼御返事遲々、早々可申之由有仰之由、民部卿申之、予所存如已前、無他思案、今事者爲無骨、暫可有御待之由、所存分申入了、

〔兼顯卿記〕○岩崎文庫所藏　六月二日、壬辰、晴、午天有召參內、御讓國之事、今度土御門殿御修理○幕府ニ勅シテ、土御門殿ヲ修理セシムルコト、九年十一月二十七日ノ條ニ見ユ、以後不及還幸、可有

親長等ノ諫止

義政トノ御不快ハ然ルベカラズ

御讓位ノ旨ヲ幕府ニ告ゲ給フ

勅使勸修寺教秀廣橋兼顯

御讓由、被申室町殿者也、勅筆奉書有之、御使勸修寺大納言、予兩人也、勅書上書被當予者也、但此間與御臺御方御不和之子細有之、仍明日勾當內々被參可被申宥處、此勅書致披露者、定尙時宜可爲不快歟之間、勸修寺兩人加談合不及披露、先□其意申入者也、申斜退出、

義政夫人ノ不和ヲ慮リ勅書ヲ披露セズ

六日、丙申、晴、午半刻許大夕立、雷鳴殊甚、及晩勸修寺大納言入來、先度之勅書可致披露歟之由、相□□也、仍令同道參祗、以右京大夫局申入之、御返事有子細遲々、仍先退出者也、

義政ニ披露ス

七日、丁酉、晴、依召參御臺御方、昨夕披露之勅書事也、爲重事間、直可申入准后由也、是存內事、且又可然事也、

義政夫人ニ披露ス

八日、戊戌、晴、自四時分雨下、相伴勸修寺大納言參小河殿、御讓國之儀先度之勅書以春日局披露、有御思案可被申御返事由、被仰下之間、先退出、

十二日、壬寅、晴、早旦自室町殿有召、參小河殿、御讓國之儀、明日可被申御返事問、伊勢(貞宗)守兩人加談合可計申由、以春日局被仰下之間、予、伊勢守兩人申入所存之通令言上者也、委細注他記、

十三日、癸卯、晴、早旦相伴勸修寺大納言、參小河殿、依召伊勢守同參候、昨日御談合之御返事、可然樣得其意可申入禁裏由、以春日局被仰下伊勢守、仰之旨於發言、勸修寺、予兩人奉之參內、以民部卿奏達、被廻御思案、重而尙可被申由勅答、

兼顯等義政ノ奉答ヲ執奏ス

勅答

十四日、甲辰、晴、及晩參內、依召也、御讓國之事也、

十五日、乙巳、晴、秉燭程參小河殿、勸修寺相伴所也、以春日局申入勅定之趣、御讓國之事也、無便宜申置、先退出、

兼顯等叡慮ヲ義政ニ披露ス

十七日、丁未、晴、參內、於戶部構、勸修寺源大納言、戶部以下談合、御讓國之儀也、

兼顯義政ニ奉答ヲ催促ス

八月四日、癸巳、晴、入夜夕立雷鳴、早旦參小河殿、勸修寺大納言同參、自禁裏被申條々披露、申次春日局御讓國以下御料所等事也、

〔兼顯卿記別記〕○岩崎文庫所藏　八月四日、癸巳、晴、入夜夕立雷鳴、早朝參小河殿、勸修寺大納言同參候、自禁裏御讓國以下事、重而被申間、自去比令申春日局處、于今無沙汰之間、一段爲催促參者也、爲重事間、于今不申入候、肝要大概仰之旨被裁文可付給由、春日局所望之間、源大納言注仰旨於折紙遣之者也、頃之春日局披露之處、御讓位之事、先度申入御返事同篇之外無別儀、將亦御膳等退轉事者、料所相違之子細、召內膳先可相尋由仰之間、相尋之處、越前國三邦(國)所三國港

先ノ奉答ト別儀ナシ

越前御料

チ復舊セシム
御料所備前鳥取庄代官職緩怠
代官職任命ニツキ公武ノ相違
義政ノ奉答同前ナレバ後ニ又御沙汰アルベシ

湊肝要爲料所處、亂後一向押領也、仍退轉由申候間、其子細申入處、堅可申付由、可仰伊勢守由仰也、又御料所共未進之事、備前鳥取庄第一有名無實之間被申處、此在所御代官職事、先年赤松競望之間、雖有御執奏、無御承引被仰付松田、無幾程直ニ申入間被仰付赤松之間、最初御問答之次第、無御覺悟上者、今更可被仰付條、不及御覺悟由、得其意可申入由也、此事連々覺悟事也、依此御述懷連々雖被申、不能御承引間、彌守護ハ得力、致緩怠之間、珍事此事也、最初之儀、故帥卿(烏丸資任)申沙汰條々依相違、如此成行之由、雖再三申入、難被仰付由、同篇御返事也、御料所等事、代々御申沙汰之處、近代御自撰之間、難有承知由之御述懷也、仍兩人退出、直可參內處、勸大先歸宅、令朝食可參會由被命間、先歸家、朝食以後則參內、勸修寺同參、以民部卿令奏聞處、御讓國事御堪忍御事盡被申間、更難有延引事也、雖然爲同篇之御申上者、重而雖被申、不可有所詮間、一段被廻御思案、重而可被仰出由勅定也、御料所事、自最初至于今、每々被申合武家段勿論也、先年儀御料所奉行武家之儀、可然樣令言上間、被仰付赤松畢、其段相違事、曾以公家非御不儀由、條々被仰下者也、頃之歸家、

〔尋尊大僧正記〕九　三月廿二日、雨下、

一松殿來、昨日下向、色々物語、

公武不和義政夫人ト不和

一公武之間御中不宜云々、公幷御臺御中近日不宜云々、

廿六日、

一禁裏ニハ悉以念佛也、善道(尋)一遍等影共被懸之、自九條河原被召土寄、土佛御作云々、公武不和無是非、

○貞常親王及ビ義政、御讓位ヲ止メ奉ルコト、三年四月六日ノ條ニ、又位ヲ遜レ、聖壽寺ニ幸セラレントシ、一條兼良等諫止スルコト、本年十月十五日ノ條ニ見ユ、

右大臣兼左近衞大將近衞政家ノ兼任ヲ罷メ、權大納言兼右近衞大將大炊御門信量ヲ之ニ任ズ、

〔公卿補任〕四十三

右　大　臣正二位藤政家、廿四、左近衞大將、

權大納言正二位藤信量、廿七、右近衞大將、三月廿八日轉左大將、

〔宮內省圖書寮所藏文書〕御監大將宣旨

謹請

文明十年三月二十八日

宣旨

右近衛大將藤原朝臣

宣轉任左事、

右宣旨早可令下知之狀、謹所請如件、師富恐惶謹言、

三月廿八日　　大外記中原師富□□（請カ）

右近衛大將藤原朝臣信量

正三位行權中納言藤原朝臣廣光宣、奉勅、件人宜令轉任左近衛大將□（番カ）、

文明十年三月廿八日　掃部頭兼大外記造酒正博士中原朝臣師富奉

〔諸家傳〕一中近衛　後法興院房嗣公二男、正家母家女房、　同（文明）十年三月廿日辭左大將、未拜賀、

〔諸家傳〕四下大炊御門　深草右大臣元信氏、信宗公男、實量前右大臣實量男、母、廿七歲　十（文明）年三月廿八日轉左大將、

〔兼顯卿記〕○岩崎文庫所藏　三月廿八日、庚寅、晴、右大將信量卿轉左大將可宣下由、仰藏人辨政顯者也、

〔長興宿禰記〕上　四月十日、一條中納言中將殿冬良、任右大將給□□右大將信量卿去月轉左替云々、○冬良ヲ右近衛大將ニ任ズルコト、四月十日ノ條ニ見ユ、

○權中納言一條冬良、右近衛大將ヲ兼ヌルコト、四月十日ノ條ニ見ユ、

聖護院僧正政瑜寂ス、

〔晴富宿禰記〕三月廿七日、己丑、晴陰、後聞、今日聖護院政瑜、廿九歲、薨去、自正月虛勞云々、二條大閤（持通）御息、前關白殿（政嗣）御舍弟也、

〔尋尊大僧正記〕九　三月八日、

一自宗祇方書狀到來、○中略聖護院新僧正違例以外、不可有正躰云々、

〔大乘院寺社雜事記〕六十五　四月二日、

一聖護院新僧正政俞（瑜）、廿九歲、去廿八日入滅之由、自前殿（二條政嗣）書狀到來了、故滿意准后之弟子也、道興准后之同朋也、

廿五日、

一二條殿御使大藏大輔來、御書持來色々相語、聖護院ニハ前殿御息三歲先以治定、

〔攝家系圖〕○大和　關白氏長持通――關白氏長政嗣早世、

二條持通ノ息

二條政嗣ノ子ヲ嗣トナス

世系

文明十年三月二十八日

政能（妙法院早世）、
政瑜（聖護院僧正、滿意准后弟子、早世）、
政覺（大乘院）、

○政瑜ヲ僧正ニ還補スルコト、八年十二月十五日ノ條ニ見ユ、

隨心院嚴寶、越後ニ下向ス、

〈大乘院日記目錄〉三　三月廿八日、隨心院殿越後國ニ下向云々、就白鳥庄事也、

白鳥莊ノ事ニツキ下向

〈尋尊大僧正記〉九　三月廿六日、

一隨心院殿書狀到來、宗祇四五日以前越後ニ下向云々、隨心院殿廿八日可下向云々、

宗祇越後下向

○嚴寶、美濃ニ下向スルコト、便宜左ニ合敍ス、

〈尋尊大僧正記〉九　二月三日、

一昨日石左衞門順圓京上、隨公可令下向美乃國云々、

六日、

一今日隨心院殿三乃國歟由聞之、

三月十八日、

一順圓自三乃罷上、隨心院殿、松殿上洛云々、

二十九日、辛卯、幕府、室町第ノ庭ヲ修築ス、

〈蜷川親元日記〉六　三月廿九日、辛卯、天晴、

一上御所御庭普請者、貴殿より卅人被進候、奉行——代——三番方普請、凡依爲無數儀如此、（三上代、左三）

卅日、壬辰、天晴、夜雨雷電、

一上御所普請奉行蜷彦右衞門、三上、

四月朔日、癸巳、天晴、

一御普請依夜前雨無之、

二日、甲子、天晴、

一御普請奉行蜷三郎兵衞尉、

三日、乙未、天晴、

一御普請奉行蜷中務、野依（進春）若狹守、

四日、丙申、天晴、

雨ニ依リ普請ナシ

一普請奉行蜷掃部、松平、
五日、丁酉、天晴、
一普請奉行蜷式部、高岡、
六日、戊戌、天晴、
一普請奉行蜷彦右、三上、
七日、己亥、天晴、
一普請奉行蜷三兵、
八日、庚子、天晴、
一普請奉行中務、野依、
九日、辛丑、曇、晩雨、
一普請奉行式部、高岡、雖爲明日番相博、
十八日、庚戌、天晴、
一御庭普請奉行松平、
十九日、辛亥、天晴、
一御庭普請奉行蜷彦右、三上、

普請終了

作事要脚ヲ酒屋土倉等ニ徴ス
浦上則宗ニ沙汰スル則宗ノ功勞ヲ賞ス

廿日、壬子、天晴、
一普請奉行蜷三兵、普請終了、
六月廿一日、辛亥、天晴、夕立、
一就御作事要脚之儀、酒屋土倉無役所々へ御借用事、於衆中兩奉行上使、清式部大夫、松田對馬守、所司代浦上近江守、被仰付之、御作事奉行布施下野守、飯尾加賀守、ゟ貴殿御副あり、所司代近日殊種々被召仕粉骨御感、御劍御馬被下之、面目之至也、仍御太刀御馬進上之、
○幕府、室町第修理段錢ヲ石見ニ課スルコト、九年閏正月二十二日ノ條ニ、安藝ニ課スルコト、本年五月二十六日ノ條ニ見ユ、

三十日、壬辰、三月盡當座和歌御會、

〔京都御所東山御文庫記錄〕甲二十〇山城　御湯殿上日記　三月卅日、おとひ玄んの御さうさあり、

〔實隆公記〕五　三月卅日、壬辰、晴、今日猶候番、入夜五首和□(歌)各詠之、春宵之限尤可惜者乎、

〔蜷川親元日記〕六　三月卅日、壬辰、天晴、夜雨雷電、

義尚モ三月盡當座ヲ行フ

一御方御所三月盡御會御當座あり、

鳥羽續重、權中納言清水谷實久ノ負債ヲ辨償セザルニ依リ、其質地勘解由小路室町ノ地ヲ管掌センコトヲ幕府ニ訴フ、

〔親元日記別錄〕中

一鳥羽（松豐）五郎兵衛尉續重（文明十年）一三世、清水谷（實久）家知行勘解由少（小）路室町与烏丸之間、北頰屋地爲質券廿一貫文、乍被借用無返辨之上者、地子本利相當之間、可知行之由申候、

四月小　癸巳朔

一日、癸巳、御祝、

〔京都御所東山御文庫記錄〕甲二十○山城　御湯殿上日記　四月一日、癸ふより

れ御きぬ權も參殿、○中略　およひの御さゝ月いつものことし、

〔實隆公記〕五　四月小朔日、癸巳、晴、早旦退出、行水、今日志野□一樽□來、盃酌及數反、未剋向毗沙門堂、又向舊院□（上聞）□局、此間入道（三條實量）左府在京云々、仍爲勸一盞也、及晩歸宅、入夜參內、御祝已事終云々、今夜候御所、

義政蚊觸ヲ疾ム義尚ニ參賀

三條實量在洛

廷臣諸將、義政ニ參賀ス、

〔兼顯卿記〕○岩崎文庫所藏　四月一日、癸巳、天晴、首夏告朔、每事中心多樂也、珍重々々、幸甚々々、早旦參賀小河殿、依御蚊觸、無御出座、直參賀宰相中將殿、御對面如每朔、公武面々多賀來、

〔蜷川親元日記〕六　四月朔日、癸巳、天晴、

一御所樣御小瘡こよりて無御出、

二日、甲午、皇子（勝仁）、竝ニ尊敦親王、北野、祇園等京都諸社ニ參詣セラル、

〔京都御所東山御文庫記錄〕甲二十○山城　御湯殿上日記　三月卅日、宮の御方

邦高親王　堯胤法親王　宮王妙法院　同道　従ノ人　尼々　三十三間堂ニテ酒宴

庭田雅行　鯉獻上　日野苗子　鵠獻上　邦高親王　笥獻上　堯胤法親王　藤枝獻上

々ふより御神事ハしめらるゝ、

四月二日、御ふさ御所きやううち御ろいり、ふしミ殿（邦高親王）、うち寄殿（堯胤法親王）、めうゐう院（堯胤）の宮も御ろいり、おい〳〵のおとこさち御とも、女ゑうさちまゑ大ゑもし、新大ゑゐ殿、二條殿、御あちや〳〵、二宮の御さし御ちの人なとも御とも、三十三ゑんまて一こんあり、庭田の入さう（道賢）、ゐしみよりきゝろいらゑられて、御さるもちて御ろいり、めうゐう院御くゐんれ寄殿へ、ゑうくゐんまゐりまゐとをり御さるろいらゑる、うさ寄なとありて御ひし〳〵、天氣もよくてめくさし〳〵、御返さまゐゐしミ殿いし〳〵御下ゑりさのまゝ御ろいり、御るす事まゐ御てうしとも万いる、おりふしにてめんさうまゐともめさ（々こ）あり て、御さら月万いる、御ゐいともあり、源大納言御宮けまゐおもし万いらゑられるゝ、北こうち殿よりくゝゐ万いる、

三日、ゐしミ殿より、昨日のめくさ御ゑうちやくおと御申まて、御ふさ万いる、さけ一をり御宮けまとて万いる、うち寄とのよりもふちの枝万いる、

〔親長卿記〕九　四月一日、晴、自今夜神事也、

二日、晴、宮御方二宮御方密々有御社參、五靈、北野、六條八幡、祇園、清水、因幡堂、六角堂等、予可參御共

之由有仰、元長同可參云々、爲密々事之間爲異体、參仕人々、源大納言、雅行、予、兵部卿、民部卿、正親町宰相中將、四辻宰相中將、元長、源富仲等也、女中大納言典侍、新大納言典侍、二條局、二宮御方、御阿茶々、宮御方、御乳人等也、各乘輿、伏見殿、梶井殿、妙法院御童形、等有御同道、各御輿也、於三十三間、蓮花王院、有一獻、及大飲、及晚還御、宮御方御輿、御共就（ツ）北面祐繼男、予侍、青源大納言青侍備後守、實名可尋、等兩人也、

〔實隆公記〕五　四月二日、甲午、晴、今日爲季春卿番代候内、宮御方、二宮御方等、京中御物詣、□□堂上輩□□□□異躰御供云々、晩頭還御有盃□、

幕府、茨木孫次郎ノ賀茂末社奈良社領賀茂田散在ノ地ヲ押妨スルヲ禁ズ、

〔賀茂別雷神社文書〕一〇山城

賀茂貞久申、奈良社領賀茂田散在事、度々被成奉書之處、茨木孫次郎押妨未休云々、太無謂、所詮就當社造營御下地之上者、不日退彼妨、可被全貞久代所務若於令難澁者、一段可有御成敗由、所被仰下也、仍執達如件、

文明十年四月二日　　大和前司（飯尾元運）（花押）

參仕ノ人々

聰明殿代〇奈良社領ニ關スルコト、諸書所見ナシ、　（布施英基）下野守（花押）

三日、乙未、伊勢國司北畠政郷、伊勢大神宮ニ參詣ス、

〔內宮引付〕

北畠殿御書內對小文折紙薄樣

一三月十一日參宮一定候、雖然存旨候、可預御意見候、延引可然候歟、十一日可然候歟、委細可示給候、恐々謹言、

二月廿六日　　政郷

內一禰宜殿（荒木田氏經）

本所樣參宮三月十一日一定候之處、被存旨候之間、於神前一二之御鬮被執、三月十一日參宮可然候歟、實否懇承候者可爲本望之由、自本所可申旨候、然間以書狀被申候、嚴重御返事給候、可披露候、恐々謹言、

三月廿六日　　幸恒判

內一禰宜殿　御宿所　　垂水右衞門大夫

參宮日ヲ荒木田氏經ニ尋ヌ

御鬮ニ依リ參宮ノ日ヲ占ハンコトヲ請フ

被仰下候旨畏承候了、仍就御參宮御鬮事、三月十一日可然者一御鬮被相延可然者、可給二御鬮之由於神前凝祈念奉執進上仕候、任御鬮之趣御參宮候者、可目出度候由、可有御披露候、恐々謹言、

二月廿六日　　荒木田神主氏經判

進上　垂水右衞門大夫殿

就御參宮日時御鬮事承候、三月十一日可然候者一御鬮被相延可然候者、可被下二御鬮之旨、於神前凝祈念奉執下候、御鬮ハ付札進上仕候、被披之由、其趣任神慮御參宮候者可然候、恐々謹言、

二月廿六日　　氏經判

垂水右衞門大夫殿　御返報　　內宮一神主

神慮ニ任セ參宮セントス

〔大乘院寺社雜事記〕六十五

一三日ハ伊勢國司大神宮云々、出立大儀也云々、

四月五日、

義政、山城長福寺、同塔頭淸涼院、藏龍院及ビ瑞篁院等ニ、美濃、丹後等ノ院領ヲ安堵セシム、

備中國東
備後金丸
莊名上山村
地頭職

〔長福寺文書〕三〇山城

梅津長福寺、同塔頭清涼院、藏龍院、瑞璽院、領、當庄散在田畠敷地、美濃國稻口庄稻河郷、丹後國河上庄、備中國園東庄、備後國金丸名、同國上山村地頭職等事所返付也、早如元寺家可全領知之狀如件、

文明十年四月三日　准三宮源朝臣（花押）

是ヨリ先、北野社別當曼殊院良鎭、同社祠官等多ク在國シテ、神輿遷宮ノ行ハレザルニ依リ、幕府ニ訴フ、是日、幕府、祠官等ニ命ジテ歸洛セシム、

〔伊勢家書〕〇後鑑二百二十五所載

北野社神輿遷宮事、可遂其功之旨、被聞食入訖、尤神妙也、爰諸祠官多令在國、神事不可事行云々、自由至極太不可然、所詮不日可令參洛之旨可被下知、若寄事於左右、及難澁輩者、非啻背御下知、神慮不測之上者、依注進交名、永可被闕官之由所被仰下也、仍執達如件、

文明十年四月三日　（布施英基）下野守

參會ノ人々

竹内門跡雜掌　（飯尾元運）大和守

五日、丁酉、法勝寺大乘會、

〔親長卿記〕九　四月五日、晴、有法勝寺大乘（會脫カ）、如例、義尙、猿樂ヲ興行ス、

〔兼顯卿記〕〇岩崎文庫所藏　四月五日、丁酉、晴、自宰相中將殿有召、但大飲故障之間、稱所勞難參由申入處、再三可構參有御使、然間及晚祇候、有猿樂、前藤宰相、頭中將、北畠以下祇候、

〔兼顯卿記別記〕〇岩崎文庫所藏　四月五日、晴、宰相中將殿有召、依猿樂也、但大飲故障之間、所勞之由申入處、再三可構參有召、仍及晚參候、前藤宰相永繼卿、頭中將實□□□、北畠侍從政宗祇候、入夜歸家、

〔蜷川親元日記〕六　四月五日、丁酉、天晴、一御方御所ゟ能あり、

七日、記、義政、山城妙光寺ニ、其寺領及ビ塔頭末寺領等ヲ安堵セシム、

〔妙光雜記〕〇山城

文明十年四月十日

妙光寺領所々幷塔頭末寺領等目錄在別紙、事、所返付寺家也早如元可全領知之狀如件、

文明十年四月七日　　（朱書）「チモテニ」東山殿義政公（朱書）「後之」記

准三宮（朱書）「判」

十日、壬寅、權中納言兼左近衛中將一條冬良ヲ右近衛大將ニ任ジ、尋デ、右馬寮御監ニ補ス、

〔公卿補任〕四十三

權中納言正三位藤冬良、十五、四月十日任右大將、

藤冬良、十五、四月廿九日右馬寮御監宣下、

〔宮內省圖書寮所藏文書〕御監大將宣旨

謹請

宣旨

權中納言藤原朝臣冬

宜兼任右近衛大將事

右宣旨早可令下知之狀、謹所請如件、

文明十年四月十日

大外記中原師富請文

正三位行權中納言右近衛權中將藤原朝臣冬良

正三位行權中納言藤原朝臣光宣、奉勅、件人宜令兼任右近衛大將者、

文明十年四月十日　掃部頭兼大外記造酒正博士中原朝臣師富奉

〔實隆公記〕五　四月十一日、□（癸）卯、陰、早旦行水、今日罷向□冬良□□（卿此カ）間被轉幕下云々、仍爲賀參一條□□□時雜談、晩頭歸宅、

〔親長卿記〕九　四月廿九日、雨下、頭中將宣親朝臣示送云、右大將御監事、被申宣下之樣可爲如何哉、注口宣案見之、少々文字書加了、

文明十年四月廿九日　宣旨

權中納言兼右近（今）大將藤原朝臣

宜爲右馬寮御監歟、

藏人頭右中辨藤原宣親奉

〔兼顯卿記〕○岩崎文庫所藏　三月廿二日、甲申、自夜雨降、當番也、○中略以次右府幕下辭退事、中納言中將殿同任幕勅約等事、條々奏事、幕下事羽林黃門勅許也、

文明十年四月十日

可爲如此歟、忘却可尋申本家之由仰了、後日示云、爲予注入分云々、

四月廿九日、辛酉、雨降、自晩雨脚休止、○中略及晩參內、○中略右大將殿御監事、今日吉日之間可申沙汰由、自禪閤奉間、以次奏達、不可有子細由勅答、仍以奉書申遣頭左中將許者也、

〔兼顯卿記別記〕○岩崎文庫所藏　四

仍以奉書可宣下之由、令下知頭左中將者也、

權中納言藤原朝臣冬宣兼任右大將、可令宣下給由被仰下也、（歟脫カ）恐々謹言、

四月十日　兼顯

（中山宣親）頭左中將殿

廿九日、雨降、自晩晴、終日餘醉之外無他、自禁裏再三有召、仍推餘醉晩頭參內、○中略右大將殿御監事、自禪閤可申沙汰由、嚴命之間、奏達、勅許之間、則可宣下由、書遣奉書於頭左中將宣親朝臣許者也、

右近衞大將藤原朝臣宣爲右馬寮御監、可令宣下給之由、被仰下候也、恐々謹言、

四月廿八日　兼顯

頭左中將殿

（頭中將兩人有之、爲下藤之間、加左字者也、）

〔長興宿禰記〕上　四月十日、一條中納言中將殿冬良、任右大將給、○下略

〔尋尊大僧正記〕九　三月廿六日、

一大將事今御所勅約也、然而御違言歟、花山院、德大寺間ニ治定歟云々、禪閤諸篇ニ御退屈云々、

〔大乘院寺社雜事記〕六十五　四月廿五日、

一松殿小（少）將爲御使下向、○中略京都事色々相語之、

今御所令成左大將給了、（近衞政家）陽明御方御辭退之所也、德大寺、花山院等爲上首雖望申之、任攝家之例被任了、先以珍重々々、

六月七日、夕立、

一自禪閤御書到來、○中略

同御書中納言中將幕下事、四月十日、被任右大將候、超越德大寺大納言實淳、花山院大納言政長、今出川中納言公興等候、面目至候、中納言大將光明（後慶道家）峯寺佳例之間別而申入、已以被宣下候、祝著候、同御書也、

○江部雅連等侍從任官ノコト、便宜左ニ合敍ス、

近衞政家辭退ニ依リ冬良任ゼラル

〔宮內省圖書寮所藏文書〕文武諸官宣旨

〔跪請文〕

宣旨

藤原雅連（江部）

宣任侍從事

右宣旨早可令下知之狀、跪所請如件、

正月四日　　大外記中原師富請文

從五位下藤原朝臣雅連

正二位行權大納言藤原朝臣爲富宣、奉勅、件人宜令任侍從者、

文明十年正月四日　掃部頭兼大外記造酒正博士中原朝臣師富奉

〔親長卿記〕九　正月九日、晴、〇中略源有雄侍從事勅許、奏聞

一條兼良、源氏物語ヲ講ズ、

〔親長卿記〕九　四月十日、雨下、於禪閤源氏講尺也、今日始行、

十三日、晴、源氏講尺也、

十五日、晴、源氏講尺也、

十九日、晴、〇中略今日源氏講尺也、

廿六日、晴、有源講、

八月十五日、晴、今夜月不晴天、今日有源講、參禪閤、

九月六日、晴、參禪閤、有談義、繪合卷也、

十一月二日、晴、同前、今日有談義、源氏、

四日、晴、講尺也、

〔大乘院寺社雜事記〕六十五　四月廿五日、

源氏御談義一日ハ公家衆、一日ハ武家衆、各ニ二反在之、此外又近日於公方御臺可有之、又畠山も可參申云々、希有事也云々、凡不得其意者也、

○兼良、江家次第ヲ講ズルコト、六月五日ノ條ニ見ユ、

十一日、癸卯、稲荷祭、

〔東寺長者補任〕五　文明十年戊戌、稲荷祭、四月十一日有之、

〔東寺私用集〕當年一圓初ナリ戊　一文明十年戊戌四月十一日、稲荷祭禮三月廿日午日御宿所御出、六座御供如例、導師勾當中綱職掌出仕、裝束等如例、珍重々々、

義政夫人講義ヲ聽ク

〔密宗年表〕四月十一日、稻荷祭有之、補任、

鴨社禰宜、梨木祐宣、鴨社領安藝都宇竹原兩莊竝ニ丹波三和莊ノ公文職ヲ安堵セラレンコトヲ請フ、仍リテ、其可否ヲ同社禰宜等ニ諮問ス、

〔親長卿記〕三十二

神領安藝國都宇竹原兩庄、丹州三和庄之內公文職故祐(梨木)國跡事、可被宛行祐宣之由申候、可爲如何候哉、可被是非之由、被仰出候旨、可申旨候、恐々謹言、

四月十一日　親繼判

鴨禰宜三位殿

鴨祝三位殿

○小早川弘景ニ命ジテ、鴨社領都宇竹原兩莊ヲ同雜掌ニ渡付セシムルコト、十五年十月十一日ノ條ニ見ユ、

山名政豐、但馬楞嚴寺ニ、寺領二方公文書ヲ安堵セシム、

〔楞嚴寺文書〕○但馬

但馬國棱(楞)嚴寺領同國二方公文職事、早任已前御寄附之旨、領掌不可有相違之狀如件、

文明十年四月十一日　右衞門督(山名政豐)(花押)

住持

薩摩守護島津忠昌、冠嶽ニ遊ブ、

〔島隱漁唱〕上　文明戊戌孟夏十有一日、予隨太守遊于冠岳敎寺、境佳而人傑也、山名冠又號仙者、昔秦徐方士、駕樓船、而求藥於蓬萊之仙府、始來于此地、脫彼衣冠、而著我釋服、遂相攸以栖止焉、山之巔有水、清淺而可浸手、雖霖潦之夏、不添其深、旱亦無曾乾、靈異匪一、或以爲蓬萊、殆不妄者乎、今也不啻入此佳境、剩陪貴遊之席、寔千載之一遇也、不堪歡抃之至、謹製里語三章爲記焉、

徐福曾從海外來、初知日域是蓬萊、仙園花木春常有、祝得邦君萬壽盃、

仙樂花飛絃管樓、滿筵佳士喜清遊、主人有德境彌顯、一嶽高擎冠九州、

從一神人來脫冠、仙山景象遶天壇、層岩萬丈絕巔水、雨不添深旱不乾、

冠岳薩之靈地也、後巖峭峻、其巔貯於一水、清而窪者恰似硯池之形、雖歷淫雨甚旱、未嘗視其有乾溢、胥傳云、稚子幼童之學字也、掬以供硯滴、則無不能書者、故水之名鳴乎海西、不亦奇哉、山之主席作詩見示、仍賡韵且述故事、

文樹忠昌ニ隨遊ス

支樹再ビ冠嶽ニ遊ブ

日上高巖宿霧開、連空青壁絶梯媒、兒童學字硯池水、筆下龍蛇送雨來、霜月廿有二日、

去歳孟夏、予隨太子及幕府之諸公、遊冠岳靈地、踟躇如唯謹爾、今也仲冬初四、再入山、雖涉日次無爲、故爲幼學講魯論、是夕雪晴月淸、偶與敎徒數輩童子六七人、泝溪水而折梅還、興誠不淺、仍作小絶句、以記再遊之夕、

前年官駕入山時、白首追隨驚境奇、好是梅花溪上月、數枝氷玉再遊詩、

〔參考〕

〔地理纂考〕五薩摩國日置郡串木野郷上名村　冠岳、三岳ゐるて、東は入來郷、南ハ市來郷、西北當郷ゑ屬ま、東岳中岳西岳といふ、東岳高サ五十餘間、中岳高二十間、西岳高六十餘間あり、西岳の形狀風折烏帽子ゑ似ゑり、土俗三岳を合て冠岳と稱す、一說ゑ、孝元天皇の御世、秦徐福來り玉冠を留めし故ゑ、名を得ゑりといふ、

熊野神社　東嶽中嶽西嶽の三箇所ゑ在ゐ、祭神紀伊ノ國熊野社ゑ同し、例祭年中六度、正祭並ゑ九月九日ゑり、創建の年月詳からま、此地鎭國寺頂峰院といへり、眞言の寺ゐて土人相傳へ、用明天皇の勅命ゐ因ゐ、蘇我馬子宿禰建立せりといふ、

十四日、丙午、義政、京都證明寺ニ、諸國散在ノ同寺領及ビ末寺等ヲ安堵セシム、

宗順復命ス

〔天龍寺文書〕○四山城

東山證明寺領諸國所々并洛中洛外屋地散在田畠、同末寺等目錄在別紙、事、如元寺家領知不可有相違之狀如件、

文明十年四月十四日

准三宮　御判

興福寺、寺僧宗順ヲ伊勢ニ遣シ、國司北畠政郷ニ、大和萩原關務及ビ篠畑年貢ノ事ヲ交渉セシム、

〔大乘院寺社雜事記〕六十五　四月十四日、雨下、

一宗順伊勢國遣之、關務事并篠畑年貢事也、

五月九日、

一宗順自勢州罷上、田口、赤塡(ヵ)、篠俣(畑)事、國司(北畠政郷)返事得其意云々、條々星合七郎左衞門ニ申置云々、

十五日、丁未、大內政弘、周防今八幡社修造及ビ社田課役等ノ條規ヲ定ム、

〔大內家壁書〕

一今八幡社頭幷御神領事條々、

一修理造營之時、社領中人足有催促可召仕也、然而號地子辨濟、不勤仕人足以下諸役云々、大綱修造之時者、縱雖爲地子收納地可相催之、若及異儀之仁者、不可居住社領中之事、

一御家人中雖有所望地、不可立神人居宅事、

一諸役田知行仁、每事無沙汰之時者、可召放其地事、

一社邊掃除者、宮司幷神人等可致奔走事、

一諸人號屋地、雖申給神領內、則不作家、不辨收地料、剩於彼地內定置百姓納取地子、偏如私領有受用族云々、於自今已後者、縱以上裁雖預給、至如此之仁者、言上子細、爲社家可召放件地、若又乍居住不社納地料者、就訴訟之是非、可被付渡其家於其地事、

右條々、堅固所被仰出也、以此旨可有其沙汰之狀如件、

文明十年卯月十五日　遠江守正任（相良）奉

法泉寺殿（大內政弘）御判

十六日、戊申日吉祭、

内侍上卿參向セズ

國役無キニ依リ奉幣セズ

社家ナシテ執行セシム

山名政豐幣料ヲ沙汰セズ

〔京都御所東山御文庫記錄〕○甲二十　御湯殿上日記　四月十六日、ひよしのまつり內侍上卿あともさんりうあし、くまやくおきまより御へ寄も万いらさるに、辨さんりうのよし申、これも下きやうおきに、まりうまも、さんりうりおふましきにて、その分、てんそうしてをほをらるゝ、りねくさゝめ申、へきまくせとあり、神事りろ寄さるとて、去やあに御とりおこおふよしきこゆる、

〔實隆公記〕五　四月十六日、戊申、雨降、今日日吉祭也、當年依社家申狀、座主准后頻執奏、上卿□等可參行、已以被經御沙汰之處、幣料（但馬國役□□）山名（政豐）無沙汰、山口關務也云々、兼又供給圓明無沙汰之間、俄不及其沙汰、□□□令延引歟、但又如亂裏執行之□□聞實否可歎々々、

〔晴富宿禰記〕四月十四日、丙午、陰、日吉祭事藏人左少辨元長觸之、（亂後者被付社家、）官務（壬生雅久）遣請文、則下知盛俊之處、參向辨供給杉生無沙汰之間、不參向延引云々、偶今可被行之處、如此違亂無念事也、

〔蜷川親元日記〕六　四月十六日、戊申、雨晴、

一日吉御祭禮無爲之由、西勝房註進、

十穀坊主本願　参詣人群集　洛中諸人鐘ヲ清水寺ニ運ブ

〔續史愚抄〕四十後土御門院中之上　四月十六日、戊申、日吉祭無沙汰、親長卿記追、

京都清水寺、新ニ大鐘ヲ鑄造ス、

〔晴富宿禰記〕四月十六日、戊申、雨降、自晝止、今日清水寺鐘鑄也、當内裏西邊土御門室町邊鰍空原、構假屋鑄之、十穀坊主本願也、

十七日、己酉、晴、鑄鐘參詣、邊土近境諸人成群云々、

廿日、壬子、晴、先日十六日、所鑄之鐘、今日引送清水寺、洛中諸人合力、以力車引之、輪於所々破損云々、力車之上鐘傍有風流、猿幷木振（枠カ）等乘之、見物族成群、女房彌一九等見物了、

〔大乘院日記目錄〕三　四月十七日、清水寺鐘鑄之、

〔大乘院寺社雜事記〕六十五　四月十三日、

一四日（昨日）郎正元來、〇中略今明日之間ニ、清水寺大鐘鑄之之由、支度大儀也、〇下略

十六日、雨下、

一清水寺鐘今日鑄之了、於鷹司室町邊也、

〇清水寺奉加ノコト、左ニ附收ス、

〔京都御所東山御文庫記錄〕甲二十〇山城　御湯殿上日記　五月十八日、きよ水

寺ゑのうの事申、御ゑんしやくのよしをはをらるゝに、うさねく申につきて、ちやうにゝゝせられく、きんふくをんりへてはうをさるゝ、

十七日、己酉、賀茂祭ヲ停ム、

〔京都御所東山御文庫記錄〕甲二十〇山城　御湯殿上日記　四月十七日、うものまつり御神事、御さゝ月ゐいる、源（盛田雅行）大納言あとも去こう、

〔實隆公記〕五　四月十七日、己酉、陰、時々日光現、今日賀茂祭也、□□（諸事カ）之儀如形行之歟、每事朝儀有若□□□有餘者乎、

〔歷代殘闕日記〕八十七言國卿記　四月十七日、賀茂祭云々、（無之歟、）

〔親長卿記〕三十二　當社神事大儀及闕如云々、太以不可然、所詮爲當知行之上者、攝州北野庄被懸課役、可被企神役之由、被聞食之旨、天氣所候也、悉之以狀、　左少辨

四月十七日

鴨河合祝館

〔宣胤卿記〕文明十三年四月十七日賀茂祭、亂中亂後不及沙汰、

酒商中興、家俊、他ノ酒商ノ柳桶ニ六星紋ヲ濫用スルヲ幕府ニ訴フ、是日、

金覆輪太刀ヲ賜フ　庭田雅行祗候　攝津北野莊ニ課役ヲ懸ケ神役ヲ企ツ

幕府、之ヲ禁ズ、

〔蜷川親元日記〕六　四月十八日、庚戌、天晴、

一大柳酒屋中興申、奉書布野州より到來、

中興新左衞門尉家俊申、柳桶六星紋事、於家俊一類者用之處、近年猥非分之輩付此紋云々、太無謂、所詮速可令停止之、若又有相續子細者、可明白之由候也、仍執達如件、

四月十七日　　英基判（有光）　貞康（飯尾）以此一通政所公人相觸之、

酒屋中

五月廿五日、丙戌、天晴、

一柳中興新左衞門尉貴殿御樽三、饅頭一折、干鯛一折進上、就桶文之儀、被成下御奉書御禮、

越智家榮、城ヲ大和今市ニ築キ、役夫ヲ興福寺領辰市莊ニ課ス、興福寺之ニ應ゼズ、

〔多聞院日記〕一〇大和　卯月十七日、近年越智彈正忠（家榮）沙汰トヲ、牢人爲可相支、今市邊ニ相構城廓、仍屈（歸下同ジ）要害以下之料ニ、人夫相懸辰市東九條郷云々、一國悉以不漏寺社進止、然而別而於當庄者、五師之遷代領上下一圓知行之庄薗也、如此所役殊以不可然上者、可被止催促由、學侶ヨリ越智方ヘ遣書狀了、廿三日、辰市沙汰人來云、今度今市城廓屈以下用害人夫之事、自寺門依仰候哉、催促之儀無之條、依御威光之條、畏入之由申ス、

〔大乘院寺社雜事記〕六十五　四月朔日、雨下、

一山村武藏（修藤）公參申、城構事於鬼薗山者不可叶旨仰付之了、越智、古市ニ此旨可申由仰付之、

〔大乘院寺社雜事記〕六十六　七月十七日、

一山村武藏公參申、同檢斷事欺申子細在之、

奈良中城構事、可及其沙汰云々、鬼薗山事ハ、先日古市ニ巨細仰之、存其旨歟、越智方儀尙々可屆由、山村ニ仰了、

八月五日、

一此兩三日より今市所々在所ニ、自越智方申付城構、致其沙汰云々、所々人夫共召出之、壁共五間十間宛、筒井方之者共、少々相殘躰ニ懸之云々、城衆

寺社領ヲ問ハズ人夫ヲ課ス

伊賀人百人分可籠云々、人別三十石宛可爲給分云々、大將ハ堤也云々、筒井箸尾之跡分可足向云々、世間口遊如此、尙々院家僧坊領不可有正躰基也、珍事々々、

十九日、辛亥、皇妹眞乘寺宮ヲ以テ、景愛寺住持ト爲ス、是日、入院セラル、

〔實隆公記〕五　四月十九日、辛亥、晴、〇中略抑今日眞乘寺宮舊院皇女、御母儀故權典侍云々、景愛寺御入院、□□□然珍重々々、

二十日、壬子、天顏快霽、晩頭參景愛寺、源大納言、四辻宰相中將等同道、兵部卿、日野中納言、柳原資光新中納言□參會、盃酌及夜歸宅、

〔兼顯卿記〕〇岩崎文庫所藏　四月十九日、辛亥、晴、今日眞乘寺宮御入院、慶愛寺也、慶愛寺、景愛寺ノ誤、御臺御方一向被取立申、仍爲御見物御臺渡御之間、爲御禮予同參候、但入院之儀以後時之程也、〇下略

〔兼顯卿記別記〕〇岩崎文庫所藏　四月十九日、晴、〇中略四時分參賀慶愛寺、眞乘寺宮今日御入院也、御臺御方被執立申間有御成、仍參賀可然由有入魂方、然間參者也、有御酒、參御前、御臺幷新命御對面、小時歸宅、〇下略

二十日、壬子、皇子、勝仁、御不例、

參賀ノ人々

義政夫人ノ執立

〔實隆公記〕五　四月廿一日、癸丑、晴、〇中略抑若宮御方自昨夜御不例云々、今日御減□□珍重々々、

幕府、山城守護山名政豐ヲ罷メ、畠山政長ヲ以テ之ニ代フ、

〔晴富宿禰記〕四月十四日、丙午、陰、官務遣狀管領畠山左衞門督内奉行於伊地知宅返報、當國守護事今日被仰出候、當方祝著候、御判者未成之由告之、

十七日、己酉、晴、伊地知管領畠山内之奉行來官務上宿所、當國守護事被仰付畠山管領也、左衞門督、已令治定、明後日御禮可申候、就其當國郡之事、圖以下一見大切之由、內々左衞門督申旨云々、

廿日、壬子、晴、伊地知送狀於官務方、左衞門督管領畠山當國守護職事、今日御禮出仕也、仍紀伊郡指圖幷當國才學等存知、大切御文書拜見事、左衞門督申候、早々可被懸御意云々、何樣明日可參申由、令返答了、

廿一日、癸丑、晴、官務今朝向上宿所、今日可罷向官領云々、

〔蜷川親元日記〕六　四月廿日、壬子、天晴、

一山城國守護職事、管領畠山殿政長被仰出、御禮御申候、

〔實隆公記〕五　四月廿一日、癸丑、晴、〇中略向□山許遣太刀、當國守護職之事

政長山城國郡ノ圖ヲ求ム

政長御禮

被仰付云々□賀也、

〔尋尊大僧正記〕九　二月廿六日、夜雷雨下、

一明日春日祭云々、權中納言上卿御書持來、○中略　廿三日御書也、

家門小鹽庄遵行事山名難申、其子細ハ至近日山城守護職者山名也、然而畠山ニ可被改之由被仰上者、遵行事不可出之云々、畠山ニ不可渡云々、兩方儀御大事也、所詮御料所分ニテ可有歟云々、仍小鹽庄事無一途之間珍事、借下錢主無之、御堂ニ御借下事可被申歟、御領狀不審之由廣橋申云々、尙々比興之天下也、

一條家守護職小鹽莊遵行狀ヲ得ントス

〔大乘院寺社雜事記〕六十五　四月十九日、

一浮說山城國守護職畠山治定、仍小鹽庄事、家門御知行無爲歟云々、山城在々所々關可破歟云々、

山城所々ノ關所撤廢

廿五日、

一松殿小(少)將爲御使下向、○中略　京都事色々相語之、

山城國守護職事山名辭退之、畠山蒙仰了、寺社本所領不可有相違云々、爲事實者、可謂希有者歟、

尋尊政長ノ就職ヲ賀ス

廿七日、

一榼三荷圓粽、豆、遣(管下同ジ)官領方了、同榼一荷粽遣奉行方、榼二荷粽遣成身院了、人夫若槻一人、倉庄一人、大市一人、横田一人、五ヶ所二人、十座二人、宰領慶万法師、

五月朔日、雨下、

一官領幷順宣、定寛返事到來、榼共悅入云々、

〔東院年中行事記〕八　六月四日、晴

昨日入部云々、春滿丸之舍兄綠川十郎來、

八月十一日、小雨下、庚子、山城守護代遊佐彈正之代彌六宇治槇島ヘ入部、神保與三左衞門淀ヘ入部云々、

芝居立ツ

二十二日、甲寅　誓願寺勸進猿樂アリ、義尙等之ヲ觀ル、

〔親長卿記〕九　四月廿二日、陰、參內、番也、自今日有勸進猿樂云々、及晚雨下、

二番之後各芝居立云々、

廿四日、晴、當番召進元長了、猿樂今日無之云々、

廿五日、晴、○中略　今日有猿樂云々、

義尚及ビ義政夫人參會

〔兼顯卿記〕○岩崎文庫所藏　四月廿二日、甲寅、晴、八時分雨降、自今日爲誓願寺上於土(橋脚ヵ)御門室町邊有勸進猿樂、宰相中將殿、御臺御方蜜(密ヵ)被召女房車御成、依雨諸人□□□不便體也、□觀世也、

第二日

廿三日、乙卯、雨脚休止之間、勸進猿樂第二日也、宰相中將殿、御臺御方御成、侍從政資申沙汰一獻間、令祇候者、可悅入由有音信、故障之間、稱所勞令辭退不參、

足利義敎月忌ノ爲猿樂ナシ結願

廿四日、丙辰、雨降、依普光院(廣下同ジ)殿御月忌、猿樂無之、

廿五日、丁巳、晴、勸進猿樂結願也、大樹、御臺御成、

〔兼顯卿記別記〕○岩崎文庫所藏　四月廿二日、自八時分降雨、自今日爲誓願寺勸進、有勸進猿樂、觀世、宰相中將殿、御臺御方等蜜々被召加女中車御成云々、依雨諸人不便之體也云々、

廿三日、雨降、無程雨脚休止之間、勸進猿樂有之、第二(日脫カ)也、

廿四日、雨降、○略中普光院殿御月忌也、仍勸進猿樂無之云々、依御見物歟、

廿五日、晴、○略中勸進猿樂結願也、御成同前、在所ハ土御門室町與町々間也、於洛中非常興初例也云々、爲之如何、殊雜人地下者共打座敷、何雖蜜儀、有御見物哉、不可說々々々、莫言々々、室町殿無御成、尤可然事也、

義政見物セズ

〔實隆公記〕五十　四月廿二日、甲寅、朝間晴、自午後雨降、於誓□□(願ヵ寺)邊觀世有勸進猿樂云々、都鄙成市□□□□、

觀世太夫

〔晴富宿禰記〕四月廿一日(二カ)、癸丑、晴、○略中誓願寺勸進有猿樂、觀世大夫也、室町殿御棧敷渡御、神之御棧敷之東西、南面、公方同御臺御棧敷有之云々、其在所正親町室町邊歟鐘鑄在所之北也云々、自雨以前始之云々、

能目錄

廿三日、乙卯、晴、猿樂今日又在之、

〔蜷川親元日記〕六　四月廿二日、甲寅、曇雨、

一勸進猿樂、觀世大夫、(ニ)親町室町、貴殿御棧敷二間、能、かつらきの賀茂、ゑひらの梅、雨降て果、又雨晴て及カ文て仕、丹後物狂、楊貴妃、鞍馬天狗、守久、入とゝうり、御方御所樣、密々ニ御成御車、ありて、依爲上意、重て能あり、

義尚ノ所望ニ依リ重テ能アリ

廿三日、乙卯、天晴、

一勸進猿樂、貴殿御出、七郎殿、白樂天、うとゝう小町、熊野ゐいり、蟬丸、とおちう、中將ひめ、松山ゐゝゝ、吉野ゑりゐ、入とゝうり、

廿五日、丁巳、天晴、

一七郎殿勸進御棧敷へ御出、貴殿依御蒙(總)々無御出、誓願寺、ともあり、三井寺、草かり、ゑんふう、ろんさん、をいもて、四位少將、きよ玄象、

〔大乘院日記目錄〕三　四月廿二日、○中略勸進猿樂、公方御見物三ヶ日、

〔大乘院寺社雜事記〕六十五　四月十三日、

一昨日四郎正元來、○中略、清水寺鑄鐘ノコトニ於此鐘鑄之跡、觀世大夫可有勸進猿樂云々、可爲雜之(入カ)見物云々、但公方可有御見物歟、然者大名共同可見物、及此儀者猿樂方損亡不可及是非云々、當時雅意之時分也、不思儀可出來哉、

十七日、

一誓願寺勸進猿樂、自來廿二日可有云々、

廿五日、

一松殿小(少)將爲御使下向、○中略

廿二日より勸進猿樂在之、觀世三郎息、棧敷六十餘間、公方御棧敷、足輕等棧敷、諸大名棧敷打之、於畠山者雖棧敷打之、上下爲一人不能見物云々、

二十三日、乙卯、幕府、僧景三横川チ等持寺住持ト爲ス、是日、入院シ、義尚之ニ臨ム、

〔實隆公記〕五　四月廿三日、乙卯、晴、○中略今日横川等持寺入院云々、

〔兼顯卿記別記〕○岩崎文庫所藏　四月十九日、晴、早旦布施下野守英基來云、來廿三日、等持寺入院可有御成、布衣侍可用意歟由尋來、予對面答云、御成爲御狩衣者、勿論雲客諸大夫布衣侍等可被召具、爲御直垂者不可入歟、但亂以前事慥不覺悟、內々可伺時宜由返答、頃之又來、入院御成事伺申處、於五山者御小直衣也、自餘者御直垂也、仍御僮僕不可入由御返事也、可覺悟由申間、得其意返答、

〔兼顯卿記〕○岩崎文庫所藏　六月十五日、乙巳、晴、○中略同向等持寺、横川西堂住院候間爲賀之也、

〔蜷川親元日記〕六　四月廿三日、乙卯、天晴、

一等持寺入院、景三西堂、横川、御成あり、管領御參、

〔補庵京華後集〕京師等持入寺法語予時十歲、五　文明戊戌二月廿八日、公帖俄降、三月十一日於常德院受請、四月廿三日入寺、隔宿雷雨、到曉快晴、相公枉台駕榮證、

布施英基廣橋兼顯ニ義尙參向ノ準備ヲ尋ヌ

入寺法語

山門

指山門、三等持門通貫十方、喝一喝、先入關者王、

佛殿

天地與我同根、說甚天藏地藏、今日賊平、但賞爾勝軍有功、舉數珠、於諸寶中法寶爲上、

土地

護法護人、我早識他、々還識我、麼昨日赴箇村齋、半路遇卒風暴雨、向神廟裏避得過、

祖師

世尊拈華且置如何、是達磨拈華賊、舉坐具、要看便看香南雪北、香雪亭名、

帖

這是王世一切諸佛大檀越當收復兩京、平定四海之日、台駕入寺、與新長老同從無盡藏頂王三昧起、說底陀羅尼經、喚大衆、諦聽諦聽、于時西賊乞降、十餘年事語意及之、一日而治、故諸佛

衣

拈曇仲芳首座衣

吾翁放開一線、黃梅夜送盧公、舉衣、看々、三代禮樂在緇衣中、

祝香

大日本國山城州京師等持禪寺新住持傳法沙門某、謹焚寶香、端爲祝延、今上皇帝聖躬萬歲々々萬々歲、陛下恭願、一者江水、二者河水、三者淮水、四者濟水、湛恩波以滔々於九天、東爲泰山、西爲華山、南爲衡山、北爲恒山、束壽岳以巍々於万歲、

檀香

這香封植乎楊柳營中、欝蕊乎梧桐名上、爇却寶爐、奉爲大檀越大人相公資倍祿算、欽願柱礎王室百億國現白袍將軍身、金湯法門千万劫、做緋衣功德主、

嗣香

昔岳林禮馬祖塔、頓發大機、無心可傳、又薦福見雲門錄、直得大用、無法可說、雖然如此、只者無說無傳、早是眼中著屑別々、舉香、這箇山野甫十三歲、曾於養源塔下冷地裏、拾得底木橛、日往月徠、與無影樹連其陰、霜辛雪苦、與不蒲枝一其節、忽被業風吹去、向爐中薰徹、郁々紛々、塵々刹々、供養相國第一座曇仲老、拙不敢報答深恩、興起先烈、只要使人知三十年後生惡芽孽、

文明十年四月二十八日

等持寺蚊多シ

京之等持夏月多蚊、長喙細身、飛而食人肉、未奈之何、季玉球藏主、適侍予香、而紙帳鐵槃不廢讀書、可嘉尚矣、一夕爲豹脚所祟、耿々不寐、戲題小詩寄香案下、擊節惟幸、

城陰古寺聚蚊窟、當夏如雷破柱然、糊紙補幬深警夜、燒糠閉戸薄籠烟、擺衣柳絮春風起、揮扇芭蕉秋雨懸、人不堪憂公獨樂、書灯花落自無眠、

小倉實澄百濟寺酒井佐久良山ノ松茸ヲ贈ル

代書寄小倉將監（實澄）公詩幷敍、

今茲戊戌春、余承乏等持、以官命不可逭也、故人小倉文紀居士、每有便寄書告曰、入洛獻賀有日在矣、予謂文紀信士也、必如約矣、九月十六日使者至、就審國有多故、以不果其來也、百濟寺酒二荷、佐久良山松茸一百本、副書見贈、酒以漉其故者、茸以採其新者、吁物無兩大、何其爲賜如此甚大也耶、多可々々、抃舞有餘、卒賦川八句一篇、以代復紙、蓋奉謝惠意之萬一焉耳、非詩恕之、等持古寺秋將暮、久待吾公入洛陽、擁箒常占鵲傳語、得書忽喜鴈成行、擔頭竹葉四樽重、籠底松茸百本香、有酒有肴猶有闕、掀髯一咲不同床、

○景三ノ景德寺住持トナルコト、七年十二月十五日ノ條ニ見ユ、

二十八日、庚申、二尊院善空、護摩法ヲ修シテ、聖祚ヲ祈ル、

丹波上村

〔京都御所東山御文庫記錄〕（甲二十、山城、御湯殿上日記）○四月廿八日、二そんいん八千まいのこゑたくよし、御いのり申さるゝ、御あて物申いささるゝ、をしく宮の御りゝ、二の宮の御りゝ申さるゝ、

廿九日、雨ふる、あゝさこあゝさの御くゐんしゆゑいる、

二十九日、辛酉、禁裏御料所伊勢栗眞莊、年貢ヲ進納ス、

〔兼顯卿記別記〕（○岩崎文庫所藏）四月廿九日、辛酉、雨降、○中略、伊州栗眞庄御年貢貳千九百疋進納之由玉村注進、相觸勾當內侍局者也、

〔兼顯卿記〕（○岩崎文庫所藏）五月八日、己巳、晴、晚頭夕立洒、禁裏御料所丹波國上村御年貢千五百疋進納之由、自玉村許申送、則以書狀申遣勾當局者也、

○丹波上村、年貢ヲ進納スルコト、便宜合敍ス、

五月小　壬戌朔盡

一日、壬戌、御祝、

〔京都御所東山御文庫記録〕甲二十〇山城　御湯殿上日記　五月一日、御いわ井いつものことし、きう上らぬ御万いり、

〔兼顯卿記〕〇岩崎文庫所藏　五月一日、壬戌、雨降、中夏告朔、尤中心多樂也、珍重々々、幸甚々々、日野拾遺政資以下公武面々、多以賀來、〇下略

義政、竹田昭慶ニ馬ヲ與フ、

〔蜷川親元日記〕六　五月朔日、壬戌、雨、

一竹田法印（昭慶）ニ、先度公方樣より可被下之由被仰出候御馬、月毛、次郎四郎方より可被請取之由、貴殿依□□□遣之、

三日、甲子、雨、夜風雨、

一竹田法印、一昨日御馬御禮被參申、以次貴殿御養生藥持參之、

近衛政家、一乘院教玄等、宇治ニ螢ヲ觀ル、

〔大乘院寺社雜事記〕六十五　五月五日、雨下、

一權中納言（勤修寺經茂）被來、去朔日陽明（近衛政家）御方、一乘院御同道、宇治之螢御らん、自木津至平等院御船也、船中大雨、御迷惑云々、御宿森坊、三日夜ハ木津天神ニ御一宿、昨朝還御、伏見指月庵跡御一見云々、權中納言、藤宰相（武者小路綱光）御同道云々、

伏見指月庵跡ヲ見ル

義政ニ藥玉ヲ賜フ

庭田雅行粽ヲ獻ズ

邦高親王參內

五日、丙寅、端午節供、御祝、廷臣諸將義政ニ參賀ス、

〔京都御所東山御文庫記録〕甲二十〇山城　御湯殿上日記　五月五日、むろまちとのへ、御くすさゐ昨日御とく日にて、きさとく万いらせらるゝ、御つゝ井もろゐし、かしこまり御申あり、庭田よりまた万いる、ふしミ殿御万いり、へちに御さゝ月万いる、

義尙ノ第ニ參賀

邦高親王藥玉ヲ獻セラル

〔兼顯卿記〕〇岩崎文庫所藏　五月五日、丙寅、朝程雨降、自四時分屬晴、端午佳節一段嘉慶、尤中心多樂也、珍重々々、幸甚々々、早旦先參賀小河殿、則御出座、御對面之儀如毎朔、次參御臺御方、拜領御盃、於御末也、其後直參賀宰相中將殿、公武構見參儀同前、自禁裏御藥玉被進准后、予爲御使持參、仍直參內、被祝著畏申旨、以勾當申入、於局有賀酒、頃之歸家、人々多賀來、

〔京都御所東山御文庫記録〕甲二十〇山城　御湯殿上日記　五月四日、〇中略山くよより、いつものまた万いりて、御くもりともせらるゝ、五てうまた万いらもる、ぬしミ殿より、およひ御くすさゐ万いる、

〔蜷川親元日記〕六　五月四日、乙丑、雨、晴陰雨、

一御料所播州松井庄右方半分公事粽七十五把赤松刑(則満)部少輔、同半分數同前赤松遠江守、彼是百五十把、貴殿より被相副人、御所御末へ被納之、うけとりをゝ自此方被遣之、書樣、

御料所播磨松井庄公事粽ヲ進納ス

請取申粽事

合七十五把者

右爲御料所播州松井庄右方半分、所請取申如件、

文〜　赤松刑〜　伊〜　三上大〜員光

請取狀

同前一通　赤遠〜

御末へ上田を副進之、則杉山彈正左衞門尉宗房、出請取、

一自貴殿粽〜

賀茂競馬、

〔親長卿記〕九　五月一日、雨下、森雨、今日賀茂足調延引、依雨云々、

足調延引

二日、雨下、時々晴、昨日依雨無賀茂足調、今日有之云々、

五日、晴陰、雨時々下、及夜參內、競馬如常云々、

〔蜷川親元日記〕六　五月五日、丙寅、雨、

一貴殿(伊勢貞宗)賀茂競馬御見物、

伊勢貞宗競馬ヲ觀ル

興福寺衆徒、越智家榮卜議シ、有德錢ヲ西大寺領大和秋篠郷ニ課ス、

〔大乘院寺社雜事記〕六十五　五月五日、雨下、

一自六方秋篠之散郷者共ニ、料足共濟懸之、百貫或二百(貫脫カ)宛云々、秋篠不可叶旨申切云々、皆以西大寺領共也、今度自高山方新城之地(場)人夫事ハ、自學侶押留之間、秋篠如所存成下畢、只今儀ハ又六方敵人ニ罷成、是下地ハ自越智方申歟、(筑清)春圓之所爲也、六方輩も可有德分之由、申合事有之歟、大ニ面々所存相替而、秋篠方最員者無之云々、

秋篠郷命ニ應ゼズ

十一日、雨下、

一西大寺郷(領カ)寺門使入之、各逐電之間、則躰共ニ頸料足懸之、四門札打之云々、

逐電セシモノニ頸料足ヲ懸ク

珍事々々、

十九日、小雨、

六方蜂起

一六方沙汰、秋篠之名字爲寺額被籠寺頭畢云々、先日西大寺領者共ニ有德錢懸之、逐電了、惣郷ニ公人付之、不承引之故也云々、彼逐電輩ハ可沙汰由、頸ニ料足懸之了、秋篠失面目者也、但於學侶者六方沙汰不可然由申之云々、併越智幷春圓大所爲之間、六方ハ力有之、學侶秋篠ハ無力也、不可立用事歟、始終ハ料足可出之條勿論也、

廿六日、

一明後日秋篠可有發向云々、六方蜂起了、

廿八日、

一秋篠發向十日比ニ延引云々、

七日、戊辰、紫野今宮祭、

臨時御拜

〔京都御所東山御文庫記錄〕甲二十　○山城　御湯殿上日記

この月とて、御なて物申いさす、

七日、いまの宮のまつりの御物いミ、二所より万いらもる、けさよりまんしの御ゑ寄ゑなる、

九日、まんしゆ御ゑいゑふまてにて、御さゝ月万いる、ちやうゑう寺より御

頂法寺御撫物返上

あて物返万いる、

幕府神馬ヲ獻ズ

〔神馬引付〕

一今宮社　一疋　河原毛、以杉江奉之、五月二日、

五月七日祭禮、

八日、己巳、義政、建仁寺知足院及ビ兩足院ニ院領竝ニ末寺領等ヲ安堵セシム、

知足院領

〔兩足院文書〕○山城

建仁寺知足院領所々幷末寺同寺領等目錄在別紙事、所返付當院也、早如元可令全領知之狀如件、

文明十年五月八日

准三宮（花押）

建仁寺知足院領之事

一河島院御庄幷下司職　當國

一大岡郷內佛性田　同國

文明十年五月八日

一鳥羽田地　同國
一保善寺敷地　同國
一錦小路烏丸屋地　同國
一山岸三本松得光保内松丸名　越前國
一清水新庄摠追(捕)副使職　近江國
一列見保　同國
一末寺福聖寺幷寺領田畠等　加賀國
一當院敷地

文明十年二月　敬亮(花押)
鹿苑梵桂(花押)

建仁寺兩足院領所々同敷地幷諸末寺同寺領等目錄別紙在事、所返付當院也、早如元可令全領之狀如件、

文明十年五月八日

准三宮(花押)

建仁寺兩足院領之事

一嶋田、河内村、打越、能美八幡　加賀國
一末寺保善院幷寺領　同國
一龜別宮　但馬國
一末寺如意庵幷庵領　近江國
一仰木田地　同國
一散在田畠(西京幷桂、河嶋、)　當國
一修正料(文海長老年忌料、)　自通玄寺出之、
一當院敷地

文明十年二月日　敬亮(花押)
鹿苑梵桂(花押)

〔兩足院文書〕二　○山城

建仁寺兩足院末寺加賀國能美三ヶ庄之内保善院同寺領等事、被返付之上者、年貢諸公事以下、如先々嚴密可致其沙汰之由、被仰出候也、仍執達如件、

文明十年五月八日

文明十
六月十四日　布施下野守英基判
飯尾大和守元連判

當所名主沙汰人中

○義政、山城西禪寺、鹿王院、寶幢寺及ビ金剛院ニ、寺領ヲ安堵セシムルコト、便宜左ニ合敍ス、

〔蔭涼軒日錄〕延德四年八月七日、不參、天快晴、○略中西禪寺宗怡西堂來云、西禪寺重書、亂中悉紛失矣、亂後御還補之御判壹通可有之、益之蔭涼時紛失、御判事可白沙汰之由有之、終不成就蹉過云々、慈照相公御還補之御判壹通、卽尅宗怡西堂仁度之、(讀下同ジ)請取有之、使者集丹首座度之、慈照院殿喜山相公御還補御判寫也、

西禪寺領播磨國的部北條、丹波國神宮寺領、同國小多田保、近江國小相撲成物、嵯峨中所々屋地田畠幷當寺敷地等事、所返付也、早如元寺家可全領知之狀如件、

文明十年五月廿四日

准三宮源朝臣御判

〔鹿王院文書〕三○山城

西禪寺ノ什書亂中紛失

鹿王院領丹波國知見谷四分壹、同國曾我部國衙、丹後國餘戶里庄、若狹國黑田三名、備前國輕部庄山手村、周防國牟禮保、越中國井見庄領家職、同國小佐味庄參分貳方、武藏國赤塚鄉、遠江國小高鄉、飛驒國大八賀蕭條菴分、近江國忍海庄、伊香新庄、勸心院、伊庭下司名、平江田石灰石塔觀音坊跡以下散在、山城國所々散在田畠屋地等事、早令停止方々押妨、如元寺家可全領知之狀如件、

文明十年五月廿七日

准三宮源朝臣(花押)

〔晴富宿禰記〕三月廿八日、庚寅曉雨、自午始晴、立夏四月節、○略中寶幢三昧寺々領所々屋地田畠等、知行不可有相違之由奉書松田書出、依官務籌策伺申、法金剛院領同前也、知事本通房來臨、張行小飲、

〔鹿王院文書〕三○山城

寶幢寺領播磨國安田庄、加賀國松寺村、但馬國鎌田庄、阿波國賀茂和食、土佐國吾河山、攝津國五箇庄、同國倉殿地頭方、同國多田庄阿古谷、日向國穆佐院、山城國乙訓郡大覺寺等事、所返付也、早如元寺家可全領知之狀如件、

文明十年五月八日

鹿王院

寶幢寺

文明十年五月廿八日

准三宮源朝臣(花押)

金剛院

金剛院領播磨國南條下郷、備前國淺越庄、丹波國栗作、周防國玖珂庄等事、所返付也者、早如元可全領知之狀如件、

文明十年五月廿八日

准三宮(花押)

實興書寫シテ進上ス

政顯書寫シテ進上ス

九日、庚午、義政、正親町三條實興及ビ勸修寺政顯ヲシテ、內裏御歌合ヲ書寫セシム、

〔兼顯卿記〕(○岩崎文庫所藏)　五月一日、壬戌、雨降、入夜自室町殿有召、參小河殿、和歌御双紙御詠等事、條々有被仰下旨、頃之歸宅、

九日、庚午、晴、晚夕立雷鳴、午天參室町殿、條々披露、自頭中將實興朝臣許、被書寫室町殿御双紙(內裏御歌合也)、書進上之間、持參、以小宰相局進上、終日於春日局有盃酌興、秉燭程歸家、

十日、辛未、晴、自藏人辨許、被書御双紙(內裏歌合)、一帖(御本堺等有之)、書進上之間、以左京大夫局進上之、冷泉大納言借進上之歌合二冊被返下之、

○義政、義敎時代ノ諸社法樂寄書ヲ、實相院ニ借リ、實興及ビ中山宣親ニ書寫セシムルコト、並ニ義尙、壬生雅久ニ雙紙ヲ書寫セシムルコト、便宜左ニ合敍ス、

〔兼顯卿記〕(○岩崎文庫所藏)　五月四日、乙丑、雨降、八時分參小河殿、持參先御代御法樂一座、(五十六冊)依被借召、自實相院被進者也、以次條々伺申、(○下略)

十九日、庚辰、朝程晴、自午天雨降、早旦自室町殿有御使、御双紙事也、

八月十五日、甲辰、晴、月節幸甚々々、午天有召、參小河殿、條々有被仰下旨、委注別記、(○中略、前東大寺別當西室僧正公惠歸寺ノコトニカヽル、八月十五日ノ條ニ收ム、)小時又有御使、(榮阿)、三條藏人辨書寫御双紙被出之、但勸辨下向賀州之間、其旨申入處、雖爲誰人、可計書由被仰下間、令參候、條々伺申者也、

政顯加賀ニ下ル

十六日、乙巳、晴、(○中略)及晚直參小河殿、御双紙事條々披露、

十七日、丙午、晴、入夜雨下、及晚參小河殿、御双紙事也、三條、中山兩人書寫御双紙遣之、

十二月二日、己丑、晴、自小河殿有御使、(德阿彌)、被書寫三條幷中山兩人諸社御法

樂寄書、未出來歟由有御尋、仍以書狀尋遣兩人、各近日可書進上由、得其意可披露由返答、晩參小河殿、條々披露、

〔兼顯卿記別記〕○岩崎文庫所藏　八月十五日、甲辰、晴、雲月暗晴、風月佳節、尤珍重々々、○中略　八時分自室町殿有御使、榮阿、普廣院殿御代諸社御法樂寄書十帖被出之、頭中將三條勸修寺藏人辨兩人可書寫進上由仰也、先以畏奉、但藏人辨政顯者、近日下向賀州、自然御尋之時、得其意可申入由、申置罷下候間、可如何仕候哉、重而被仰下、可申付他人由、令言上處、重而被下御使、雖爲誰人、相計可申付由被仰下間畏奉、何樣祗候仕、筆者等可伺申由申入、御返事則參候、筆者人數如此注之、續左、入見參、可爲誰人哉、但新衆三人筆可被御覽歟、然者如先々何ニテモ書セテ可入見參由伺申處、其分可申付、可被御覽由仰也、○中略　右條々以珠鶴喝食申入者也、

松木
新衆
四辻宰相中將
同
中山
同
左少辨

十六日、乙巳、晴、○中略　又自室町殿有御使、榮阿、先度自實相院被借進普廣院御代御法樂寄書、永享十二年迄六月有之、自七月至嘉吉元六月一年分無之、如何樣子細哉、可尋申實相院由仰也、相尋重而可申入之由、令言上者也、○中略　自禪閤直參小河御亭、御双紙筆等事條々伺申、中山書寫物、是モ不宜、雖然非殊御双紙間、可書由被仰也、

十七日、丙午、晴、入夜雨降、未斜參小河殿、御双紙事條々披露、申次珠鶴喝食、仍三條、中山兩所江御双紙送遣之、先御代年々諸社御法樂寄書也、自第一至第五三條、自第六迄第十中山書寫也、

〔晴富宿禰記〕十一月廿一日、己卯、晴、○中略　雅久一昨日被召武家御方御所、將軍、先年所書進上之御草紙一帖、以前火事紛失、可書進由被仰出云々、○義尙、雅久ニ古今和歌集ヲ書寫セシムルコト、八年四月一日ノ條ニ見ユ、

十日、辛未、御不豫、

〔京都御所東山御文庫記錄〕甲二十　御湯殿上日記　五月十日、○中略　御むしけにて、なゝら（半非明茂）ゆめして、御くもりゐいらもる、

中山宣親ニ寫サシム

缺本ヲ實相院ニ索ム

幕府、禁制ヲ高野山金剛三昧院領筑前粥田莊ニ掲グ、

〔高野山文書〕（金剛三昧院紀伊）○

禁制

高野山金剛三昧院領筑前國粥田庄

一敦生禁斷事

一軍勢甲乙人等亂入狼藉事

一守護使不入事

右條々、寶治元年以來、堅被制止之訖、若有違犯之輩者、可被處罪科之由、所被仰下也、仍下知如件、

文明十年五月十日　　和泉前司清原（清賢）眞人（花押）

大和前司三善（飯尾元運）朝臣（花押）

十三日、甲戌、義政、姉小路基綱ノ所領飛驒小島、古河兩郷代官トシテ、遠山左衞門尉ヲ入部セシメ、小笠原家長ヲシテ、之ヲ援助セシム、

〔小笠原古文書〕（勝山）　乾

姉小路宰相（基綱）知行飛州小嶋、古河兩郷代官入部使節事、遠山加藤左衞門尉申付候、早々令合力、可抽忠儀候也、

五月十三日　　小笠原左衞門佐とのへ　（足利義政）（花押）

（包紙）文明十年八月廿三日到來　義尚（義政）將軍御書

小笠原左衞門佐とのへ

○院宣ヲ姉小路中將ニ下シ、飛驒小島郷神通川以西ノ地頭職ヲ安堵セシメラルヽコト、應仁二年五月十六日ノ條ニ、飛驒守護京極政高、姉小路基綱、小島勝言ノ兩國司ヲ逐フコト、文明五年十月十一日ノ條ニ見ユ、

諸國淫雨洪水、

〔親長卿記〕九　五月十三日、甚雨下、近日無休止、所々洪水過法云々、

〔歷代殘闕日記〕（八十七言國卿記）　五月十三日、雖大小（水カ）、明日御樂ニ上洛也、

〔東院年中行事記〕（八）　（自曉時雷鳴大雨下、）五月十三日、甲戌、諸方洪水、非言語所覃云々、

〔阿蘇學頭坊文書〕（三肥後）○　（鹿渡橋用抄）

鹿渡橋之事、自往古爲當山之所役、令造營之事、于今無間斷、號當神之御橋、万

肥後阿蘇鹿渡橋流失

巧匠無雙ノ正賢山伏等ト橋ヲ造營ス

主要材木山作

人之通路、誠以無比類、恐可謂天下無雙共歟、殊以國中之通路、無此橋者難叶事、爲眼前者也、就中國中之諸旦方、雖有參詣神拜之志、無此橋者、無其甲斐歟、別而者守護惣官互之御通用、無此橋者不可了簡之事、無異途者也、仍盡未來際、彼飛梁之巧匠、委可記置處也、然而此前雖被少々記置不委、今度爲後用記之處也、去文明十年戊戌五月十三日年、依前代未聞之洪水、此橋流落訖、依爲意外之造興、番匠可召仕了簡無之、一山之迷惑、諸人之通路空手、然而此時節、當神之御冥助相催、於那羅延坊正賢トテ、巧匠無雙之人在之、爲彼人於惣大工、山伏十二三人相副、造營成辨訖、以正賢談合所記置也、自今以後、以此趣可有造興者也、

一先以山之案内、前之年若者正月時分、以一山之使僧、下田方へ可被申事、

一一山鹿渡下向以前、自當山柱、水尾（ミヲ）桁、根橋、冠木（かむき）等之大儀之材木之山作可有也、材木出來之時、一山同時ニ鹿渡へ下向候而、陣屋被作、則彼材木可被引也、此以前先以鹿渡ゑ下向候而、在宅以後山作候之間、當山鹿渡山入三ケ所之世務、依爲造作、橋延引候き、今度以談合、先山作在之、是故こ橋之造營速疾ニ成就候訖、相構々々、此以後以私之思慮、於此記文不可有兎角之義篇處也、

結橋ノ木數

本橋材木

一山作之時節者、下野狩以後也、

ゆい橋之木數次第

一合掌六本、長さ六いろ（ひカ下同ジ）三尺、

一長木、坊別四百本つゝ、

一ろつら、坊別十荷つゝ、

一ほかゑ、むしめよりおゐりまて、坊別に五口つゝ、長さ五いろ、

一とうれほかゑ、五坊寄合て一口つゝ、おろさ四十ひろ、つかいいつをもあをろやきりやしてうつかり、おもむき〻さゝめて存人あるへき歟、

以上ゆい橋の催如此、

本橋之材木次第

一柱四本、長さ六いろ三尺、此内わかき者一本とる也、

一ろむ木三ゑゆ、長さ一丈三尺、

一ほろ柱二本、長さ一丈三尺、口一尺三寸、

一ぬき五ちやう、長さ一丈三尺、ひろさ二尺二寸、あつさ八寸、

一ほか木九、長さ一丈三尺、ひろさ一尺、あつさ八寸、

橋ノ眼目

一とさいの木二本、口一尺六寸、長さ一丈三尺五寸、
一根橋三本、長さ六いろ三尺、口一尺八寸、是ハ此方れ分也、
一むろへの根橋、長さ八いろ三尺、口一尺八寸、
一水尾（ミヲ）のきさ九いろ三尺、口一尺八寸、ろす三本、但口のあつさハ、材木之木ろさあらハ、二尺あまりも可然歟、橋の眼目ハきさおるゆへあり、
一板、坊別に三まいつゝ、長さ一丈三尺五寸、ひろさ一尺八寸、
一つちいの木、坊別一本つゝ、
おろさ一丈三尺、ひろさ七寸、あつさ六寸、
一やこの木、坊別一ちやう、長さ一丈三尺五寸四方、
一つゝむしら、坊別一本、長さ五尺、口六寸、あんゑつに、つちいの木一本つゝ、
又やこの木一本、つゝハしら一本つゝとり候、これハ本坊に板ゝすとる
よよりて、如此ゑいふん候、
一あん室に板一まいつゝとり候、新あんゑつも一まいつゝとり候、又今度
いもし長くおり候よよて、あんゑつみおよりあひ候て、板二まい、つちい
二本つゝとり候、まるの橋より遠くおり候分如此候、自今以後此まゝさ

るへく候、
一きんやうし四本、長さ七尺五寸、口一尺一寸、是ハ衆徒行者の一らう二ら
うれ所役也、
一むろへよはろ柱一本、長さ六尺五寸、河上よ四尺の小柱一、是ハきしくつ
ゑ候て、遠くおり候よよりて、今度如此とりそへ候、おもむき衆ハ橋よ見え
候、
一くき長さ八寸五分四方、これハ坊別の板よそへて被出候、是も前よく衆
を年行事のさいゑんよてつくり候へハ、おそく候つる間、今度如此さゝ
め候、ろすハ板の數よより候、三まいよとり候時ハ、く衆十八、もし三まい
の分を二まいよとり候時ハ、十二にて候、
一新庵室向の根橋一本、八いろ三尺、
一ろすろい十五、長さ一尺二寸四方、おりまてハ一尺八寸おり、
一つりろね五十、ろよの足二十、はちいひらきさうちつくるく衆ろす五百、
おろさ三寸五分、
以上惣ろす如此、

橋供養

一供養ハ法則在之、法用二箇、水神山神法樂大般若二部轉讀アルヘシ、

橋賃

一山伏方田樂在之、其餘之趣任行者方、

一今度ハ番匠不召仕候、禮物少々在之、

一橋ちんハ、上下親疎をゑらハすとるゑり、參詣者はもとよりとらす候、以前は任其人之志也、多少ハ日よよて定ゑし、橋ちんはまゑのとしよりも可取歟、ゆい橋又依時宜まゑのとしも可有歟、

山伏ノ番匠

一今度番匠不召仕候とて、大工申旨候之間、惣大工へ一貫、太刀一遣候、自今以後も、山伏共番匠仕候者候て渡候者、惣大工へ如此禮物はゝり可有也、

橋ノ事ニ就キ阿蘇惟家ノ書狀

番匠召仕候へは、祝ゑと六借敷候て、用錢おゝゑ入候て、結句延引候、此以後は以此記文、當奉行所へ被申候て、さやすく渡候樣よ可有了簡也、

文明十三年正月十一日記之、（朔筆）（當年行事御坊）學頭坊長宣（花押）

就鹿渡之橋之事、重而承候、依談合御返事延引候、然間於後季者、彼橋之事大工ニ可被渡ゑ之由、衆中より一筆可遣由承候、可然候、左樣之證文、師頭樣より一筆、年行事より一通、此方へも可給候、大工へも遣候て可然候、次ニハ如何樣御祝之分者、大工可給之由申候、可有御心得候、巨細高良尾張守可申候、恐惶謹言、

七月五日　（阿蘇）惟家（花押）

阿蘇山

衆徒御中

惟家二萬疋ヲ寄ス結橋出來

爲鹿渡橋料、鵝眼二万疋拜進候、被調重可被上候、結橋先御成就目出候、來年本橋可有御結構之由承候、千秋萬歲候、御慇懃之御札御喜悅候、其段御書如此候、恐惶謹言、

九月十日　朝夏（花押）

重岑（花押）

阿蘇山衆徒御中　御報

御札令披露候、抑鹿渡結橋去月以來被思食立、今月可有成就之由承候、千秋

萬歳候、殊來年者本橋可有御結構之通承候、尤目出候、從屋形樣も可有助成候、彌以奔走肝要候、恐惶謹言、

（別筆）「明應七天戊午」

九月十四日　朝夏（花押）

重岑（花押）

大寶院

那羅延坊御報

鹿渡再興之事、爰元依爲不辨、延引候之處、自野部御屋形樣（河解惟家）、可有御參詣候、早々可致奔走通被申付候條、先以結橋之事成就仕候、仍橋爲造營物、自屋形樣鵝眼二万疋御拜進、一山目出候、本橋之事來年者思立可申候、此等趣被得御意候、恐惶、

（別筆）「明應八天己未」

菊月十九日　契久

契義

去春義尚雅行ニ馬ヲ贈ルコトヲ約ス

（端裏書）

隈部之役人江進候案文　年行事福滿坊

城殿　懷順

隈部紀伊殿御宿所　契鎭

○鹿渡橋架設ノコト、其年月ヲ詳ニセズ、七月五日以下ノ文書姑クコヽニ合敍ス、

十四日、乙亥、義尚、庭田雅行ニ馬ヲ贈ル、

〔兼顯卿記〕（○岩崎文庫所藏）五月十三日、甲戌、雨降、自宰相中將殿有御使、（阿彌、○中略）仍午半剋參候、（○中略）去春於禁裏可被下御馬於源大納言由、有御約束、仍可被引遣其旨可傳仰由有仰、

十四日、乙亥、雨降、（○中略）自宰相中將殿有御使、夜前被仰下御馬被引下、□□源大納言（庭田）許由有仰、則副使者申遣仰之旨、祝著被來謝之、

十九日、庚辰、義政夫妻、義尚ノ第ニ臨ミテ、平家物語ヲ聽ク、

〔兼顯卿記〕（○岩崎文庫所藏）五月十九日、庚辰、朝程晴、自午天雨降、（○中略）今日准后

珠一撿挍
義政夫妻逗留

御臺渡宰相中將殿、爲平家被聞食也、仍參候、依仰也、八時分渡御、終日平家、（座頭）シユーケンキヨウ、前藤（高倉）宰相永繼卿右兵衛督（飛鳥井）雅康卿同祇候、其外御供衆少々祇候、今夜御逗留之間、半更之後歸家、

參會ノ輩

廿日、辛巳、或晴或雨、自宰相中將殿有御使、急可參候由也、仍四時分參仕、有平家、（永俊）聯輝軒、藤（武者小路）大納言資世卿、前藤宰相永繼卿同祇候、聯輝軒、予兩人於御前聽聞、種々有御雜談等、終日御酒也、入夜於簀子、御供衆、御方衆、申次、走衆等有召出、永繼卿執酌、初夜時分室町殿以下還御、其後歸家、

義政等歸第

廿四日、乙酉、晴、〇中略、義政疾病ノコトニカル、二十七日ノ條ニ收ム、直後直參宰相中將殿、有平家物語、仍聽聞、入夜歸宅、

八月九日、戊戌、晴、八時分參宰相中將殿、有平家物語、終日祇候、及半更直參內、條々奏事、

結願

〔兼顯卿記別記〕〇岩崎文庫所藏　八月九日、戊戌、晴、八時分參宰相中將殿、有平家物語、自去比珠一撿挍一部申入、今日結願也、仍緞子一端、盆一枚、千疋被下之、終日祇候、

〔蜷川親元日記〕六　五月十九日、庚辰、晴陰、

御虫氣ニ陰陽師ニ占ハセ御撫物ヲサル出泰山府君ノ御祈

一御所樣、上樣、此御方御所へ御成、七郎殿御供ニ御參、貴殿例式御門外ニ御參向、御門役〻〻勤仕之、平家（撿挍）シユ一被聞食、近日御方御所樣一部被聞食也、御一獻方小林新左衞門調進之間、時過一向不存知者也、

廿日、辛巳、天晴雨、

一御所樣此御所より還御、入夜則上樣還御、

二十日、辛巳、第二皇子尊敦親王御不例、

〔京都御所東山御文庫記錄〕甲二十〇山城　御湯殿上日記　五月廿日、〇中略　夕〻

さゝとより、二の宮は御方、御ぬるゝにて、御きもつふし、申つくしらさゝは御ことゝをにて、（竹山昭慶）やういんめす、およひはゝこうをすゝけさとくゝやういん方いうらゝゝとされゝく、御なて物いさゝさるゝ、御をゝつゝなとゝも申さるゝ、

りて申やう、御むしゝのよし申て、御くすりとも方いらする、御やうしにもさゝさるゝ、をやくさゝ寺さんゝくの事にゝをい

廿一日、〻ふもおゝし御とをり、御くすし方いる、ゝやうをん院へ申さるゝ、御〻ちの人まつおよひ一人ゝこう、

廿二日、ゝゝもを形し御とをり、御くすし方いる、もんをゝよりおとろ爰申

青蓮院尊應参内御加持

義尚廣橋兼顯ナシテ御見舞ニ参内セシム

御輕快ニテ御安堵

泰山府君ノ御撫物返上

竹田昭慶ニ千代薬ヲ賜フ

されく、御りちの人りひく云こう、あしさ夕りさ万いりて申さるゝ、

廿三日、御みやくちとよゐよし申、りつ〳〵めてさし、もんを（青蓮院尊應）奏さりもとよりいりゐ御万いりにて、御りち御申あり、御さり月りと万いらをらるゝ、

宰相中將殿（頭書）より右大辨（廣橋光聰）御つりひにて、二宮の御もうゐと并万いらをらるゝ、

廿四日、けさは御ミやく猶よゐ申（よし脫カ）い万そい万そ御あむとまて、めく竜し、御りちまゑこう、夕かさ程ゐはしめて御ヱ□□□してめてさし、

廿五日、○中略二宮の御方れ御みやくまゑ、りふも万いる、りぬはしめて御□汰万いる、

廿七日、○中略二の宮の御方のヱやくさいさんやくの御みてもの返万いる

廿九日、○中略二宮の御方御きんの御分まて、めくささまゑ、やういんまゑ御やくさ并りつ〳〵とて千疋さふ、

六月一日、○中略さけさやういん、二宮の御ミやくにりふも万いる、くこんのませられさ、うさもをらるゝ、きゝことあり、

〔兼顯卿記〕○岩崎文庫所藏　五月廿二日、癸未、雨降、二宮御不例以外之間、急参内、

終日祇候、及晩参宰相中將殿、爲御使又参内、二宮御不例無御心元存由、得其意可申入由、奉仰参禁省、以民部卿申入處、御懇御申、被悅思召旨勅答、則又参相公羽林御亭、申入勅答之旨歸宅、

廿三日、甲申、□夜夕立雷鳴、○中略二宮聊御減氣云々、珍重々々、座主准后参内、爲御加持也、

二十六日、丁亥、晴、○中略宰相中將殿渡御小河殿、今夜御逗留云々、

〔兼顯卿記〕○岩崎文庫所藏　五月廿六日、丁亥、晴、○中略宰相中將殿渡御小河殿、今夜御逗留云々、

幕府、武田國信ノ、青蓮院門跡領山城粟田莊竝ニ花園田等ヲ押妨スルヲ停ム、

〔華頂要略〕十一門主傳二十二　後十樂院准三后前大僧正法印大和尚位諱尊應

青蓮院門跡領山城國粟田庄并花園田等事、去年御成敗之處、押領未休云云、既在陣之刻、於彼門跡領者、被除之旨、被成奉書訖、何可及違亂哉、所詮不日可被去渡彼雜掌之由、被仰出候也、仍執達如件、

文明十年五月二十六日

文明十年五月二十六日

文明十
五月廿六日　　武田大膳大夫入道殿（信賢）　元連（飯尾）判　清房（飯尾）判

幕府、室町第修造段錢ヲ安藝ニ課ス、

〔毛利家文書〕一　毛利弘元ノ所領ニ課ス

御所御修理料安藝國段錢事

合百貳拾文宛者（但加賃縁分定、）

右來八日以前可被究濟之、若有難澀之儀者、堅可有譴責者也、

文明十年五月廿六日

毛利殿知行分所々

〔吉川文書（原題吉川家什書）〕二　吉川經基所領ニ課ス

納御所御修理料段錢事

合參貫文者（但加賃縁分定、）

右爲安藝國寺原郷南南北、三方公田三町沙汰所納之狀如件、

文明十年六月十日　　左衞門少尉判

吉川駿河守（經基）殿

○室町第修理段錢ヲ石見ニ課スルコト、九年閏正月二十二日ノ條ニ見ユ、

二十七日、戊子、義政、腫物ヲ疾ム、是日、義尚、伊勢大神宮、石清水八幡宮及ビ御靈社ニ神馬ヲ寄セ、平癒ヲ祈ル、

〔神馬引付〕

一太神宮神馬一疋、（河原毛、印日結雀、）自御方御所樣可牽進之由、所被仰下也、仍執達如件、

文明十五廿七、（大御所樣御ふまこつきて御祈禱也、）

御師

一石清水八幡宮一疋、（月毛、印同前、）同前、

同日

御師

文明十年五月二十七日

蚊觸

一御霊社〜一疋、栗毛、印同前、同前、

同日〜御師、以上三通、貴殿御前ヨリ調之、

〔兼顯卿記〕〇岩崎文庫所藏　四月一日、癸巳、天晴、首夏告朔、毎事中心多樂也、珍重々々、幸甚々々、早旦參賀小河殿、依御蚊觸無御出座、〇下略

五月廿四日、乙酉、晴、地藏菩薩縁日也、午天參小河殿、准后此間有御蚊觸子細、指而雖不苦御座、御醫師御六借敷樣申由被聞食間、自禁裏爲御使、無御心元由被申故也、御臺御方江同被申之、奉御返事參内、以民部卿奏聞、〇下略

義政ノ症狀ヲ問ハセ給フ

六月十二日、壬寅、晴、早旦自室町殿有召參小河殿、〇中略就御蚊觸、諸大名申沙汰御祈事伺申處、可申沙汰由仰也、

諸大名義政ノ疾ヲ祈禱ス

〔蜷川親元日記〕六　四月朔日、癸巳、天晴、

一御所樣御小瘡ヨリ無御出、貴殿無御出仕、

五月廿七日、戊子、天晴、

一御神馬、太神宮、河原毛、印日結雀、八幡、月毛、印同上、御霊、栗毛、印同、御方御所樣より被引進之、

大御所さゝ御ゝふゝの御祈禱也、

六月五日、乙未、天晴、

一爲公方御ゝふゝ御祈、貴殿より八幡へ御神馬被遣、御狀〜調之、

爲公方樣御祈禱、當宮御神馬一疋、鹿毛、奉寄謝候訖、御隨白候者所仰候由、可得御意候、恐惶敬白、

伊勢貞宗ヲ石清水八幡ニ寄セ義政ノ疾ヲ祈ル

六月五日　善法寺殿、人々御中

〔大乘院寺社雜事記〕六十五　六月七日、

一室町殿准后御蚊觸出來及數日之處、近日及御沙汰、無御心元事也、云御酒損、云東北院寺務、旁以其例無心元、可奉祈念者也、准后自然御儀有之者、尙々天下事不可有正躰事也、珍事々々、御大事云々、

酒損ト云フ

八日、

一浮説、竹田法印之息、依御藥違、失面目而此方下向云々、今度御腫物故歟如何、

東院祈禱卷數ヲ贈ル

〔東院年中行事記〕八　六月八日、晴小雨下略、〇中公方樣御蚊觸氣云々、仍御卷數進上

文明十年五月二十七日

之、

修法第一日

二十八日己丑、義尚、青蓮院尊應ヲシテ、尊法佛眼法ヲ幕府ニ修セシム、

〔兼顯卿記〕〇岩崎文庫所藏　五月廿八日、己丑、天晴、未剋許參小河殿、自今夜於宰相中將殿有御修法、仍御撫物爲申出也、相公羽林御座此御亭、仍三御所御撫物申出之、令隨身參宰相中將殿、先之參內條々奏事、自其參宰相中將殿、參御壇所、阿闍梨對面、條々閑談、開白聽聞之後歸家、尊法佛眼法也、自阿闍梨一荷一種送給之、仍參仕之次直謝申者也、

第二日

廿九日、庚寅、晴、早旦參小河殿、御修法第二日也、

修法中ノ加持

六月三日、癸巳、晴、〇中略早旦御修法修中之御加持也、

結願

五日、乙未、晴、朝程先參宰相中將殿、佛眼御修法結願故也、御撫物御卷數等執進上之、御畫以前也、仍預置女中者也、次參御壇所、頃之雜談、予依所望、御修法濫觴以下條々一卷注給之、祝著祕藏之由謝之、阿闍梨又條々有芳命、次參小河殿、進上兩所御撫物、小時歸家

修法ノ條々ヲ注ス

義政夫人ニ參賀

義尚ニ參賀

六月大辛卯盡朔

一日辛卯、御祝、廷臣諸將、義政ニ參賀ス、

〔京都御所東山御文庫記錄〕〇甲二十〇山城　御湯殿上日記　六月一日、御さゝ月いつものことし、

〔兼顯卿記〕〇岩崎文庫所藏　六月一日、辛卯、天晴、月朔殊中心多樂也、尤珍重々々、早旦先參賀小河殿、頃之御出座、公武構見參儀如每朔、勸修寺大納言、前藤宰相、予、日野侍從等參會、次各參御臺御方、於御末、公武各拜領御盃之後、直參賀宰相中將殿、則御對面、如每月、於常御所、拾遺、予兩人拜領御盃、頃之祇候之後歸家、公武面々多以賀來、以使者各謝遣之、日野、攝津修理大夫兩所ニハ罷向者也、

義尚、伊勢貞宗ノ第ニ臨ム、

〔蜷川親元日記〕六　六月朔日、辛卯、天晴、

一於御方御所御一獻あり、

一御方御所樣俄〳〵亭へ御成、爲可被御覽馬云々、御盃ゐる、初獻一物、二獻一物、三獻御くミさかな、御女房衆少々御參、御太刀持、箱堆紅、御盃桂、御進上、御母御祇候、

御劔、長光、御馬栗毛、印兩目綿、拜領、觀世太夫に亭主よ御と被了蜷川式部丞貞相、親被召出小次郎、六郎、鬼太夫、太こ、次郎祗候、御酒被下之、御酌藤宰相殿、

○コノ後、義尙、貞宗ノ第ニ臨ムコト、便宜左ニ合敍ス、

〔蜷川親元日記〕六　六月廿二日、壬子、天晴、夕立、

一御方御所樣御成、御一獻ありい、御鞍蟬文上州作、御進上、

三日、癸巳、左大臣鷹司政平ニ內覽ヲ賜フ、

〔公卿補任〕四十三　左大臣正二位藤政平（○本書、本年、政平ノ內覽ヲ賜ハリシコトヲ載セズ、）

〔公卿補任〕四十三文明十一年　左大臣正二位藤政平　內覽、

〔諸家傳〕一下鷹司　政平房平公男、文明四年五月七日正二位、廿八歲、同八年八月廿八日左大臣、廿二歲、同十年六月三日蒙內覽詔、廿四歲、關白已前內覽事、建仁已來中絕歟、

〔長興宿禰記〕上　五月□日、左大臣鷹司政平公內覽宣下、關白事內々御所望之處、近衞殿政家、雖爲位次下臈、被進申之間、任淨妙寺左府（近衞家基）御例、內覽之儀及御沙汰、被宣下了、

〔大乘院日記目錄〕三　六月三日、鷹司左大臣殿宣下內覽事云々、

〔大乘院寺社雜事記〕六十五　六月七日、夕立、

政平關白ヲ望ム近衞家基ノ例

一自禪閤御書到來、陽明前（光）途事先度勅約、此二日又早々可有御沙汰之由、武家御執奏（九條政基）、關白拜賀于今無沙汰、定可爲迷惑哉、於于今者、無拜賀共可有辭退哉、就其鷹司殿可有超越條、可爲一流斷絕之條、不便存之間、內覽事執申入、勅許無相違、則此三日被宣下內覽事候、關白同事之間、如此由御沙汰、先幸運之至候由、見御書了、

幕府、日吉社ヲシテ、馬上一騎衆ヲ再興セシム、

〔蜷川親元日記〕六　六月三日、癸巳、天晴、

一日吉馬上一衆、今度可再興之由、御下知御禮、貴殿へ五百疋折帋、

廿四日、甲寅、天晴、

一馬上衆先日御禮申、折帋五百疋、龍阿ニ渡之、〳〵

○幕府、馬上一騎衆ヲ再興セシムルコト、姑ク本書ニ據リテ揭書ス、又幕府、馬上一騎衆ヲシテ、舊ニ依リ、小五月會馬上合力神人ヲ管セシムルコト、十一月十六日ノ條ニ見ユ、

四日、甲午、延曆寺六月會、

〔京都御所東山御文庫記錄〕甲二十〇山城　御湯殿上日記　六月二日、六月ゑ四

勅使霊寶開封

日よりゝしまるとて、左少辨むらふよし、らんろし申さるゝ、山れれいゑう
ゝ、ちよくしひらくへきとて、御ふうををんらさのことく申いささるゝ、
八日、六月ゑのさんらうの辨、後そうもちてゑこう、

延引

〔親長卿記〕九　五月廿七日、晴、六月會今日延引、自來月四日可始行云々、
六月三日、晴、爲親朝臣代相轉兵部卿了、今日下坂本、自明日六月會可登山也、

甘露寺元長先奏ノ爲參内先奏次第

先之朝間元長參内、爲奏先奏也、件先奏自綱所許付官務、官務付傳奏之仁、傳奏之仁付參向之辨之由、綱所語之、先々無此儀歟、綱所付參向辨歟、予辨官之時、故慶運威儀師儀行師運威儀師父、付辨、今如此令申之申之條不審、即退出、先下坂本、先々自京都登西坂手輿、今度自京都參向、每事大儀之間、自中御門旅店出立之也、手輿借用執當、

四日、晴、午尅許力者自京都來、如先々、元長登山、小雜色四人也、例式供給六千疋、
自去年半分沙汰之三千疋、仍侍如來（木カ下同ジ）等略之、辨備小雜色許也、有例講如來、
七日、晴、六月會五卷日也、例講之後有番論議云々、予先下坂下（木）、講論之後直可
下山之由仰含了、在自然事者、可得其意之由、申置中御門中（宣胤）納言、予於坂本旅
店休息、及晚頭中御門中納言歸宅、無爲下山云々、凡今度六月會四ヶ日登山
事、去年自山上供給未到之間、以半分四ヶ日可有住山之由申送、伺叡慮無相
違、左中辨政顯參向、當年又同前也、於去年者、霜月會結願執行了、今年講師計

霜月會結願遂行セズ

會之間、霜月會結願不遂行云々、
八日、晴、自坂本歸京、

廣橋兼顯江家次第ヲ講セン事ヲ兼良ニ請フ

五日、乙未、一條兼良、江家次第ヲ講ズ、

〔兼顯卿記〕（岩崎文庫所藏）六月五日、乙未、晴、（略）中八時町黃門（廣光）相伴、參禪閣御亭、
予江家次第講尺事發氣（起）申間、今日初而被讀之故也、發題四方拜等也、事終、有
盃酌興、予折二合、柳二荷隨身之者也、冷泉大納言（爲富）、德大寺大納言（實淳）以下濟々聽
聞、

聽講衆

七日、丁酉、晴、（略）中晚頭參一條殿、江次第講尺也、町黃門以下少々參候、
八月十三日、壬寅、晴、入夜月明々、午半尅許參一條禪閣、江家次第講尺之故也、
小朝拜并元日宴半分計也、聽衆（三條公敦）内府、冷大、德大、町黃門、兵部卿（松木宗綱）、柳原（量光）、松木（宗カ）等也、
十六日、乙巳、（略）中未斜直參禪閣、江次第御講議（義下同ジ）也、
十九日、戊申、霽、未下尅先參禪閣、依江次第御談儀（義下同ジ）也、

講義後當座續歌

廿五日、甲寅、晴、（略）中其後直參禪閣、江次第講尺也、談義以後、有當座一續、題主
人、有披講、讀師冷泉大納言、講師元長、披講以後有酒宴、及深更歸家、
廿八日、丁巳、晴、自晚雨降、（略）中午初參小河殿、直參禪閣、江次第談議也、内府以

隨心院嚴寶兼顯ノ爲ニ江家次第ヲ書寫ス

下參集濟々、略○中今日講尺敍位也、

廿九日、戊午、降雨、略○中直參禪閤、江次第講尺也、敍位幷七日節會等也、第二卷終、今度可爲第三卷也、

九月五日、癸亥、晴、早旦町黃門入來、勸朝飯、心靜雜談、午半尅許相伴參禪閤、江次第御談議故也、內府參進之、相待間、頃之有雜談、隨心院嚴寶僧正御房等閑談、先之參隨心院休所、江次第書寫事誂申處、令書寫給之間爲謝申也、對面祝著被謝之、

十日、戊辰、晴、八時分參禪閤、江次第御談儀也、

十一日、己巳、晴、參江次第談儀也、內府以下參集如昨日、賭射國忌等也、種々金言頗令悅耳、諸人有感氣、

〔兼顯卿記別記〕○岩崎文庫所藏

八月十三日、壬寅晴、入夜月明々、略○中直參禪閤、江次第講尺故也、內府、冷泉大納言、德大寺大納言、兵部卿、町黃門、新黃門（柳原紀光）、冷泉三（爲益）位、大外記師富朝臣等參會者也、此講尺自去比予發起申間、被遊之者也、極暑自他難治之間、久不參、仍今日申合令參仕者也、自小朝拜至元日節會半分許也、略○中

左大臣關白タルトキ右大臣上

一上節會內辨ヲ勤ムル時ノ作法

通障子

內辨舍人ヲ召ス時少納言版ニ就クハ本儀ニアラズ

鳥曹司

加久繩

此講尺嚴命之內少々注之、

一關白爲左相府時、讓與一上於右府恒例也、如然之時、右府爲一上雖令勤行節會內辨、猶被仰內辨之事、是非公儀爲私與奪之間、不被知召由也、

一一上勤節會內辨之時者、自里亭押笏紙段勿論也、但於元日宴者、依可有小朝拜不押之、此事但有次第、非始嚴命、

一通障子之事、トヲリ障子ト讀ハ訛ナリ、ツ障子ト可讀也ト云々、ツキタチ障子ノ如クニテ、中ニ簾ヲカクルナリ、其簾ヲアケテアナタコナタエトヲル間、通障子ト云也云々、

一內辨召舍人時、近代少納言就版ハ不有本儀、先大舍人參進、而可召少納言由、請仰退下、召少納言時就版也云々、然近代舍人不參之間、以舍人被召由ニテ、則少納言就版條勿論云々、

一鳥曹司ト云ハ、鷄被飼所也云々、

一加久繩ト云ハ、古今ノ長歌ニモアリ、油物ナリ、ナハノコトクナル油物、例式イマモ有ルモノナリト云々、

十六日、乙未晴、略○中頃之直參禪閤、江次第御談議也、元日宴殘也、今日御講尺、殊

以諸人驚耳、内相府、公、公、敦德大寺大納言、實淳卿、以下聽聞輩數十人也、申斜歸家、
近日又四五日間可參候申入者也、今日講尺條々之内、少々注之、

蚫御羹

一蚫御羹（アハヒノアツモノ）此三字チ只アツモノト可讀之云々、口傳ナリ、

唱平

一唱平、此事何事トモ未被見及、若入酒於盃時、祝詞ヲ唱哉、不然ハ酒ヲシキルコトハカ、兩條ノアキタ、能各心ヲ付テ可引見由有嚴命、

忌月出御ノ儀ナシ

一御忌月並不出御儀、
晉穆帝之時、立后事忌月可憚歟之由有沙汰、雖然忌日ヲコソ可憚レ、忌月ヲ可憚ハ、忌季ヲ可憚カ、然ハ一年中可憚カトテ、此事ヤフラレテ、有立后之儀云々、
又唐則天罰新羅國師歸時歌樂事、同爲忌月、可憚歟否之由、有其沙汰、雖然如始沙汰不憚之云々、
本朝ニテハ
一鳥羽院、天永四年正月、御元服宴、雖爲御忌月、被經御沙汰有出御、
後醍醐院、元亨（弘）有出御、
永德度、北山殿行幸、此三ケ度之外無例、異朝ニハ不憚之、本朝憚之、但又此三ケ度有例間、難去時ハ可被宥用條、可有子細由有嚴命、

辨目錄ヲ奏スル事

御酒勅使

（頭書）永德度、不經御沙汰有出御ニ、頗無念之由有嚴命之時、禪閤被參間、有御尋者、以先例可被宥申之由、令存知給之處、一向不及沙汰間、未練ノ者ニ成タル條、被背本意由、令相語給者也、
一辨奏目六事、此事近代不見ト、此次第ニ注之、然ハ經房卿時分ヨリ此事不奏歟、然ニ姉小路殿（兼綱光）ニ比被奏之、尤神妙之由舊記ニアリ、當家尤シツスヘキ事也ト有嚴命、
一御酒勅使事、内辨召參議仰之、仍人皆參議勅使ト令覺語（悟）、尤非其儀、參議下東階（大内東禮）召外記、問勅使名、外記書進之、參議取副笏還昇進南簀子第二間、召畢後微音仰之、大夫達ヨ御酒給ヘトアリ、其時外記書進者勅使ナリ、五位以上諸大夫達ノ中ヨリ四人（兩方ノアクヨリ二人ツヽナリ、）可然者撰出テ、外記注進之、其四人ニ各々御酒ヲヨクノマスヘキヨシ被仰付之間、件四人ヲ勅使ト云ナリ、參議ハ雜事ヲ催スアキタ、下段シテ下知スルハカリナリ、右條々委有抄、仍略之、大意如形注之者也、
十九日、戊申、屬霽、（略）○中先參禪閤、江次第御談儀也、内辨細記幷供立春水事等也、（略）○下

廿五日、甲寅、晴、聖廟緣日也、時正第六日也、所作祈念如毎月、午初參小河殿、臨時御修法、事披露、直參禪閤、以便路先片時向德大寺亭、江次第講尺也、內相府以下參集、卯仗二宮大饗大臣大饗等也、談議以後有一續、二十首、出題主人、主人二首、右大將殿一首、隨心院一首、內府二首、冷泉大納言二首、同三位二首、園前中納言、中御門松木兵部卿、町黃門、柳原中山新黃門、頭左中將、藏人左少辨、元長、松殿少將、忠顯、治部卿長興宿禰、修理大夫俊通以下各一首、予、主人依嚴命、二首詠之、殊爲卷軸之間、再三雖令辭退、爲禪閤嚴命、間詠之、閣上首濟々詠二首、可謂當座面目、愚詠如此、船中戀

和歌

兼顯ノ詠歌

むろあしや身いう沼舟のとまをあらをまと浅ましむもふ夢のちきりを

社頭祝

ゐ久千代そ神のめくみを三うさ山うけなひく色衰松のゑう枝い

右大將殿任槐事、加祝詞者也、內相府殊勝之由被褒美、

秉燭程各取重、有披講、讀師冷泉大納言、爲富卿發聲、講師元長、主人內府等歌二反、自餘一反也、講師頗不可說也、漁村笛ト云題ヲ不得讀、頗赤面良久、カクレタル村ノ笛ト讀之、其外濟々有失、爲之如何、不便々々、文臺之硯蓋ウツフセテ面ニ置之、冷泉家說恒事也、披講以後有盃酌之興、三獻各數盃、沈醉之者也、亥刻許歸家、

大饗

大饗事

祿事、酒奉行心ナリ、能シイヨト云コトヲ付仁體也、仍堂上地下各々有之、立作所、取着ヲコシラエル所也、本ノレウリ所ニテハナシ、ニハカニトリサカナ調所ナリ、仍鷹飼雉ヲモ此所ノアクニ挑ナリ、西對東對ノ事、宸殿ノ相ノ脇ニ、又一宇ツヽ殿アリ、常ニ對屋ト云ニハアラス、本式ノ亭ニハ必殿三アルナリ、常ニ申對屋ハ、北ノ對、女房ノ候所ナリ、是レハ相對故ニ對ト云也、臺ニアラス、

廿八日、晴、自晚雨降、歡喜辨才兩天所作等如毎月、午天參小河殿、條々披露、於春日局有一盃、頃之參禪閤、江次第講尺也、內相府、德大寺以下濟々、御談義則直參宰相中將殿、頃之祗候、入夜歸家、今日講尺敍位也、

廿九日、雨降、〇中略午天參禪閤、江家次第談議也、昨日敍位之末、七日節會等也、內相府以下濟々參集、

九月五日、癸亥、晴、早旦町黃門入來、勸朝飯、心靜閑談、午半剋許相伴參禪閤、江家次第御談議故、內府以下參會、

十日、戊辰、晴、八時分參禪閤、江家次第談儀也、射禮踏歌宴等也、內府以下參集、

○兼良、源氏物語ヲ講ズルコト、四月十日ノ條ニ見ユ、又江家次第書寫及ビ江次第抄ノ校合ノコト、便宜左ニ合敍ス、

〔兼顯卿記〕（○岩崎文庫所藏）六月廿三日、癸丑、晴、（○中略）江次第抄校合依誂付、町黃門書寫者也、第二卷也、禪閤御抄也、

七月廿八日、戊子、晴、（○中略）江次第恒例之分感得之、（町蝶、中）但第二三八三帖欠、可書加者也、四條黃門隆量卿一筆也、自愛々々、代百疋、

八月十二日、辛丑、晴、入夜雨降、町黃門入來、大外記同來、江次第抄第二卷校合、入夜各歸、

〔兼顯卿記別記〕（○岩崎文庫所藏）八月十二日、辛丑、陰、入夜降雨、祖父樂音院（復論後卷）殿御月忌也、如每月、町黃門來臨、終日閑談、江次第抄爲校合、招寄大外記師富朝臣間、同入來、終日彼祕抄校合者也、

十七日、丙午、晴、入夜雨降、（○中略）江次第三之卷書寫事、誂遣新宰相中將者也、不可有子細由許諾、

古市澄胤、夫役ヲ奈良唱聞師ニ課ス、大乘院、其舊規ニ背クヲ以テ、之ヲ停ム、

唱聞師ハ大乘院ノ支配ニ屬ス

〔大乘院寺社雜事記〕（六十五）六月五日、

一自衆中奈良中唱門（聞ヲ同シ）召仕、至昨日十座物共罷出云々、古市用歟、爲石倉云々、今日自日中五个所物共可罷出旨加下知、可如何仕哉之由參申間、不可罷出、事子細猶可屆之由仰了、則成奉書之處、於沙汰衆竹坊者不存知云々、遣水坊之間、不存知仕候、但相尋、自是可申入返事云々、

五个所唱門人夫役之事、爲衆中被加下知之由、彼等注進候、先々更以無其儀事候間、如先例被閣候者可目出候、於十座唱門者、衆中役之事不能左右候、無相亂之樣、被加下知候者、可目出候由、可令披露集會給旨、被仰出所也、恐々謹言、

六月五日　宣舜

衆中沙汰御房

奈良中唱門事ハ、七郷或ハ一乘院領東大寺領以下在々所々ニ有之、北里分者號十座、南里分者號五个所、各當門跡自專之一類也、此內於十座者、衆中與門跡共以召仕之、於五个所者、唯門跡計召仕之、先年沙汰衆等不取入、可五个所猶召仕之由、加下知之間、事子細念比ニ仰（問カ）開之間、さてゝ以外事

十座ハ唱聞ノ座頭

候、不可致新儀之沙汰之由、三沙汰衆ニ自筒井律師方仰付之、于今無違亂事也、何方より雖申付、不可評定事也、是ハ朝夕京田舍以下召仕用ニ、別而南里之唱門之座ヲ立故也、唯門跡奉公用計也、於十座者、當國中數十个所之唱門之座頭也、國中下知悉以自十座相觸之、寺門四面之大拂治（掃カ）等也、

六日、丙申、夕立、

一五个所人夫役事、如先規無相違歟、不及催促者也、珍重、然而自古市方以使者譴責云々、以外次第也、巨細仰遣間、則使者召立之、

八日、

一古市代官（長田家明）筑前守（經憲）參申間、五个所事巨細仰付之、五个所唱門事ハ、唯門跡奉公計也、然而安位寺殿（經憲）御院務之時節、慈明寺筒井與御不和之時、押而爲衆中召仕事在之、當座之儀一旦之事也、則於慈明寺有事、嘉吉之時分、以此跡水坊大輔公召仕之間、則大輔公住坊被進發了、其以後無違亂、其後筒井法師代、沙汰衆等可召仕之由、加下知之間、於彼兩度例者、門跡與筒井御不和時節事也、只今儀又如理可有成敗上者、不背先例可沙汰旨、念比ニ筒井律師ニ令入魂之間、得其意、三沙汰衆方ニ不可召仕之由申付之了、仍此

舊規ニ依リ使役スベカラズ

二十餘年無違亂者也、只今爲古市沙汰可召仕事、不叶道理之由仰了、先日譴責事不可然之由、仰聞之、畏入云々、

次高御門止住唱聞公事、無沙汰事、自先日仰付事也、早々可加下知旨仰之了、北山申子細在之、堅可申付也云々、

六日、丙申、多賀高忠、其所領四條高倉及ビ綾小路間ノ地ヲ、鈴木忠親ノ違亂スルヲ、幕府ニ訴ヘ、又一色千壽丸、質地近江新莊ヲ、德田庵主某ノ還付セズ、且丹後采邑ノ貢租ヲ横奪セントスルヲ訴フ、

〔親元日記別錄〕中

同前（清泉州）一多賀豐後守高忠（文明十年）一六六、

四條高倉與綾少（小）路之間東頰屋地事、松梅院禪親沽却之間、寛正六年、令買得知行之處、鈴木小次郎忠親、號有長祿元年借書違亂云々、

合　松樹（對）七廿

飯加州一一色千壽丸代一六六、

知行江州高嶋郡新庄ヲ爲質券、文正元年德田庵（仁）借物五十貫文事、自百姓等前直可返辨之由、申定引付之處、不能算用、猶號有舊借、自丹後國

運上物可押取之由有造意云々、

七日、丁酉、僧眞洋、其所領尾張柏森郷大壽寺竝ニ同寺領ヲ安堵センコトヲ幕府ニ請フ、尋デ、幕府、之ヲ許ス、

〔親元日記別錄〕中　清泉州一眞洋藏主ー六七、

尾州丹羽郡柏森郷内大壽寺、同寺領田畠六町半目錄在別紙、等事、買得相傳當知行無相違之上者、任禪周僧賣券之旨、可被成下御下知云々、

〔蜷川親元日記〕六　六月廿五日、乙卯、天晴、

一眞洋藏主被申、尾州大壽寺、同寺領等事、任買得相傳當知行之旨、被成政所奉書了、任此旨、御判事可有申御沙汰之由、蔭涼軒へ爲□□□□□入之了、

八日、戊戌、千家高頼、同國泰、出雲富郷ノ地ヲ杵築大社聖御前ニ寄進ス、

〔千家文書〕○七出雲

奉寄進大社領十二郷内富郷聖田之事

合參斗蒔半分者

右在所者、聖御前依有志奉寄進者也、及大破間、早速遂御造營、可企御祭禮、仍爲後證寄進狀如件、

造營及ビ祭禮ノ資

文明十年六月八日　千家東高頼（花押）　千家屋野國泰（花押）

〔北島文書〕○二出雲

ゆつりあさふ大社御領十二郷之内富之郷事、惟孝ニ五代讓といへ共、清信奉公の忠をいさす間、別儀をもつて永代ゆつりあさふるところなり、但或ハ千家かさへ可令吉屬、或武家仁ニ永賣渡事候ハヽ、此狀立へからを候、自然社家ゑ大儀の公事出來候者、分限ニ応さゝい、惣領を合力あるへく候、大明神ニ抽奉公精誠、可全知行者也、仍爲後證狀如件、

北島高孝讓狀

社家ノ大儀ニハ合力セシム

文明十年六月八日　又四郎（安通）所　高孝（北島）（花押）

北島安通

畠山義就、河内ヨリ大和越智家榮ノ第ニ至リ、翌日歸ル、

〔大乘院日記目錄〕三　六月八日、畠山右衞門佐（義就）當國越智館出云々、

〔大乘院寺社雜事記〕六十五　四月五日、

一古市澄胤一昨日越河内國、今申禮畠山云々、今日歸宅、所々引物樻等大儀

古市澄胤義就ヲ訪フ

澄胤諸道具ヲ松林院ニ借ル

尋尊折櫨ヲ家榮ニ贈ル

座敷衆

云々、

六月六日、丙申、夕立、

一自古市澄胤方、屏風一雙、簾五間、盆一枚、棚一却（脚）松林院借用則遣之、成實申次之、來八日、畠山右衞門佐行向越智之館用歟、

八日、

一折二合、櫨三荷、越智殖（尋）正方ニ遣之、當年音信初也、今日畠山右衞門佐、自河內行向越智之館、自他大儀云々、二三日可有云々、一國中奔走仰天也、抑自六方折紙櫨等畠山ニ遣之、六方使節共絹付衣、綾ケサ可著之云々、國中御出珍重、此次南都御巡禮可畏入由令申云々、希有希代事、末代至共也、又自一乘院同屋形ニ御櫨以下盃臺等御用意云々、不得其意事也、使節ハ舜善房、行善房云々、

九日、

一畠山歸國云々、座敷衆、屋形、越智、高山父子、古市、初獻盃屋形初之、第二越智、第三古市云々、

十日、

東寺領若狹太良莊

丹波大山莊

大和平野莊

三寶院預リ地ヲ東寺ニ返還ス

一越智返事到來、畏入候、於兩門櫨等者、越智之在所ニ納之、自餘ハ岸田屋ニ納之、自六方屋形ニ五十荷、越智ニ二十荷遣之云々、

十八日、

一西殿光臨、（略）中今度越智方ニ櫨三荷、折二合、盃臺一、自一乘院殿被遣之云々、屋形へハ不及御音信云々、

九日、己亥、義政、東寺ニ山城久世莊等諸國散在ノ寺領ヲ安堵セシム、

〔東寺百合文書〕（に四十九之五十上）○山城

（端裏書）〔□被申時申次へ注進之案文也　文明十年三月五日　東寺領諸國在所事〕

とうしをやうの事

をゝさの國たらのゑやう

たんをの國ほやはのゑやう

やまとの國ひらのゝゑやう

右三ゝ所は、こんと一らんの間三寶院殿さは御あつかりなり、ゑゝるをてんゝせいひつによて、もとのことく返くたされ候、かさしをなくかしこは

り入存候、

文明十年六月九日

播磨矢野莊例名
備中新見莊
攝津垂水莊
近江三村莊
大和河原莊

寺領安堵狀

文明十年六月九日

むりはの國やのゝ玄やう　ぢいこやう
ひつちうの國まいこれ玄やう
ぢの國たるみの玄やう
あふみの國こむらの玄やう
やまとの國かゐら玄やう
右の寺ゐやう、てんゝせいひつの間、もとのことく、寺ゐちきやうをまつたうすへきよし、御ゐちをなしくたされは、いよ〳〵てんかたいへいの御きさうのせい〳〵をいゝすへく候、

文明十年三月日

申次の方へ被遣案文也、此時折二合、九寸各也、一ハフ、一ハノリ也、柳二荷、一貫百也、二以上二貫ことミアハスル也、

〔東寺百合文書〕〇二山城百六十四之百八十七
（別筆）〔慈照院殿〕

東寺領山城國久世上下庄、上野、拜師、植松、院町拾參ヶ所、柳原寶莊嚴院敷地、當寺境内幷巷所、八條以南九條以北、堀川以西朱雀以東、東西九條、號女御田、八條以北大宮半所所屋

四八八

臨時課役免除
守護使不入地

幕府執達狀

京極政高

地、散在名田畠、目錄在別紙、丹波國大山庄、播磨國矢野庄内例名方、若狹國太良庄、大和國平野殿庄、同國河原庄、江州三村庄、攝津國垂水庄、備中國新見庄等事、如元所返付也、臨時課役段錢已下令免除之訖、早爲守護使不入之地、檢斷等致其汰沙、可全領知之狀如件、

文明十年六月九日

准三宮御判

〔東寺百合文書〕〇二山城一之二十五

東寺領江州三村庄、任還補御判之旨、可被沙汰付下地於寺家雜掌由、被仰出候也、仍執達如件、

文明十六月九日　　貞秀（清）判
守護（京極政高）　　數秀（松田）判

〔東寺百合文書〕〇い八十一山城一之百二十八
（包紙）〔文明十太良庄事〕

武田大膳大夫（國信）入道殿　和泉前司貞秀

文明十年六月九日

四八九

文明十年六月九日

東寺領若狹國太良庄事、任還補御判之旨、可被沙汰付下地於寺家雜掌之由、所被仰下也、仍執達如件、

文明十年六月九日　　和泉前司判
　　對馬守判

武田大膳大夫入道殿

〔東寺百合文書〕ツ一之十　○山城

（端裏書）「就新見庄還補被成下方々奉書案　文明十十一兩年分」

東寺領備中國新見庄事、任還補御判之旨、年貢諸公事已下、如先々嚴密寺家代官可致其沙汰、若寄事於左右、有難澁之族者、爲被處罪科、可注申交名之由、被仰出候也、仍執達如件、

文明十六月九日　　貞秀判
　　數秀判

名主百姓中

東寺領備中國新見庄領家方事、爲御料所、雖被預置伊勢彈正忠、被成還補御

多治部藏人伊勢貞國ノ去狀ナクバ渡サズ

判訖、早任彈正忠渡狀、合力寺家代官沙汰居之、可被全所務之由、被仰出候也、仍執達如件、

文明十一七月廿四日　　貞秀
　　數秀

安本殿（奈良崎備中守、新見三郎左衛門尉宛二通、同文ニ依リ略ス、）

備中國新見庄領家職東寺領事、可被渡付寺家代官候也、恐々謹言、

文明十一七月廿四日　　伊勢彈正忠貞國判

多治部藏人殿

東寺領備中國新見庄事、被成還補御判之處、代官伊勢彈正忠無去狀者、不可渡之旨、先度申之間、下遣彼一行之處、今又三上大藏丞相支之由就注進、被尋仰之處、寂初雖執次之、至于今一向不存知之旨申之上者、速可被返付寺家代官、若尙寄事於左右、令難澁者、於知行分者、一段可有御成敗之由、被仰出候也、仍執達如件、

文明十年六月九日

文明十一
八月廿八日　　貞秀判
數秀判

多治部藏人殿

東寺領備中國新見庄事、被成還補御判處、多治部寄事於左右不去渡之間、尙以爲同篇者、可被押置知行分旨、被成奉書了、然早年貢諸公事等、如先々寺家代官嚴密可致其沙汰、若號先納令難澁者、可爲二重成之由、被仰出候也、仍執達如件、

文明十一
八月廿八日　　貞秀判
數秀判

當所名主沙汰人中

〔東寺百合文書〕（さ三十六之三十九）○山城

東寺領備中國新見庄事、任還補御判之旨、代官入部云々、早被合力沙汰居之、可被全所務之由、被仰出候也、仍執達如件、

文明十一
十二月三日　　貞秀

幕府天竺上野介等ニ命ジ多治部備中守ノ違亂チ退ケシム

多治部藏人助殿　　數秀

東寺領備中國新見庄事、被成還補御判之處、于今押妨云々、言語道斷次第也、當代官入部之上者、不日去渡之、可被全所務若尙及異儀者、可有殊沙汰之由、被重仰出候也、仍執達如件、

文明十一
十二月三日　　貞秀
數秀

多知（治）部備中守殿

東寺領備中國新見庄事、任還補御判之旨、退多治部備中守違亂、合力當代官沙汰居之、可被全所務之由、被仰出候也、仍執達如件、

文明十一
十二月三日　　貞秀
數秀

天竺上野介殿（上野參河守、伊達藏人助、伊達常陸介、石川源三、庄又六、檜崎備中守、安本次郎左衛門尉、新見三郎）

左衛門尉宛八通、同文ニ依リ略ス、

〔十八口供僧評定引付〕○山城　二月一日、

三寶院ヨリ東寺領返付

一寺領之事太良庄、大山庄、平野庄、亂中三寶院殿樣御預之分、天下靜謐之上者、如元可被返付之趣、內々自清和泉方依告示、舊冬度々雖被伺申、無餘日之間、不可事行、仍明春必可申合由、民部卿法橋返答申了、仍可被催促申歟之由、致披露之、處々急々可有催促之通、衆儀治定了、（嘉下同ジ）

返付ノ禮

廿三日、

一寺領之事、自三寶院殿樣可被返付分御治定之由、自民部卿法橋方、清和泉方江以書狀申、仍彼狀寺家江進之間、披露之處、明日廿四日、民部卿法橋在所へ貳百疋、以折紙禮ニ可罷出之由治定了、

三月一日、

一自三寶院殿樣寺領被返付條、大慶此事也、仍御禮之樣、折三合、（サウメン、マンチウ、ノリ、）柳三荷可然由、清和泉守意見在之、此由致披露、和泉守意見之上者、早々申付納所被致用意、御禮ニ可參由治定了、於用脚者、執行方百疋、太良庄代官三百疋、大山庄代官五百疋、可致引違由、可申付旨衆儀了、同清和泉守方江

寺領還付ノ沙汰披露

折一合（マンチウ）柳一桶隨身之、

廿五日、

一就惣寺領一具ニ被申御奉書間、申次右京大夫局江小折二合、柳一荷、五百疋之析帋可被進之由、清和泉守意見申間、如意見有用意、可致持參通衆儀了、同寺領之注文進之、

六月十三日、

一十八口方寺領御奉書事申入之處、昨日十二日到來、仍今日致披露處、明日早々以御奉書武田方へ可被付之由衆儀了、於餘庄之奉書者、自廿一口方披露也、

廿一日、

一惣寺領還補御判、昨日廿日、被成下、爲廿一口方今日披露滿寺、珍重々々、

〔廿一口方評定引付〕○山城　同（六月）廿一日、

一今度一亂之後、惣寺領還補御判、清和泉守申沙汰、仍明日先遣雜掌、御禮之趣、可被尋旨治定、

〔東寺百合文書〕ゑ　○山城　十三之十四

文明十年六月九日

寺領注進案

山城ノ地久世上下莊

植松庄

上野庄

拜師莊

女御田

寺邊水田

文明十年六月九日

（端裏書）
〔此裏ニ殘破聚文寫之、〕
寺領山城國土貢公方樣江注進案〕

注進

東寺領山城國所々寺納分事

一久世上下庄　鎮守八幡宮御供以下神用

合貳百六十餘石

一植松庄　長日尊勝陀羅尼料所

合百拾七石

一上野庄　安居幷諸堂掃除料所

合五十餘石

一拜師庄　二季談義、每月八幡宮論義料所

合九十貳石

一女御田　伽藍造營料所

合百貳拾四石

一寺邊水田　諸堂佛餉料所

柳原地子

院町地子

所々巷所

左京散在屋地田畠

合四拾四石

一柳原地子　講堂護摩幷仁王經料所

合貳拾貫文　兩季分

一院町地子　二季談義幷論義料所

合貳拾貫文　兩季分

一所々巷所　伽藍修理料所

合參拾貫文餘

都合陸佰捌拾沐石

都合沐拾貫文

右注進如件、

文明十年八月日　雜掌增祐　雜掌聡快

如此守護畠山殿ヱ注進之、雖爾當國五分一寺社本所雖及其沙汰被閣畢、

〔東寺百合文書〕ま二之六　〇山城

注進　東寺領左京散在屋地幷田畠等事

文明十年六月九日

合

壹所　四條猪熊與大宮之間南頰口東西伍丈捌尺、奥南北貳拾丈、
壹所　五條室町與烏丸之間南頰口東西貳丈伍尺、奥南北拾丈、
壹所　七條坊門町與西洞院之間南頰口東西漆丈伍尺、奥南北拾漆丈伍尺、
壹所　七條坊門與佐女牛之間町面東頰口南北陸丈壹尺、奥東西拾肆丈肆尺、
壹所　七條坊門町與室町之間北頰口東西肆丈壹尺、奥南北漆丈六尺、
壹所　七條坊門櫛笥以東北頰西角口伍丈伍尺、奥玖丈參尺、
壹所　七條櫛笥以東南頰西角口貳丈漆尺、奥拾丈、
壹所
壹所　七條町與鹽小路之間東頰口南北壹丈漆尺、奥東西拾丈伍尺、
壹所　鹽小路櫛笥東頰南角口貳丈六尺、奥拾貳丈貳尺、
壹所　鹽小路櫛笥與大宮之間北頰口拾貳丈捌尺、奥貳拾丈、
壹所　鹽小路町與室町之間北頰口東西伍丈捌尺、奥南北拾陸丈、
壹所　同西乾角口東西貳丈貳尺、奥南北肆丈貳尺、

壹所　梅小路烏丸與東洞院之間北頰口東西拾伍丈、奥南北貳拾丈四尺、
壹所　八條大宮以東北頰乾角半、本所淳和院、
壹所　八條大宮東頰南寄巷所壹段、本所名主一圓知行、
壹所　八條猪熊大宮之間北頰口東西伍丈參尺、奥南北拾貳丈、
壹所　八條猪熊與針小路之間西頰口南北參丈玖尺、奥
壹所　八條町與鹽小路之間東頰五段、號澳殿、
壹所　針小路猪熊與大宮之間艮角口陸丈捌尺、奥
壹所　針小路猪熊與大宮之間北頰口東西肆丈五尺、奥南北拾丈、
壹所　八條大宮與猪熊之間南頰口東西肆丈陸尺、奥南北拾陸丈五尺、
壹所　針小路猪熊與唐橋之間西頰口拾漆丈、奥貳拾丈、漆尺、
壹所　唐橋猪熊西北頰口東西捌丈捌尺、奥南北貳丈貳尺五寸、
壹所　唐橋大宮與猪熊之間北頰辻子東頰東西伍丈、南北伍丈、
壹所　八條池小路與堀河之間北頰壹段字井家內、
壹所　針小路烏丸與東洞院之間北頰角口東西漆丈、奥南北拾丈、
壹所　唐橋室町與信濃小路之間東頰壹段、本所藥醫田、

壹所　信濃小路

壹所　信濃小路堀河東西角壹段、本所春日田（號金頂寺田、）

壹所　敎令院敷地西寄陸段

在所（鹽小路以南、朱雀以東、）八條坊門以北、坊城以西、付巷所

同院領畠

壹所　大悲心院

壹所　妙見寺

壹所　弘誓院壹町（八條以南、東洞院以東、）針小路以北、高倉以西、

同院領

右當知行分目錄大概如件、

文明十年（戊戌）六月　日

〔東寺百合文書〕（な二十七之二十八）○山城

注進　東寺領山城國乙訓郡散在田畠里坪等事

合

上久世庄行吉名內　貳段（字神田、號溝添、）

乙訓郡田畠里坪

平實名內　壹段（字駒白、）

貳段（字綾織、）

參段（字薦淵、）

友吉名內　壹段（字南桓（田）內、）

壹段（字東出口、）

壹段（字三角田、）

半（字宮前、）

越後名內　貳段（字駒代、）

參段（字御所之西、）

壹段（字吉田、）

參百伍拾步（字高田、）

助友名內　壹段參拾步（字恭苑本、）

宗像名內　壹段（字八段田、）

河依里伍坪　壹段（字十樂寺、垣內在下久世庄內、）本所按察位田、

久世里拾柒坪　壹段（在下久世庄、）

同里貳拾肆坪　壹段在下久世庄、本寺雙林寺
同里貳拾陸坪　參段字西三昧、在下久世庄、
牛甘里拾捌坪　壹段在下久世庄、
同里貳拾壹坪　貳段字ヤハキ、在下久世庄、本所八名
同里同坪　參段在下久世庄、
同里貳拾貳坪　參段在下久世庄、本所院田八名
壹段字福金、在下久世庄、本所按察位田
貳段在下久世庄、本所修理職
壹段在下久世庄、
小在上久世庄、
壹段字太輔垣内、在下久世庄、

右當知行分目錄大概如件、

文明十年戊戌六月　日

○幕府、西軍退散ニ由リ、東寺等ニ所領ヲ還付スルコト、九年九月二十六日ノ條ニ見ユ、

定金定忍ノ不義
別當目代分諸堂下行物等ヲ抑留ス
伽藍掃除料ノ下地ヲ違亂ス
定金大内氏ノ被官トナリ號ス足利義視ノ奉書ヲ所持ス畠山義就ノ宰齋藤彦次郎ヲ語フ

幕府、東寺ノ訴ニ依リテ、同寺大炊職竝ニ不動堂預職定忍及ビ同寺ノ中間ヲ罰ス、

〔東寺百合文書〕○ツ三十五　山城十五之三十八

定金幷定忍兄弟惣寺よたいし不儀（無下同ジ）の條々

一彼定金、去文明三年ニ、水田の年貢收納をいたしあゝら、別當目代分幷ニ諸堂下行物、人給いけ、こと〳〵くよくゞうせしめ、かつて寺用ニそなへさるてう、まうあく云こく也、

一伽藍さうち料のためニ、ぞいとくの下地を、永地けとくせいとかうし、年貢のいらんをいゝす事、これ又言語たうゝんのくゞんたい也、此外不儀ゞふさにのするニあゝもす、これニよて、諸職をもつたうし、境内をゞ幷もうせられ了、

一定金大内ひくゞんとかうし、くゞんたいをけんする間、寺家として、彼方へ申披ニよて、ふちをもおされ了、其後今出河殿（足利義視）御奉書をかすめ給といへとも、寺家せういん申さす、かさ紛て追出了、又右衞門佐殿（畠山義就）の内齋藤彦次郎を相かゝらい、寺家をおしけんちうせしむる間、力おき次第也、云ゝ

りといへとも、大師のゝやうかんこそむき、去年十二月に死去仕了、

一定金さいくゐのきさゝ、かの大炊職の事、定忍法師ニ申付候時、兄の定金に密通すへゝらさるよし、請文をさゝけおゝら、ひつとうせしむる事、

一かの定忍ゝ事、當寺不動堂預ゝよく理運ゐまゝせ、別人に申付、補任をゐす處ニ、事とゝす、彼給田ニてん札をくゐへ、作毛をきうそんせしむる事、くせ事也、

一同堂下行物をおさへをき、當知行の物に渡さす、これ又寺命をそむく隨一也、

一寺内の屋敷、他人知行ゝ在所を、譽田方下知とかうし、いまに押領仕之間、寺家として成敗をいさす處ニ、更以せういん仕さる事、

一諸下行物無沙汰をいさしゐさす、言語道斷の次第也、

一嚴重の請文を沙汰しゐゝら、けん家の口入をゝけ、寺命に ゝさゝとさる事、

一諸堂のあつゝり以下ゝ諸ゝよく、寺家のゝんたいとして申付候事、往古よりのきゝき也、とに去年九月廿六日、かさしゐゐく御奉書を成され、檢

不動堂下行物ヲ押ヘ渡サズ

寺内屋敷他人ノ在所ヲ押領ス

權家ノ口入ニ依リ寺命ニ從ハズ

斷以下毎事先例ニまゐせ、其沙汰をいさすへき由、御せいゝいの處ニ、彼定忍寺命をそむき、くゐんたいをいさゝ條、言語道斷のくせ者也、〇九年九月二十六日ノ條參看、

右如此の儀によて、今度定金ゝきよのきさゝ、諸職をもて、別人に申付候處に、所司代の儀をかゝめ、寺家へ口入を付候條、一寺のさくらんこれにすくへゝらす、所せんかのいろいを停止せられ候樣ニ、御口入ニ預候者、公私の御祈禱をるへき由、衆儀(議)の所ニ候也、仍而如件、

文明十年二月　日

〔廿一口方評定引付〕

〇四山城　六月八日、

一大炊職幷不動堂預職沙汰中半之處、定忍等、去五日ニ彼給田之作毛ヲ苅取田植事、言語道斷曲事也、仍次日宮内卿僧都、增長院覺永、清和泉守(貞秀)罷出申處、中間狼籍(籍下同ジ)以外之事也、早々伺申候、可成御下知云々、此旨只今披露、

定忍等給田ノ作毛ヲ刈取ル

中間ノ狼藉

同十三日、

一昨日十二日、就大炊職幷不動堂預職事、被成御教書、其趣云、被致定忍法橋定觀無理訴訟、致中間狼籍條、以外緩怠也、任法可被處其咎云々、此趣披露之

幕府奉書チ出シ定処ニ等チ忍罰セシム

定忍赤松政則ノ部下浦上房ノ被官ト稱ス講堂預職等ヲ罷メ重科ニ処スベシ

文明十年六月九日

處、衆儀云、被成御奉書上者、只今可被給田耕サセ旨治定、仍衆座江公人召申付事、

御奉書云

大炊職幷不動堂預職事、承仕定忍法師背請文、不應寺命之間、改替之處、剩致中間狼籍條、言語道斷次第也、早爲寺家、任法可被處其咎由、被仰出候也、仍執達如件、

文明十年六月九日　　貞秀（浦）判　　數秀（松田）判

當寺雜掌

同十六日、（七月）

一就定忍之事、清和泉守申云、去九日ニ殿上ヱ赤松（政則）ノ雜掌被召テ、以伊勢左（貞誠）京亮、松田對馬（數秀）、貞秀（浦）、此三人被仰付云、東寺承仕定忍父子、爲寺家被官身、不應寺命間、被成御奉書、堅御下知之處、浦上掃部（房行）（助脫下ハシ）號被官、致緩怠事、言語道斷狼籍也、任法可致沙汰旨、堅被仰付候、早爲寺家可有罪科旨申間、披露之處、衆議云、先講堂ノ預職父子分幷塔ノ預職被召放、重而可被處重科旨治定

定忍房行ノ命ト稱シテ應セズ

政則ニ命ジ房行ヲ

了、

同廿三日、

一就定忍之事、去十六日ニ任上意申付處、定忍返答申云、浦上掃部ニ申處、縱上意ニ候共、不可承引申由、堅被申付候間、不可承引申旨申間、此旨清方申遣候處、重而御奉書申成了、

御奉書

東寺大炊職事、承仕定忍法師背請文、不應寺命之間、改替之處、就彼給田中（致脫カ）間狼籍之間、去月九日被成奉書、不能承引、號浦上掃部助被官、耕作田地之條、其咎重疊者歟、堅可加下知之旨、赤松（政則）兵部（脫アラン）少輔殿、早於定忍父子者、可被追放寺内、若於及異儀者、可被處重科之由、被仰出候也、仍執達如件、

七月六日　　貞秀判　　數秀判

當寺雜掌

赤松殿被成御奉書云

東寺大炊職事、承仕定忍法師背請文、不應寺命之間、改替之處、就彼給田致

文明十年六月九日

シテ定忍等ヲ庇護セザラシム

房行東寺ヲ襲ハントス

幕府政則ニ命ジテ之ヲ停止セシム

文明十年六月九日

中間狼籍之間、去月九日雖被成奉書、不能承引、號浦上掃部助被官、耕作田地條、其咎重疊者歟、於定忍父子者、可追出寺内之旨被仰訖、向後不可許容彼輩之由、可被申付掃部助由、被仰出候也、仍執達如件、

文明十七月六日　　貞秀 判　　數秀 判

赤松兵部少輔殿

八月一日、

一定忍定觀幷職掌右衞門二郎、去月廿四日任(被カ)致罪科處、及異儀間、於當座令放火、父子幷右衞門二郎、以上三人致沙汰訖、依之掃部當寺 江 可爲勢遣旨治定候間、公方樣幷三寶院殿 江 被申候間、爲上意赤松方堅被御使立間、屬無爲畢、仍清和泉方 江 明後日三日、寶輪院僧正幷覺永爲御禮可罷出旨治定了、御梶代三百疋、奏者梅村、奥田、各貳拾疋宛也、

同二日、

一就今度定忍之事、於三ヶ所 西院、鎭守、不動堂、立願有之、何頃可被果歟由披露之處、於來六日ハ西院不動堂之御祈可有之、七日者於鎭守可有之云々、

但馬起請文ヲ出シテ定忍ニ與セザルヲ誓フ

執行奉行定忍屋敷竹木ヲ收ム

〔東寺百合文書〕 ○ケ八之二十 山城

謹請申　但馬侘事間事

右今度定忍父子對申寺家、依致不忠不儀緩怠、被處重科候、於私者、更以不同心仕候之間、堅侘事申入候處、預御免候、於向後者、對申寺家、惣別不可致不忠不義候、或以權家權門口入、每事不可申入候、此等之趣令違越者、奉始伊勢天照太神、六十餘州大小神祇、別者鎭守八幡宮、大師、稻荷御罰可蒙者也、仍請文之狀如件、

文明十年八月　　澄秀(花押)

〔廿一口方評定引付〕 ○四 山城

一但馬侘事申云、今度定忍父子對申寺家、依致不忠緩怠、被處重科候、更以定忍ニ同心不仕候間、預御免、還住サセラレ候者、可恐入候、同老母候者、預御免候者、添可恐入候云々、此旨披露之處、但馬事者、不可有子細、老母之事者、不可叶之治(由脫カ)定了、

一定忍之屋敷竹木等、執行奉行可取歟由披露、不可有子細云々、

同(十一月)二十日、

文明十年六月九日

同(八月)十一日、

一大炊職幷不動堂預職之公事入足貳拾九貫貳百四拾七文也、此内三分二
者、爲寺家可被出之、殘三分一内三分二者、六貫五百文、大炊職乘琳、可出之、三分
一者、三貫二百五十文、不動堂預敬音、可出之儀、評議治定了、

公事ノ費用

十三日、癸卯、興福寺衆徒、邦高親王ノ兄ト稱スル者ヲ逐フ、

〔大乘院日記目錄〕三　六月十三日、伏見殿舍兄云々、送木津天神、六方沙汰
也、拂奈良中、

奈良ヲ追放シ木津ニ送ル

〔大乘院寺社雜事記〕六十五　六月十一日、
一自夜前、號伏見殿舍兄、紀寺邊ニ被座、諸人群衆見之云々、
十二日、
一早旦伏見舍兄光臨、於公文所問答之、不得其意事也、先入申極樂坊万々ラ
堂了、予留守旨仰之了、大方不得其意人也、
十三日、
一伏見舍兄、今日自六方衆儀、仰付公人共、拂奈良中畢、送木津天神了、人夫以
下仰付紀寺郷民、最初請入故也、郷民等兵士以下ニテ送之、公人一人相副
了、希有比興事共也、

公文所ニ於テ問答ス

十五日、
一一昨日伏見舍兄事、六方沙汰不足也、爲學侶重而相催人夫等、至京都奉送
之云々、在所ハ雖何所、可任御所望云々、即時ニ人夫等召進之畢云々、陽明
奉公物共申、眞實ニ伏見殿御兄弟也、此亂初ニ他所ニ奉遷條勿論也云々、

近衛家奉公人等ハ親王ノ實兄ト主張ス

八月十九日、
一權中納言（聖條寺經茂）光臨、此間禁裏御番云々、京都無殊儀者也、先度伏見殿連枝云々、
此邊經廻送宇治邊申畢、自宇治大路方尋申伏見殿、無跡方云々、仍送山階
郷了、自山階郷又送伊勢道了、伏見殿より返事不得其意者也、

伏見宮家ヨリ事實無根ノ返答アリ

十六日、丙午、賀茂神主繼平ヲシテ、南禪寺善住庵領一原野坂ノ地ヲ、同庵ニ
渡付セシム、

〔親長卿記〕三十二　善住庵領一原野坂之北田地事、於隆算法印沾脚（却）之一段者、追可有糺明、去年
所務事押置云々、無其煩先可被渡付善住庵雜掌之由、可申旨候、恐々謹言、
六月十五日　賀茂神主（繼平）殿　親繼判

○賀茂神宮寺別當興祐ニ命ジ、善住庵領ヲ押妨スルヲ停メシムルコト、九年八月十八日ノ條ニ見ユ、

十七日、未、幕府、日野政資ノ所領京都四條町ニ禁制ヲ掲グ、

〔古文書〕二十四　○内閣記錄課所藏

禁制（政資）日野殿御領四條町（上者錦小路、東者室町、下者綾小路、西者西洞院、）

一軍勢甲乙人等亂入狼藉事

一檢斷以下如先規爲家門被下知之處、及異儀事

右諸公事爲免除地之處、或守護人、或侍所被官人成其綺事

右條々、堅被停止訖、若有違犯之輩者、可處其科之由、所被仰下也、仍下知如件、

文明十年六月十七日　　下野守三善（布施英基）朝臣　在判

大和守三善（飯尾元運）朝臣　在判

興福寺、中院ニ猿樂ヲ興行ス、仍リテ、有德錢ヲ奈良町民ニ課ス、

〔大乘院日記目錄〕三　六月十七日、於中院京都觀世大夫藝能祿物有德錢云々、

〔大乘院寺社雜事記〕六十五　六月十五日、

觀世元重藝能祿物

一社頭法樂、大藏大夫參申云々、社頭法樂之次第ハ、前日拜殿ニ可沙汰藝能之由、申入案内云々、自拜殿社中幷五ヶ屋ニ相觸之計也、三輩等ハ聞傳ニ參申至（被）見物云々、三輩ハ於經殿拜見之、以神人加下知者也、著座之外ハ經殿之北方ニ烈（列）立云々、衆中ハ細殿ニ例（列）立ス、

春日社頭法樂大藏大夫勤仕

十六日、

一社頭法樂、京都觀世大夫參申云々、明日於中院可有藝能、自六方以書狀局事可□（用）□（意カ）可有見物由、權（東林院彌藥）別當僧正ニ相觸申、使者專當返事□入趣也、但故障之間、不可參申由申之、付沙汰衆者也、

六方衆ヨリ見物スベキ旨ヲ告グ

十七日、

一中院猿樂在之、祿物用奈良中有德錢懸之、六方沙汰也、椿井扇屋菊若丸ニ懸之、御童子之間召上切符、返遣六方沙汰衆邊、御童子之由、念比ニ以實英令披露了、仍閣之由、六方書狀到來、則給菊若丸了、一蒲慶德法師之孫也、一昨日集儀（議）一決了、自雜掌柚留木方内々上意趣申下之間、六方畏入分ニテ祿物三十貫、大人二十貫、少（小）人五貫、合五十五貫下行云々、

菊若丸童子ノ故ヲ以テ有德錢ヲ免ズ

十八日、

古市胤榮元重ニ錢太刀ヲ遺ルル　元重伊勢下向

一觀世大夫古市所へ來、不能見參而三百疋幷太刀一振給之云々、勢州可下向間、越智所へ同可罷向旨申云々、

〔東院年中行事記〕八　六月十七日晴、丁未、於中院觀世大夫猿樂沙汰之見物事昨日自六方雖被申、不具之間不能見物、

十八日戊申、畠山政長ノ子某、始メテ幕府ニ出仕ス、

〔蜷川親元日記〕六　六月十八日、戊申、天晴、雨則晴、

一管領若子ゝ〜めて御出仕、同播磨(教基カ)三郎殿出仕、

十九日己酉、前權中納言正二位高倉永豐薨ズ、

〔公卿補任〕四十一　長祿元年　前權中納言正二位藤永豐、八十一、文明十六十九薨、

〔歷代殘闕日記〕八十七　言國卿記　六月十九日、曉藤中納言入道萬歲云々、言語同斷、

伊勢貞宗香奠ヲ贈ルル　官歷

〔蜷川親元日記〕六　七月十八日、戊寅、天晴、

一藤宰相殿へ爲御弔入道御親父藤中納言殿去月逝去、御出、入夜香奠五百疋被持之、

〔諸家傳〕八上高倉　永豐永藤卿男、母、　應永十四年誕生、同廿五年正月五日從五位上、十二歲、同卅三年正月六日從四位下、廿歲、嘉吉四年正月六日從三位、廿八歲、右兵衛如元、

世系　法號

文安六年正月五日正三位、四十三歲、寶德元年閏十月日參議、四十三歲、同二年三月廿九日備中權守、同三年月日辭、四十五歲、同四年閏八月十八日從二位、四十六歲、享德三年七月十四日權中納言、四十八歲、同四年月日正二位、四十九歲、康正三年六月十七日辭、五十一歲、同月十九日出家、五十一歲、法名常慶、文明十年六月十九日薨、七十二歲、

〔尊卑分脈〕藤氏高倉　長良孫

永藤　參議、正三位、

永豐　正二、權中、出家淨光、

永繼　正二、權中、

惠林院雜掌、典物刀劍ヲ故松田貞秀ニ橫奪セラルヽニ依リ、其子ヲシテ、之ヲ還付セシメラレンコトヲ幕府ニ請フ、

〔親元日記別錄〕(文明十年)中

一惠林院雜掌、一六十九、

應仁元年、下京住人松田次郎左衞門貞秀、祠堂錢質物に入置太刀幷箱一合事、山上に可預置之由申候間、任意見彼弟玄宗坊に預置候處、直に責取云々、松田雖死去、其跡有之間、可預御下知之由申候、

二十日、庚戌、幕府、松田秀興ヲ諸國段錢總奉行ト爲ス、

〔蜷川親元日記〕六　六月廿日、庚戌、天晴、

一諸國段錢惣奉行事、松田丹後守秀興、被仰付之、貴殿御奉、以御使蜷三郎兵衛尉、被仰遣之、

大内政弘、安藝西條ニ鏡城ヲ築キテ、其條規ヲ定ム、

〔大内家壁書〕

（政弘）法泉寺殿御判

安藝國西條鏡城法式條々

一當城衆當番、以名代不可勤事

一當城普請、每日不可懈怠事

一縱雖爲城衆知人、不可入城内事

一置兵粮無爲之時、不可配當城衆事

一博奕堅固可停止事

以上

右於背此旨之輩者、可致御成敗之由、所被仰出也、仍壁書如件、

文明十年六月廿日

〔參考〕

〔藝藩通志〕八十三　安藝國賀茂郡　鏡城墟　鏡山　御園宇村ニあり、大永頃、大内氏麾下藏田備中房信等これを守りしゑ、尼子氏ニ攻られて、房信自裁す、後大内氏復攻取て、家人某を置て守らしむといふ、

二十一日、辛亥、賀茂社前禰宜梨木祐香、前神主松下勝久ヲシテ、同社神樂用脚ヲ進納セシム、

世上無爲ニツキ元ノ如ク用脚ヲ進納セシム

〔親長卿記〕三十二

當社御神樂用脚事、就亂中公用未到、千疋可被（被脱カ）其沙汰之由、令申候者、世上云無爲、彼庄無相違之上者、如元可被致其沙汰之由、樂所申狀如此、不可有無沙汰之由、可申旨候、恐々謹言、

六月廿一日　親繼判

梨木前禰宜（祐香）殿

當社御神樂用脚事、已世上無爲之上者、如先々無其沙汰者、不可參勤之由、自

樂所歎申候、可爲何樣候哉由、可申旨候、恐々謹言、

六月廿四日　　親繼判

松下前神主殿（勝久）

當季御神樂事、今日神事可被闕怠之條不可然候、於子細者、追可被經御沙汰之上者、先可被致（參勤）遂（給）無爲之節之由、各可被存知之由、可申旨候、恐々謹言、

六月卅日　　親繼判

樂所中

樂所ニ命ジテ神樂ヲ行ハシム

當季御神樂事、於子細者、追可有御糺明之上者、今日之儀、先如此間無爲可參懃之由、堅被仰付候、其旨有（可聽カ）御存知候、可被仰合樂所候之由、可申旨候、恐々謹言、

二月卅日（六）　　親繼判

梨木前禰宜殿

二十二日、壬子、前權大納言葉室教忠ヲ大宰權帥ト爲ス、

〔公卿補任〕（文武官諸宣旨）四十三　前權大納言正二位藤教忠、五十六、六月廿二日任大宰權帥、

〔宮內省圖書寮所藏文書〕

文明十年六月廿日　宣旨

正二位藤原朝臣教

宜任大宰權帥

藏人左少辨藤原元長奉

奉入、

宣旨一枚

正二位藤原朝臣教　宜任大宰權帥事

右職事仰詞、內々奉入如件、

六月廿日　　權中納言（花押）（町廣光）

大外記局

〔兼顯卿記別記〕（○岩崎文庫所藏）七月十九日、己卯、晴、殘暑甚、及晚有夕立之氣、聊雷鳴、○中略町黃門語云、葉室前大納言拜任權帥宣下、今日到來候間、令下知云々、

文明十年六月二十二日

但六月三日宣旨也、今日職事藏人左少辨元長下知云々、頗延引歟、

○敎忠ノ罪ヲ赦シ、官位ヲ復スルコト、九年五月十八日ノ條ニ見ユ、

二十四日、甲寅、泉涌寺ニ、寺領攝津潮江莊ヲ直務知行セシム、

〔泉涌寺文書〕二　○山城

當寺領攝州潮江庄新免事、任先規、令全直務知行、宜專寺家再興者、天氣如此、仍執達如件、

文明十年六月廿四日　左中辨（花押）（勸修寺政顯）

泉涌寺住持

○攝津守護代藥師寺與一、潮江莊ヲ押領スルコト、三年八月二十日ノ條ニ見ユ、

義政、普廣院ニ詣ス、

〔蜷川親元日記〕六　六月廿四日、甲寅、天晴、

一御成普廣院御燒（香脚カ）七時、貴殿御供、七郎殿御供、近日御朦氣之後、今日御出仕、

幕府、山城守護代遊佐長直ニ命ジテ、東福寺南明庵ニ、其所領竝ニ末寺領ヲ還付セシム、

〔前田家所藏文書〕事林明證一

東福寺南明庵領山城國所々散在、目錄在別帋、并末寺領所々等事、被還補訖、早可被沙汰付雜掌之由、被仰出候也、仍執達如件、

文明十　六月廿四日　英基（花押）（布施）　元連（花押）（飯尾）

守護代（遊佐長直）

二十五日、乙卯、北野法樂連歌御會、

〔京都御所東山御文庫記錄〕甲二十山城　御湯殿上日記　六月廿五日、むろまち殿よりひふり五いろ万いる、御ゆうらくゑ御ゑん歌あり、御人もくゑん　ゑゆ寺大納言、新大納言あをちく　ゑんしゆ寺中納言、うてのこうちの中納言、みん部卿、新宰相中將、ゑけはるのあそん　ゑこう、ゑんしゆ所にて御ゆつけくこんゑと万いる、しやくあり（座敷）うす、とみ（五辻）中、

〔親長卿記〕九　六月廿五日、晴、參內、兵部番（御殿）代也、且昨日有召、有御連歌、參仕人々勸修寺大納言、藤（秀）、新大納言、季春、源大納言、雅行、予、勘解由小路前中納言、高清、勸修寺中納言、經茂、民部卿、忠富、新宰相中將、實隆朝臣、執筆重治朝臣等也、御祇候ノ人々　酌唐橋在數五辻富仲

祇候ノ人々

發句、

○コノ後、連歌御會ノコト、便宜左ニ合敍ス、

〔京都御所東山御文庫記錄〕甲二十○山城　御湯殿上日記　七月廿五日、御ぜん歌あり、くゐんしゆ寺大納言、お所しき中納言、うてのこうち、新中納言、ゑけむる朝臣、うのゆう内々のおとこさちをうゝゑこう、

〔親長卿記〕九　七月廿四日、晴、參内、番也、明日可參、可有御連歌云々、廿五日、晴、參内、兵部卿番代也、有御連歌、如去年廿五日、重治朝臣執筆、源大納言不參許也、其外同前、御發句、○御發句、所見ナシ、

月次連歌

〔兼顯卿記別記〕○岩崎文庫所藏　七月廿五日、乙酉、晴、○中略於禁裏有御連歌、毎月可爲御月次云々、自去月御張行云々、

菱喰邦高親王參内

〔京都御所東山御文庫記錄〕甲二十○山城　御湯殿上日記　八月廿五日、むろまちとのより御まゐ二色、又ゑりひしくゐへちに万いる、御ぜん歌あり、ゆしみ殿御万いり、ひしく寺れ御しやうくゐんれ御さゝ月万いる、

皇子御參内

〔親長卿記〕九　八月廿五日、晴、有召、參内、有御連歌、宮御方、伏見殿、勸修寺大納言、新大納言、予、勘解由小路前中納言、民部卿、姉小路三位、新宰相中將、實隆朝臣、

御發句

重治朝臣執筆、等也、

御發句　はくもあやはきぬ千種の仲乃秋

霧のまゝれの露ふゝき庭　宮御方

〔京都御所東山御文庫記錄〕甲二十○山城　御湯殿上日記　十一月廿五日、○中略御ぜん歌あり、内々れおとこさちゝうのゆうむろれ前大納言、くゐんしゆ寺れ大納言、うてのこうちれ前中納言、ゑけ春(治)れあそん、ゑら川、新宰相中將、

口宣案

〔公卿補任〕四十三　非參議正三位清宗賢　六月廿五日任侍從、

請文

〔宮内省圖書寮所藏文書〕文武諸官宣旨

文明十年六月廿五日　宣旨

正三位清原朝臣

宣任侍從

藏人左中辨藤原政顯奉

跪請

宣旨

正三位清原朝臣

宜任侍從事

右宣旨早可令下知之狀、跪所請如件、

六月廿五日　　大外記中原師富 請文

舟橋家ニテノ初例

皇子御師範ノ賞

可否ヲ諸卿ニ問ハル

宣旨

正三位清原朝臣宗賢

正二位行權大納言藤原朝臣敎秀宣、奉勅、件人宜令任侍從者、

文明十年六月廿五日　掃部頭兼大外記造酒正博士中原朝臣師富 奉

〔兼顯卿記〕（岩崎文庫所藏）　六月廿五日、乙卯、晴、清三位任拾遺、御讀書賞云々、

〔長興宿禰記〕（上）　六月廿五日、清三位宗賢卿任侍從、清家初度也、有勅問、若宮御師範賞也、

〔晴富宿禰記〕　四月廿九日、辛□（酉）終夜大雨、自午終剋止、

於清家傍例□□□□可爲一段之由勅定候云々、殿下御申詞又其分候、

昨朝御札於路次令拜見候之間、不能貴報、爲恐候、一ヶ條事、（一條兼良）（近衛房嗣）（九條政基）禪閤陽明、當殿下、

宗賢侍從ヲ望ム

甘露寺親長申詞

（壓司改平）（久我通博）左府、前右府等御申詞、昨日罷向中御（門脫カ）第加一見候、禪閤、陽明、左府、前右府御申詞可然之體候、殿下御申詞不可然之樣御申候、昨日罷出前左府（二條政嗣）第、尋申彼所存候、是も初例可然候とゝ難被申之由候、愚存之趣、演說申□申詞昨夕今朝之間、可被進歟之由存候、□右府第へも、昨日就此儀招引候間、罷向候、愚存之趣令申候、同心之由候、仍□□詞加意見候き、殿下御申詞□（歟）恩寺殿下御所爲とは相違候、□□□御申詞と存候、各御申詞未□（晴富カ）得候、重可進覽候、恐々謹言、

□□

四月七日

〔親長卿記〕七　文明八年五月廿一日晴、○中略去十六日、廣橋（大納脫カ）言示云、清三位宗賢、望申侍從、奏聞之處、可尋人々意見之由有仰、以頭辨少申之處、先參會之間示之云々、重可申由返答、今日注付、

宗賢三位拾遺所望事、凡卿位輩兼任爲規模之體云々、於家無例之上、且過分之候歟、但優侍讀之勞、准傍家之例、勅許宜在聖斷候乎、

江戸城主太田道灌、城中ニ日吉神社、荒神社、天神社ヲ建ツ、

〔太田家記〕一文明十年六月廿五日、城營の內山王權現堂、荒神宮、菅丞相の祠を建立し、鎭守とし給ふ、

廿五日は天神に縁有日也、山王權現荒神宮も、廿五日に建立有之さるゝ、

一右天神宮の棟札に、南閻浮提大日本國豐島郡江戸平河城内と有之候得者、昔天神宮ハ平川口ゟ内にて候也、

平河天神棟札

平河天神棟札寫

南閻浮提大日本國（武州ヶ）豐島郡江戸平河城内　奉行德壽

帝釋聖主天、中天、天長地久、本體觀世音、迦陵頻伽聲、御願圓滿、常在補陀洛、

本願人宗泉

奉造立天滿大自在天神宮一宇、大檀那太田左衞門大夫入道沙彌道灌

梵天哀愍衆生者、四海安寧、（德脫カ）爲度衆生、我等令敬禮、國土豐饒、示現大明神、

大工岡崎七郎左衞門國重　鍛冶河名三郎左衞門長吉

文明十年戊戌六月廿五日

右之天神宮、平河城内ゟ引ヶ候て、只今糀町四丁目に有之、天台宗に而、別當を龍眼寺と云、右棟札當天神に今以有之、

大工岡崎國重　鍛冶河名長吉

梅林坂

一梅林寺之天神之宮ハ、慶長十二年、前嶋之上服部半藏足輕町之南へ引と有之、平河口ゟ内に梅林坂と云有、此所に往古左樣之寺も有之、宮居も有たるゝ、此天神を糀町四丁目に造立、龍眼寺と云、天台宗にて、上野ゟ住職移る、

一山王御宮も、慶長十二年、貝塚村へ引ヶ、三河守樣御屋敷前に御建立、御奉行は内藤修理亮清成と、淺羽氏之記に有之、是も貝塚ゟ永田馬場松平主殿頭樣御屋敷跡へ引け、今以其所也、

一荒神之御宮は、何方に有之哉、知れ不申候、

一文明年中、道灌公、江戸城にも、川越之とくゝ、仙波の山王を鎮守ゟ崇め、三吉野天神を平川へ移給ふ、文明十年六月五日ゝは、日川之社ゟ準ゝ、津久戸明神を崇給ふ、又神田之牛頭天王、洲崎大明神は、安房之洲崎之明神と一體にて、武州神奈川、品川、江戸、何も此神を祝ひ崇め奉る、城の東に淺草寺、關東無双の觀世音、かゝる目出度靈佛靈社の中ゝ取たる城なれゝ、惡神惡鬼障碍を形すゑき樣も形し、誠ゟ無双の名城なるへし、○永享記略同ジ、

河越三吉野天神ヲ移スト云フ

津久戸明神

淺羽三右衞門殿ゟ書物に云、

道灌天神ヲ夢ミテ之ヲ勸請ス

一文明十年、道灌公夢中に菅丞相へ御對面被成候、然處よ翌朝人來り、菅丞相御自筆の天神像を道灌公へ進覽之、扨靈夢と思召し、御城之北之方わ、天神宮を御造立、社領等御寄附、梅數百本御植、宮之側ニ亭有、香月亭と云、

湯島天神

此天神宮則只今之湯島天神也、道灌公常々天神御信仰被成候、川越御城中にも三吉天神有之、

社頭詩歌會

〔梅花無盡藏〕五　花下晚步詩　并敘在武藏作

身居關左、而名傳海內者、太田二千石靜勝灌公而已、公宴坐一室、午睡之中夢見接菅丞相、其翌早有人、卒然來獻丞相所自筆之畫像、可謂靈夢也、遂建廟於江戸城之北畔、寄數十頃之美田、歲時鳴祭鼓、栽培梅數百株、頗似錦城之梅花海也、前年丙午（文明十八年）之春、共公遊廟下、詩之評也、歌之講也、爛熳花前、無愧洛社之會也、孟秋二十六公逝矣、余作文以祭焉、今茲丁未（長享元年）孟春下澣、率數輩之緇侶、徘徊廟下、追憶前年遊事、豈非夢之一覺耶、歎息不止、作是詩、投贈源六資康云、

移步一筇瘦、餘寒鶯度稀、去年丞相廟、今日故人非、老眼看花落、舉頭疑雪飛、岐陽千里外、山可笑遲歸、

平河天滿宮

〔寬政重修諸家譜〕二百五十三　太田清和源氏　資長

略○上

六月、津久戸明神の祠を江戸城外に建り、おれ月まゝ城內平川ゝ天滿宮を創建も、道灌或日一室に假寐も、夢に菅公にまみゆ、さ免て甚あやしむ、あくるあしゝ人來ゞて、菅公親筆なりといふ畫像を贈る、遂に祠をたてゝ其像を安置も、今の平川天滿宮ゝれなり、寬永系圖に湯嶋天滿宮なりといふ、社頭に數百株れ梅樹を栽、數十頃ゐ祠田を封し、はゝゝ三十番神堂今谷中本行寺ゝあり、を城中に立て鎭守とも、

〔參考〕

〔江戸名所圖會〕三　天璣之部　平川天滿宮　御城西麴町三町目の南平川町にあり、別當は天台宗ゝして、長松山龍眼寺と號け、東叡山に屬も、

傳云、當社は文明十年戊戌六月廿五日、太田持資、當國入間郡川越三芳野の天神を江戸城に勸請し、數株の梅を栽ると云々、今の御城內平川の梅林坂と唱ふるハ、其梅林の舊跡かり、新安手簡ゝ、文明中、太田道灌築かれゝ江戸城平河口の中、菅神の社上棟の文ゝ、文明十年戊戌六月廿五日と有之云々、其後天正十八年、御入國の頃、彼宮を平川口の外へ移さる、○註略ス、故に平河の天神と唱へ奉る、此故ゝ今の麴町の地ゝ至りても、舊名を改めも、猶社邊の町をも平河町と云、又其後慶長ゝ至ゞ、御本丸御造營の頃、竟ゝ今の麴町に地を改めさせ給ふ、○下略

日吉山王社

日吉山王神社　永田馬場あり、〇略中文明年中、太田道灌、此山王三所の御神を星野山より江戸に遷し奉る、其頃の社地ハ今の梅林坂のあたりにして、菅祠とあらひてあるべしよし、大道寺友山翁の説なり、或人云、太田家譜に、文明十年六月十五日、於江戸城内、建山王權現堂、荒神祠、菅丞相祠云々、菅祠ハ今の平川天神の事なり、御國初の頃迄ハ、兩社ともに御城内にありしを、菅祠ハ平川口御門の外へ遷され、山王ハ御城の鎮守として、紅葉山ゑ遷座ましまけるなり、天正より このゝた、江戸を以て、永く御當家御居城の地ゑ定させられし頃、紅葉山ゑ おいて、新ゑ社を御造營ありて、御産神ゑあゝめ給ふ、其後御城西貝塚の地へ遷さるゝ、〇註略ス、又承應三年甲午、回祿の後、溜池の築山勝地さるにより、竟ゑ台命ありて、今の地へ遷座なし奉り、宮社御造營ありしより、江府第一の宮居となるゝ、〇下略

津久戸明神

〔江戸名所圖會〕四天權之部　津久戸明神社　築土銀町にあり、此地ハ牛込と小日向の界にして、當社の方ハ牛込ゑ屬す、別當ハ天台宗ゑして、善龍山成就院と號ス、本地佛ハ聖觀音、傳敎大師ゝ作なり、相傳ふ、天慶三年庚子、相馬將門誅せられし後、其首級を當國江戸平川の觀音堂へ移し、是を齋く津久戸明神と稱ゝ、文明十年戊戌、太田道灌、江戸城の鎮守とし、宮社悉造立ありしといへり、永亭記（字下同ジ）ゑ、武州入間郡川越の城の乾に氷川明神の社あるゑ准へ、文明十年戊戌六月五日、江戸城の乾ゑ津久戸明神を勸請ゝと云々、江戸砂子ゑ、永亭記を引て、かくいひたれど、永亭記ゑ此事ゝえす、かんかふへし、又中古治亂記、江戸城を築し條下に、津久戸明神ハ氷川と同躰の由なれハ、素盞嗚尊なりとあり、

江戸神社トノ説

按ゑ、將門の靈は、後ゑ合祭しさるからん歟、南向亭茶話に云く、筑戸舊ハ次戸と書ゝ、往古は江戸明神とて、江戸城の鎮守さり、江と次と字形相似さる故ゑ、いつゝその頃よりゑ謬り來りしなるへしとあり、是ゑ依て考ふゝゝは、當社は武藏國風土記ゑ載ゝる所の江戸神社ならん歟、祭神もまさ素盞嗚尊ゑして、よく風土記に合せり、〇下略

湯島天滿宮

當社は往古上平川の地にありしを、天正七年己卯、田安の地に遷座、又元和二年丙辰、今の地へ移し奉る、昔ハ筑戸ゑ作る、後改めて築土とす、中古田安の地に鎮座の頃は、田安明神と唱へしとなり、〇下略

〔江戸名所圖會〕五衢之部　湯島天滿宮　妻戀明神の北ゝ方ゑあり、太田道灌江戸の靜勝軒ゑありし頃、文明十年六月五日也、夢中に菅神に謁見す、翌朝外ゑ ゝ菅丞相親筆の畫像を携來る者ある、乃夢中拜ゝ所の尊容ゑ彷彿さる 汝以て、直に城外の北に祠堂を營、彼神影を安置し、且梅樹數百株を栽、美田

等を附せ、卽當社是なり、以上諸社一覽、江戸名所記等の書より出るといへども、恐らくハ誤ならむ、麹町平河天神に、菅丞相眞筆の畫像と稱するものありて、かへつて當社より御影あることなし、其論あれども爰に略す、

二十六日、丙辰、和歌千句御會、

〔實隆公記〕五　六月廿六日、禁裏御會千句也、各百□（百カ）獨吟也、御製、近衛前關白（尚通カ）、左大臣（鷹司政平）、右大臣（近衛政家）、前內大臣（今出川敎季等）、德大寺前內大臣（實通）、前內大臣（葉室敎忠）、帥（勸）修寺大納言、按察、下官、姉小路宰相（基綱）、以上十一人也、

義尙、蔭涼軒ヨリ尊氏ノ肖像ヲ徵シテ、之ヲ觀ル、

〔蜷川親元日記〕六　六月廿六日、丙辰、天晴、一等持院殿御影（御甲冑、御鎧紺糸、御馬河原毛）、同一幅（御帶）、御方御所樣御拜見、蔭涼より被召寄、自貴殿以御使（野依）被仰之、御一覽已後、則被返遣之、

齋藤妙椿、一條兼良ニ金ヲ贈ル、

〔大乘院寺社雜事記〕六十五　六月廿六日、一石左衞門自三乃罷上、禪閤へ三千疋法印進之云々、〇略中來月初、可有御社參之由、自禪閤被仰下之、

廣橋系圖燒失

諸家系圖陣中ニテ燒亡ス

二十七日、丁巳、義尙、廣橋兼顯ニ廣橋系圖ヲ貸與センコトヲ求メ、尋デ、一條兼良ニ諸家系圖ヲ借リテ、之ヲ寫ス、

〔兼顯卿記〕〇岩崎文庫所藏　六月廿七日、丁巳、晴、申剋許夕立雷鳴、無程屬晴、自宰相中將殿有御使（松阿彌）、當家系圖事、可借進之由、被仰侍從處、先年自室町殿依仰（〇八年七月十七日ノ條參看）、進上之由申間、片時可召進由也、去々年火事（〇八年十一月十三日ノ條參看）之時、紛失之由申入者也、

〔兼顯卿記別記〕〇岩崎文庫所藏　八月十五日、甲辰、晴、〇略中以次滋野井前宰相中將申、續現葉和歌集餘分御料紙之事、幷先年諸家系圖可被書寫之由被仰下間、諸家系圖各注進之處、依先年火事、於殿中陣屋紛失、其後無被仰下之旨之間、不及申沙汰、爰禪閤御所持本可然由有嚴命、若可被書寫者、可被召哉之由、同伺申處、可被書（ヒ）并風（ヒ）、其ニモ可成寫本哉由被尋下間、可爲包（マヽ）樣一段歟、然者可成御本哉由、重而申入處、借用申可進上由、被仰下者也、右條々以殊鶴喝食申入者也、

三十日、庚申、御祓、

〔京都御所東山御文庫記錄〕甲二十〇山城　御湯殿上日記　六月卅日、御ゆもる、

こよひの御ゐにしむきにてあり、御さら月いつものことし、

〔兼顯卿記〕○岩崎文庫所藏　六月廿七日、丁巳、晴、申剋許夕立雷鳴、無程屬晴、○中略

自室町殿有御使、飯尾江守　六月祓御輪可奉入之由也、可存知之由申入者也、

卅日、庚申、晴、晩頭夕立聊洒、八過程參小河殿、六月祓御輪役參懃之、次參宰相中將殿、次參三寶院殿、

幕府、攝津守護代藥師寺元長ヲシテ、春日社及ビ興福寺領攝津山路、加納、武庫恒松等ノ貢租ヲ押妨スルモノヲ停止セシム、

〔大乘院寺社雜事記〕六十七　文明十一年正月二日、

一松林院得業持來舊冬御奉書如此云々、

春日社兼興福寺領攝津國山路加納幷武庫恒松村、稻垣村、西小屋、富松、（恒松稻垣ハ武庫庄内ノ少名也云々、ホカ）

濱鄕、倉垣等事、爲嚴重之神事法會料所之上者、早退押妨之族、可被沙汰付寺門雜掌之由、被仰出候也、仍執達如件、

文明十　六月卅日　（飯尾）爲信判　（布施）英基判

守護代

守護執達狀

春日社兼興福寺領攝津國山路、加納幷武庫恒松村、稻垣村、西小屋、富松、濱鄕、倉垣等事、爲嚴重之神事法會料所之上者、早任去六月卅日御奉書之旨、退違亂之族、可被沙汰付寺門雜掌之由也、仍執達如件、

文明十　十二月廿二日　（齋藤）元右判

藥師寺備（元長）後守殿

（抽留木書狀也、）

攝州御領公方奉書、當納以後遵行之由、被申打置候處、安富方より申之間、後致披露遵行事、奉行へ百疋禮を致沙汰、仍公方奉書遵行二通正文進上候、守護代被付遣、可打渡候哉、但當所務をは、所々致沙汰候者、雖遲々、神供料所事、定而被付遣、遵行沙汰被聞召、御沙汰可然存候、致難澁候はゝ、堅可申沙汰仕候之由、可有御披露、恐々謹言、

十二月廿九日　重藝判

行觀御房

山城守護畠山政長、三鈷寺ニ、寺領竝ニ諸塔頭領ノ山城ニアルモノヲ安